

博士学位論文

居場所としての地域施設計画に関する研究

A Study on Planning of Regional Facilities Focusing on Place Making for the Residents

2009 年 7 月

木 下 誠 一

Seiichi Kinoshita

居場所としての地域施設計画に関する研究

(A Study on Planning of Regional Facilities Focusing on Place Making for the Residents)

論文の要旨

1章～第2章 研究の背景・目的・方法

本研究は、その必要性が社会的に重要な課題として受けとめられている居場所に着目し、経験的で試行錯誤的に取り組まれている居場所づくりに対して有効となり得る、居場所としての地域施設の計画的要件を明らかにすることを目的とする。なお、居場所とは、『物理的・対人的環境を拠り所に安心して居られる場所』と定義した。

本研究の特徴は、関連する既往研究の多くにみられるように対象を特定の建築種、属性に限定するのではなく、また、施設内部の居場所選択行動だけでなく地域における施設選択構造にも焦点を当て、居場所を支える運営面にも着目することで、多様な居場所を総合的に把握・整理し、ハード・ソフト両面から計画的指針を得ようとする点が特徴的である。

第3章 地域住民の居場所の選択特性

そもそも人々はどのような場所を居場所とし、地域施設はどのような位置づけにあるのかについて、必ずしも既往研究で明らかになっていない。そこで、三重県の地域特性が異なる4地区を調査対象に選定し、地域住民の居場所選択の実態やニーズを、アンケート調査をもとにマクロに統計的に捉え、地域施設の選択要因について、属性別、ライフスタイル別、地域別、組織活動参加状況などの観点から分析し、地域住民の居場所の選択特性を概観した。

その結果、居場所選択の実態では、一人当たりの選択場所数は、加齢に伴い減少し、選択場所は自宅、民間施設は減少し、公共施設は増加する傾向にあり、若年層と高齢層では対照的な特徴がみられることが明らかとなった。また、施設整備状況や自然環境などの地域特性が施設選択に顕著に影響し、5つに類型化したライフスタイルの観点からもタイプ別に特徴がみられた。特に、地域施設の選択は、地域活動の参加有無が関係し、参加層は公共施設を主に選択し、不参加層は民間施設を選択する傾向にあることがわかった。地域活動では、多くの団体が活動拠点を有し、主に公的集会施設を選択していた。居場所の選択要因では、施設サービスよりも場所における人間関係やアクセス面が重視されており、居場所として地域施設に求める共通因子(5因子)を見出した。このうち「社会的」「個人的」は他者との人間関係の状態を表すことから、物理的空間だけでなく、誰と過ごせる環境かが重要であることを指摘した。

第4章 高齢者施設における居場所の選択特性

交通手段や経済面などで制約があり、特に地域施設における居場所整備の必要性が高いとみられる高齢者と中高生は、共通点を有する一方、所属組織の有無や身体能力、余暇時間の長さなど、対照的な性格も持ち合わせており、第3章においても選択特性に違いがみられた。そこで、代表的な高齢者専用施設である老人福祉センターを対象に、施設における高齢者の過ごし方の実態を捉え、居場所選択に及ぼす影響が大きいとみられる他者との人間関係に着目し、施設及び諸室選択との関係について捉えた。

その結果、利用者の7割以上がほぼ毎日利用し、常連化している実態が窺え、高齢者の過ごし方をみると、

運営上、基本的に利用者の自主性を尊重していることから、利用者個人が主体的に多種の施設サービスを利用して過ごしていることがわかった。その多様な過ごし方を、利用頻度、滞在時間をもとに6タイプに類型化し、整理した。

他者との人間関係と施設及び諸室選択との関係については、高齢者の約8割が「交流」を期待して訪れており、主にロコミで利用するようになり、次第に習慣化、常連化していくとみられる。施設選択では、複数の施設を使い分けたり、最寄施設を利用せずに、人間関係やプライバシー等の理由から遠方施設を選択する実態が捉えられた。また、他者との交流意識を、その親密度の度合いによって4タイプに類型化したところ、交流型と非交流型では利用諸室の選択に違いがみられ、交流タイプと過ごし方の類型や滞在時間にも特徴的な関係がみられた。

第5章 中高生の居場所の選択特性

第5章では、中高生の「居場所」について、様々な施設種、規模、設え、運営形態などを有する三重県の「青少年居場所づくり」の取組事例を対象に、施設の立地・空間、運営特性を比較分析を行うことによって把握するとともに、「居場所」の立地・空間、運営特性が他者との人間関係に及ぼす影響について捉えた。

その結果、一般の中高生の居場所選択では、商業娯楽施設が中心となっており、その選択要因として、立地の良さや無料であることが基礎的要因となっていることが明らかとなった。居場所づくり行う調査対象施設を4タイプに分類し、特徴をみたところ、近隣型は、他者と親密な関係を形成できる施設、広域型は、人間関係よりも個人の利用目的を優先する施設として選択される傾向にあり、近隣型（公共）は、目的を共有した仲間と一緒に利用できる施設、近隣型（民間）は、特定の利用目的をもち、雰囲気を楽しむ仲間と過ごせる施設として選択される傾向にあることがわかった。この要因として、施設規模（広域型：大規模、近隣型：小規模）、諸室構成や設えなどの空間特性、そして運営者の存在と関わり方、プログラムの有無といった運営形態が他者との親密度や居場所選択にも影響していることがわかった。

第6章 居場所モデルの構築と計画的要件

居場所を計画する上で有効となり得る居場所モデルの構築及び計画的要件・計画手法を提示した。まず、利用特性の観点から、居場所の性格を特徴づける評価軸として、「人間関係（不特定／特定）」と「空間（滞在性・高／滞在性・低）」の2軸を設定し、これら2軸をクロスすることによって「自習室型」、「ロビー型」「サロン型」「集会室型」の4タイプを見出した。また、運営特性の観点から、「利用制限（限定／自由）」と「交流活動支援（あり／なし）」の2軸を設定し、その組み合わせから4タイプに分類した。そして、利用特性と運営特性の軸である、「人間関係」と「交流活動支援」は他者との人間関係の構築という点で、また、「空間」と「利用制限」は活動目的への適合という点で密接な関係にあると考えられるため、両者を重ね合わせることで、空間及び運営をワンセットにした居場所モデルを構築した。この居場所モデルをもとに計画的要件を整理し、具体的な計画手法について考察した（「居場所への立地アクセス」、「居場所の配置と連携」、「居場所の複合化」、「居場所の空間と運営」）。

第7章 結論

各章のまとめと今後、居場所としての地域施設計画を行う上での展望と課題について述べ、結論とした。

以上

目 次

第1章 序論（研究の背景）	1
1-1 居場所をめぐる社会的背景	3
1-2 居場所の基本概念	4
1-3 異なる性格をもった複数の居場所の必要性	5
1-4 地域・都市における自宅、職場・学校以外の居場所の必要性	6
1-5 居場所としての地域施設	8
第2章 研究の目的と方法	11
2-1 研究の目的	13
2-2 研究の方法	13
2-3 研究対象の施設・地域	15
2-4 研究対象の属性	15
2-5 用語の定義	19
2-6 既往研究の整理と本研究の位置づけ	19
2-6-1 既往研究の整理	19
2-6-2 本研究の位置づけ	23
第3章 地域住民の居場所の選択特性	27
3-1 本章の目的と方法	29
3-1-1 目的	29
3-1-2 方法	29
3-2 属性からみた「自由な時間を過ごす場所」の選択特性	33
3-2-1 選択場所	33
3-2-2 利用形態	35
3-2-3 属性からみた選択特性	36
3-3 ライフスタイルからみた「自由な時間を過ごす場所」の選択特性	39
3-3-1 ライフスタイルの類型化	39
3-3-2 選択場所と利用形態	43
3-3-3 ライフスタイルからみた選択特性	43
3-4 利用者が抱く施設像	45
3-4-1 施設種の利用形態	45
3-4-2 施設像の類型化	45
3-4-3 施設種の施設像	47

3-5 「自由な時間を過ごす場所」の地域差	49
3-5-1 地域別の施設整備状況	49
3-5-2 選択場所の地域差	49
3-5-3 ライフスタイルの地域差	50
3-5-4 施設像の地域差	50
3-6 組織活動としての居場所の選択特性	51
3-6-1 団体の活動実態	51
3-6-2 団体の結成と新たな加入	51
3-6-3 活動実績にみる施設利用の実態	55
3-6-4 組織活動への参加促進要件	57
3-7 小括	60
第4章 高齢者施設における居場所の選択特性	63
4-1 本章の目的と方法	65
4-1-1 目的	65
4-1-2 方法	65
4-1-3 施設概要	66
4-2 老人福祉センターの利用状況	67
4-2-1 施設データからみた利用状況	67
4-2-2 ヒアリングデータからみた利用状況	69
4-3 利用契機と利用理由	69
4-3-1 利用契機	69
4-3-2 利用理由	73
4-4 利用者類型と過ごし方	73
4-5 施設選択特性	75
4-5-1 複数館利用	75
4-5-2 遠方館利用	77
4-5-3 老人福祉センター以外の利用	77
4-6 諸室選択特性	79
4-6-1 諸室の利用形態	79
4-6-2 交流意識からみた利用者類型	79
4-6-3 交流意識からみた選択特性	82
4-7 小括	83

第5章 中高生の居場所の選択特性	85
5-1 本章の目的と方法	87
5-1-1 目的	87
5-1-2 方法	89
5-2 中高生の生活実態	91
5-2-1 自由な時間を過ごす場所	91
5-2-2 交通手段と日常生活圏	91
5-2-3 対人関係と充実感	93
5-2-4 施設整備の課題	93
5-3 「居場所」の利用特性	93
5-3-1 対象施設及び利用者属性	93
5-3-2 利用状況	93
5-3-3 施設選択要因	95
5-3-4 「居場所」の利用特性	96
5-4 近隣型の立地・空間特性	97
5-4-1 アクセス環境	97
5-4-2 周辺環境	97
5-4-3 「居場所」の設定	97
5-4-4 施設の諸室構成	99
5-4-5 「居場所」の設え	100
5-5 「居場所」の運営特性	103
5-5-1 運営主体	103
5-5-2 開館日	103
5-5-3 企画活動	104
5-5-4 運営者の役割	104
5-5-5 広報活動	105
5-5-6 「居場所」間の連携	105
5-5-7 運営資金	105
5-6 広域型の「居場所」の空間・運営特性	107
5-6-1 空間特性	107
5-6-2 運営特性	109
5-7 「居場所」の成立条件	110
5-7-1 近隣型の「居場所」の成立条件	110
5-7-2 広域型の「居場所」の成立条件	111
5-8 小括	112

第6章 居場所モデルの構築と計画的要件	115
6-1 居場所モデルの構築	117
6-1-1 利用特性からみた居場所の類型化	117
6-1-2 運営特性からみた居場所の類型化	119
6-1-3 居場所タイプと居場所運営との関係をふまえた居場所モデル	121
6-1-4 居場所モデルと計画的要件	123
6-2 居場所の計画手法	125
6-2-1 居場所への立地アクセス	125
6-2-2 居場所の配置と連携	125
6-2-3 居場所の複合化	127
6-2-4 居場所の空間と運営	130
6-3 小括	133
第7章 結論	135
7-1 結論（各章のまとめ）	137
7-2 今後の展望と課題	141
参考文献・研究業績	145
おわりに・謝辞	153

第1章 序論（研究の背景）

第1章 序論（研究の背景）

1-1 居場所をめぐる社会的背景

注 1-1) 全国の学校で放課後や休日に、地域の大人の協力を得て、安全で安心な「子どもの居場所」を確保し、スポーツや文化活動など多彩な活動が展開されるよう、家庭、地域、学校が一体となって取り組む計画。文部科学省が2004年度に策定し、2006年度までの3カ年計画。全国で約1万ヶ所設置（2006年度）。

注 1-2) 閉じこもりがちな高齢者の仲間づくり・生きがいつくりなどを目的に行われる、地域住民による小規模で自由な自主的活動。社会福祉協議会が1994年以降に活動実施し、2008年度時点で、全国で約3万ヶ所設置（「社協情報ノーマ No. 220」より）。

注 1-3) 主に乳幼児をもつ子育て中の親が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合うことで、精神的な安心感をもたらし、問題解決への糸口となる機会を提供する場。厚生労働省が2002年度創設し、全国で829ヶ所設置。

近年、公共施設や空き店舗等を利用した居場所づくりの取り組みが各地で展開されている。例えば、青少年が放課後や休日に自由に過ごせる健全な「居場所」（「子どもの居場所づくり新プラン」^{注 1-1)} 等）、退職後の高齢者などが社会と関わりを持ち、生きがいを得ることのできる「居場所」（「ふれあい・いきいきサロン」^{注 1-2)} 等）、育児不安を抱き、孤立しがちな子育て中の主婦が安心して集える「居場所」（「つどいの広場事業」^{注 1-3)} 等）など、子どもや若者、子育て主婦、高齢者等を対象に、安心して過ごせ、他者と交流できる居場所を地域の中に設けようとするものである。

こうした居場所づくりが求められる社会的背景には、余暇時間の増大、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化、青少年問題などがあげられる。企業や学校の週五日制の普及により、余暇時間が増加し、その受け皿として充実した時間を過ごせる場所の必要性が高まっている。少子・高齢化社会の進展は、団塊世代に代表されるように定年退職後の生活において、いかに仕事中心から生活重視へと意識転換をはかり、健康を維持し生きがいをもった活動を続けることができるかが課題となっている。また、高齢者の引きこもりや介護予防対策の観点からも外出・交流機会をもたらし場所が求められている。

しかし、核家族化や都市化等によって地域での共同意識や人間関係が希薄化することで個人や家族が孤立しがちであり、地域との接点を見出すことが難しくなっているのも事実である。高齢者のみならず、子育て中の主婦についても孤立化が危惧されており、気軽に子育てに関する相談や情報交換ができ、お互いに助け合うことのできる人が家族や近隣におらず、地域で子どもを見守ることも期待できず、子育てに不安を抱く主婦も多い。また、都市化に伴い子どもが安全で自由に遊べる場所も減少し、子育て環境としての地域整備が求められている。

いじめ・不登校問題や相次ぐ犯罪などの青少年問題も、学校の友人や家族、地域との関係がうまく築けていないことが少なからず影響している。1970年代から80年代にかけて様々な理由で学校に行けない、行かない不登校の子どもたちに対し、学校以外で安心して居られる場所の設置が問題となり、フリースクールなどが誕生している。その後、文部省の政策文書^{文 1-1)}においても、学校が子どもにとって自己の存在感を実感でき精神的に安心できる場所（心の居場所）となることが重要であるとの指摘がなされ、居場所は不登校の児童生徒に限らず、

文 1-1) 学校不適応対策調査研究協力者会議：登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して－、文部省、1992
文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041108.htm

広く子どもや若者に共通して必要であるということが意識されるようになっている^{文1-2)}。

このほか、サラリーマンなどの有職者においては、従来の終身雇用制度が崩れ、会社への帰属感情も薄れる一方、個人主義が広まり家族との関係も希薄化するなかで、家でも職場でもなく、オンとオフが切り替えられ自分を取り戻すことのできる中間的な場所の存在が注目されている(1-4 参照)。

このように、今日、子どもや高齢者に限らず、幅広い人々にとって地域の中で過ごせる居場所が必要であり、居場所を提供していくことが社会的に重要な課題となっている。

1-2 居場所の基本概念

今日、日常的によく使われる“居場所”という言葉は、1970年代に会社の仕事にかまけていた中高年の男性が「家庭に居場所がない」と家庭で疎んじられている状態などに用いられていたが^{文1-3)}、前述の居場所づくりのように、意図的に計画された場所(施設)を指すこともある。このように“居場所”の捉え方は人によって様々であり、その定義は明確に定まっていない。

そこで、居場所とは何か、その基本的な概念について、辞書のほか当該専門分野である建築学、さらに心理学や教育学、社会学等において居場所を扱った文献の中から、その特徴的な言説を以下にいくつか取り上げ考察する。

広辞苑^{文1-4)}では、“居場所”は「いるところ。いどころ」、大辞林^{文1-5)}では、「人が居る所。いどころ」とあり、主として物理的空間を意味するが、日本国語大辞典^{文1-6)}では、「人が世間、社会の中で落ち着くべき場所。安心していられる場所」との記述があり、前述の社会問題等を背景として、単に物理的空間だけでなく、心理的にも安心感を得られるような場所としての意味合いを含んでいる。

文献においては、山田(2007、建築学)は、居場所とは「対象者が滞在している場所、あるいは対象者がなんらかの活動をしている場所を指す」^{文1-7)}としており、主に人が居る物理的空間を指している。

藤竹(2000、社会学)は、現代人の居場所について、「人間はある場所に対して、こここそが自分のものであり、落ち着きや安定感、充実感や所属感覚、さらには保護されているという感覚などを持つことができたとき、その場所は居場所となる」^{文1-8)}と述べ、心理的な安定感を重視している。

住田(2003、教育学)は、子どもの居場所について「子ども自身がホッ

文1-2) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わり」の場へ、学陽書房、2001

文1-3) 久田邦明 編：子どもと若者の居場所、萌文社、2000

文1-4) 新村出 編：広辞苑(第6版)、岩波書店、2008

文1-5) 松村明 編：大辞林(第3版)、三省堂、2006

文1-6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編：日本国語大辞典(第二版)、小学館、2001

文1-7) 山田あすか：ひとは、なぜ、そこにいるのか「固有の居場所」の環境行動学、青弓社、2007

文1-8) 藤竹暁 編：現代人の居場所、至文堂、2000

文1-9) 住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、九州大学出版会、2003

と安心できる、心が落ち着ける、そこに居る他者から受容され、肯定されていると実感できるような場所」^{文1-9)}と述べ、他者との共感的な関係を重視している。

久田(2000、教育学)は、「彼らが大人になるための空間と人間関係を確保すること」と述べ、この2つの要素が確保できた場所を居場所としている^{文1-3)}。

田中(2001、教育学)は、「未来への展望という時間軸と現在の自分の位置どりという空間軸とが交差するところに形成される。そして居場所を確保していくためには他者との関わりという第三の要素が欠かせない」としている^{文1-2)}。

文1-10) 芹沢俊介：座談会 居場所(藤竹 暁 編：現代人の居場所)、至文堂、2000

その一方で、芹沢(2000、社会学)は、「人間関係が傷ついてしまっているとすれば、あまり侵入的でないところが求められる」^{文1-10)}と述べるように、必ずしも共感的関係だけでなく、他者からの侵入されない個人的な避難場所、癒しの場としての居場所も必要であることを指摘している。いずれにしても、他者との人間関係のあり様が居場所となるか否かの要因になりうるとみられる。

文1-11) 佐々木英和：ケータイ・インターネット時代の自己実現感(田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わり」へ、5章)、学陽書房、2001

また、佐々木(2001、心理学)は、「居場所は、それが必ずしも物理的次元での空間を意味するものとは限らず、むしろ心理的に安心できる空間という意味合いのほうが重視される。」^{文1-11)}と述べ、物理空間を媒介したものでなく「情報空間」すなわち各種メディアを媒介とする空間の中に居場所を求める可能性が開けているとしている。

このように、各研究者によって居場所の解釈は様々であるが、共通点も見出すことができる。総じて、居場所とは、物理的空間だけでなく、そこに居る個人の安定した心理状態や、他者との人間関係を含めた概念として捉えることができる。

1-3 異なる性格をもった複数の居場所の必要性

居場所を物理的空間だけでなく他者との人間関係なども含めて捉えると、その関係から異なる性格をもった複数の居場所が想定される。

文1-12) 加藤仁：定年後 豊かに生きるための知恵、岩波書店、2007

加藤は、定年退職者の居場所を「私的な場所」と「公的な場所」に分けている^{文1-12)}。「多くの定年退職者は、無意識のうちに居場所を二つ確保している。一つは、下着姿で気軽にゴロ寝ができるような私的な場所である。だれからもとやかく言われず、ひとり居ることを心ゆくまでのしみ、孤独と向かい合う場所である。もう一つは、少ばかり気どってみせたり、格好をつけたり、緊張したりと、自分の姿を他人にさらす公的な場所である。地域活動とか、趣味のサークルとか、第二の職場とか、社会活動の場である。その二つの居場所によって気

持ちのバランスを保つことになる。」としている。

藤竹は、居場所を「社会的居場所」と「人間的居場所」の二つに大別し、前者は自分が他人によって必要とされ、自分の資質や能力を社会的に発揮することができる場所であり、後者は、自分であることを取り戻すことができ、そこにいと（そこに帰ると）安らぎを覚えたり、ほっとすることのできる場所であるとしている^{文1-8)}。「社会的居場所」には、家庭や職場のほか、レジャーの観念が浸透してきた今日、趣味（自分の好きなことをすること）もまた、居場所の中核になるとしている。人間的居場所は社会性の弱い居場所であるが、家庭や自分の部屋など、私的空間を形成し、社会的居場所で感じる緊張を解放する場所として、人間にとって不可欠の場所であると述べている。また、これら二つの主要な居場所の他に「匿名的居場所」を加え3分類としている。都市化社会においては、群衆のなかに紛れ込むことによって匿名的な状態になり、かえっていままでの自分から抜け出し、自分を取り戻せるとしている。

住田は、居場所の構成条件に主観的条件^{注1-4)}と客観的条件（関係性、空間性）^{注1-5)}をあげ、子どもの居場所は子どもが自分自身で解釈し、実感した自己受容感、自己肯定感、安心感、居心地の良さ、安らぎといった感覚的意味（主観的条件）を、[関係性－空間性]という形で一体化された一組の客観的条件に付与することによって形成されるものとしている^{文1-9)}。この客観的条件である関係性（他者との共感的な関係の有無）と空間性（物理的な空間・場所の共有又は専有）に対し、それぞれ社会的－個人的という軸を立て、この2軸の構成から居場所を4タイプ（I～IV）に分類している^{注1-6)}。

I～IVの各タイプによって機能は異なるが、複数あるタイプの居場所を持つほど多様な他者に肯定的に評価され自己概念^{注1-7)}は安定化すると述べている。

以上のように、加藤は2つ、藤竹は3つ、住田は4つの異なる性格をもった居場所に分類しているが、共通していえることは、これらのうちいずれかのタイプの居場所があれば良いというのではなく、人々は複数の居場所を有することによって、生活にメリハリをつけ、心理的なバランスを保つことができるということであり、いかにこれらの場所を地域の中で関係づけながら、生活環境を構築していくかが重要であるといえる。

1-4 地域・都市における自宅、職場・学校以外の居場所の必要性

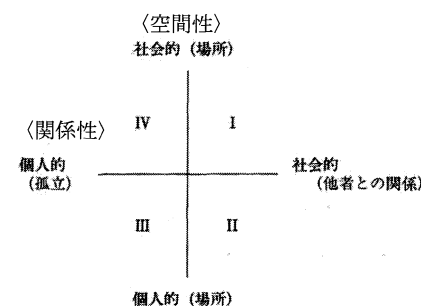
藤竹のいう人間的居場所には自宅があげられ（第1の居場所）、社

注1-4) 主観的条件とは、子ども自身がその場所を自分の「居場所」として実感し、その場所に自分の「居場所」としての意味を付与するという主観性のこと。物理的な場所の如何にかかわらない。子ども自身が抱く実感や意味によって、同一の場所であっても「居場所」になったりならなかったりする。

注1-5) 客観的条件には、関係性と空間性という2つの条件がある。関係性は、そこにおいて形成される安定的な他者との共感的関係であり、空間性は、その実際の関係が営まれる一定の物理的空間を指す。

注1-6)

- ・I型は、他者との共感的な関係性が安定的に形成されている社会的な場所としての居場所。学校や地域での仲間集団。
- ・II型は、他者との共感的な関係が私的空間において形成されているという居場所。親や兄弟といった家族のメンバーとの親密な関係が形成される家庭など。
- ・III型は、他者との関係性から切り離されて孤立した状態のまま、私的空間を居場所とする。
- ・IV型は、他者と関係性から切り離されて、孤立しているにもかかわらず社会的な場所を居場所とする。



注1-7) self-concept. 自らが自己を対象（客体）として把握した概念。自分自身についてもっている考え。

会的居場所の代表的なものとしては、職場や学校（第2の居場所）があげられる。しかし、人々の生活は、この両者によって完結するものではない。

水月らは、Werner & Altman を引用し、「Werner & Altman (1998) は、領域 (territory) の発達に関しては、専有度のもっとも高い家などの一次的な領域 (primary territory) と、公共空間の中で一時的に使用される公的な領域 (public territory) とのあいだに、個人が好きな場所、よく訪れる場所を二次的な領域 (secondary territory) として区別した。二次的な領域は、子どもが近隣において形成する重要な場所であり、それらを持つことによって子どもは家以外に自分が安心のできる拠点を地域内に確保することができる。」と述べている^{文1-13)}。

また、高橋は「昔はわが家と学校という自分たちの場所以外の公共空間＝都市に公と私の間領域として子どもを受け入れる場所があった。例えば、顔馴染みの駄菓子屋・神社の境内・空き地に捨ててある段ボール箱など、子ども自身の、自分たちの世界を形成できる拠点である。現在、都市の中にこうした中間拠点が姿を消してしまい、子どもは行動領域が拡大した途端に大人の世界に投入されてしまう。その結果、公との付き合い方を学ぶ暇なく、いえや学校での私の殻を身につけたまま、公共の場所へと進出してしまうのである。」と述べている^{文1-14)}。

いずれも子どもの生活環境に対する発達心理学上の見解であるが、自宅と学校のほかに、二次的な領域や中間拠点ともいうべき居場所が必要であることを指摘している。また、同様に子ども以外の他の属性に対しても、都市社会学の観点から、磯村は「第三の空間」、レイ・オールデンバーグは「サードプレイス」と称して、その必要性を論じている。

磯村は、「第三の空間」について「都市の人間は、毎日三つの異なった空間のなかで生活する。三つの空間とは、いうまでもなく、住居を中心にした家庭（第一空間または生活空間）、仕事を中心とした職場（第二空間または生産空間）、そしてレクリエーションのための空間（第三空間、大衆空間）である。第三の空間は、たとえそれが都心の職場周辺にあろうと郊外の住宅地域にあろうと、地元的・職場的な人間関係とはかけ離れた状態にあることである。（中略）この空間の存在こそ、人間にとって、都市を魅力あるものとするものである。」と述べている^{注1-8)}。

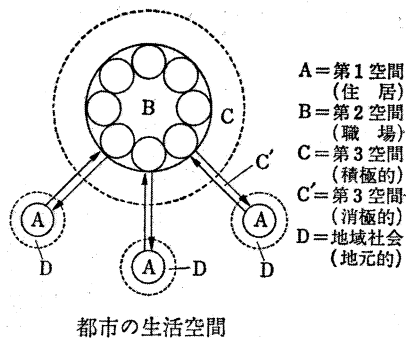
レイ・オールデンバーグは「サードプレイス」について、「人間には、住む場所＝第一の場所、働く場所＝第二の場所、遊び心にあふれ、家庭のように快適で楽しめる場所＝第三の場所が必要」であり、具体的

文1-13) 水月昭道・馬場健彦・南博文：

下校時の帰宅路に見られる子ども道草行為とみち環境との関係（住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、第10章）、九州大学出版会、2003

文1-14) 高橋鷹志：子どもを育てるたてもの学、チャイルド本社、2007

注1-8) 磯村英一：人間にとって都市とは何か、NHK ブックス、1968



に、「カフェ、書店、バー、ヘアサロン、その他行きつけの場所」をあげている。また、「人間は、形式張らない社交の場に集い、仕事や家庭の問題を忘れ、くつろいだ雰囲気です話をしたいという欲求を持っている。ドイツのビアガーデン、イギリスのパブ、フランスのカフェは、日常生活の憩いの場だ。そこはニュートラル・グラウンド（中立地帯）であり、社会的地位はさておき皆が平等に扱われ、会話が主たる活動となる。」と述べている^{文1-15, 文1-16}。

このように、人々は最も親密でベーシックな居場所となる自宅や日常的に通う職場・学校のほかに、これらとは異なる第三の居場所ともいべき場所が地域や都市の中に必要であり、また、その場所の多様性が生活を豊かにし、都市や地域に魅力をもたらすこととなる。つまり、第三の居場所としての地域施設が重要な役割を果たすものと考えられる。

1-5 居場所としての地域施設

大辞林によると「施設」とは、「ある目的のために、建造物などをこしらえ設けること。また、その設備」とある。また、地域施設とは、一般に地域における住民の生活の質に密接にかかわる建築的施設を呼び^{文1-17}、具体的には、学校教育施設、社会教育施設、医療保健施設、社会福祉施設、社会体育施設、レクリエーション施設、商業施設などが代表的な施設としてあげられる。

では、これらの地域施設は果たして地域住民の居場所と成り得ているであろうか。居場所となるか否かは主観的要素も関係するため一概にいけないが、冒頭にも触れたように、近年、様々な居場所づくりの取組がみられるようになったのも、既存の地域施設の抱える課題が背景にあるともいえる。例えば、中高生の放課後の居場所として整備され、先進事例としてしばしば文献等に取り上げられる「佐倉市ヤングプラザ」^{注1-9}は、「今の子どもたちには、放課後の居場所が決定的に少なくなっている。また、クラスメートとの人間関係に悩んでいる子どもたちも少なくない。彼らにコンビニや道端ではなく、学校でも家庭でもない〈自由な空間〉を提供し、自発的活動や友達づくりを支援する」^{文1-14}ことを目的とし、特別な活動プログラムは用意せず、場所提供を主としている。また、名張市の「ふれあい・いきいきサロン」^{注1-10}の設置目的には、「高齢者や子育て中の親子、障害者など、地域から孤立しがちな方が身近な地域で気軽に集える場所をつくる」とある。このように、これらの居場所づくりに取組む主体の意識として、地域施設には気軽に立ち寄れ、自由に過ごせ、集える場所が不足して

文1-15) Ray Oldenburg: The Great Good Place, Marlowe & Company, 1999

文1-16) ハワード・シュルツ: スターバックス成功物語、日経 BP 社、1998

文1-17) 柳澤忠ほか: 新建築学大系 21 地域施設体系、彰国社、1984

注1-9) 千葉県佐倉市。1998年開設。「放課後の居場所」というコンセプトにより元銀行の建物を改修・再利用した施設。開設後は、中高生に限らず、幅広い年齢層が気軽に訪れる場所になっている。

注1-10) 三重県名張市。身近な地域の公民館、集会所、民家の空きスペースなどを活用し、地域住民が定期的にふれあい、交流できる場所。市内58箇所で開催（平成20年9月現在）

文1-18) 鈴木毅・金丸まや・渡海裕司：
中高生のための施設とその利用実態に関
する研究(住田正樹、南博文 編：子ども
たちの「居場所」と対人的世界の現在、
第12章)、九州大学出版会、2003

いるとの認識があると思われる。この点に関し、高橋は「予約なしに誰でも自由に入ることのできる施設の代表に図書館があるが、そこでは、「一人で資料と対面する」ことが主目的であるので、居眠りは許されてもグループでの話し合いは不適切な行動になるであろう。そのように考えるとまちなかには、公園・広場・道端を除いて自由に「居る」ことのできる場所は意外と少ないのである」と述べている^{文1-14)}。また、鈴木毅は、「戦後の公共施設は、いわゆる近代的な機能主義をベースとしており、基本的に特定の活動を目的として計画デザインされてきた。さらにいえば施設だけでなく、それを構成する諸室も、この部屋はこの活動の為という対応が固く関係付けられてきた。この結果、計画を入念に練れば練るほど、施設空間と活動の関係は最適化され、目的以外の活動を寄せ付けない、がちがちの建物になってしまったのである。」^{文1-18)}と指摘している。

つまり、居場所とは、必ずしも明確な活動目的をもって利用する場所とは限らないことから、制度によって施設の目的、対象者、運営方法などが明確に定められた既存の施設体系に馴染まず、空き店舗や既存施設の空きスペースを活用した取組が多い一因とも考えられる。施設の量的充足を達成した今日、利用者の多様なニーズに応えた生活の質の重視が求められていることから、地域施設を計画する上で、従来の施設固有の機能的サービスを中心とした観点からだけでなく、地域住民が安心してひと時を過ごせる滞在的サービスに配慮した居場所としての観点から捉え直す必要があると思われる。

参考文献

- 文1-1) 学校不適応対策調査研究協力者会議：登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して－、1992
- 文1-2) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、学陽書房、2001
- 文1-3) 久田邦明 編：子どもと若者の居場所、萌文社、2000
- 文1-4) 新村出 編：広辞苑（第6版）、岩波書店、2008
- 文1-5) 松村明 編：大辞林（第3版）、三省堂、2006
- 文1-6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編：日本国語大辞典（第二版）、小学館、2000-2002
- 文1-7) 山田あすか：ひとは、なぜ、そこにいるのか「固有の居場所」の環境行動学、青弓社、2007
- 文1-8) 藤竹暁 編：現代人の居場所、至文堂、2000
- 文1-9) 住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、九州大学出版会、2003
- 文1-10) 芹沢俊介：座談会 居場所（藤竹暁 編：現代人の居場所）、至文堂、2000
- 文1-11) 佐々木英和：ケータイ・インターネット時代の自己実現感（田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、5章）、学陽書房、2001
- 文1-12) 加藤仁：定年後 豊かに生きるための知恵、岩波書店、2007
- 文1-13) 水月昭道・馬場健彦・南博文：
下校時の帰宅路に見られる子ども道草行為とみち環境との関係（住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、第10章）、九州大学出版会、2003
- 文1-14) 高橋鷹志：子どもを育てるたてもの学、チャイルド本社、2007
- 文1-15) Ray Oldenburg: The Great Good Place、Marlowe & Company、1999
- 文1-16) ハワード・シュルツ：スターバックス成功物語、日経BP社、1998
- 文1-17) 柳澤忠ほか：新建築学大系21 地域施設体系、彰国社、1984
- 文1-18) 鈴木毅・金丸まや・渡海裕司：中高生のための施設とその利用実態に関する研究（住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、第12章）、九州大学出版会、2003

第2章 研究の目的と方法

第2章 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

居場所づくりが各地で展開されていることは先に述べた通りであるが、これらの取組はまだ新しく、その多くは個々の居場所ごとに経験的で試行錯誤的に取り組まれているのが現状である。また、地域全体の施設体系における居場所の位置づけや居場所相互の関係も明確ではなく、自宅や学校・職場以外にも地域施設を選択して生活する地域住民の生活構造をふまえて居場所を計画的に設置しているとは言い難い。人々の居場所となるべき公共施設をはじめとした既存の様々な地域施設も、合目的な機能的サービスを重視するあまり、目的外利用など潜在的サービスについては疎かになっているとみられる。

そこで、本研究は、人々の居場所として地域施設を計画するための要件を明らかにし、居場所づくりに有効な計画手法を提案することを目的とする。

2-2 研究の方法

居場所の計画的要件を明らかにするにあたり、1-2で述べた居場所の基本概念をふまえることとする。居場所とは、物理的空間だけでなく、そこに居る個人の安定した心理状態や、他者との人間関係を含めた概念として捉える必要があることから、本研究では、居場所の空間特性や人間関係などに対する利用者意識に着目し、アンケートやヒアリング調査を多用して分析・考察を進めていくこととする。また、地域住民の生活構造をふまえた計画的要件とするため、研究対象を特定の利用者属性や施設種に絞るのではなく、地域施設全般を取り上げ、それらの比較分析を通して、各居場所の特徴や相対的な位置づけを把握する。具体的な研究フローは図2-1に示す通りである。

まず、そもそも人々はどのような場所を居場所としているのか、地域住民の居場所選択の実態やニーズを、アンケート調査をもとにマクロに統計的に捉え、地域施設の選択要因について、属性別、ライフスタイル別、地域別、組織活動参加状況などの観点から分析し、地域住民の居場所の選択構造を概観する（第3章）。

次に、交通手段や経済面などで制約があり、特に地域施設における居場所整備の必要性が高いとみられる高齢者と中高生の居場所を対象に取り上げ、事例分析を行う。高齢者と中高生は共通点を有する一方、所属組織の有無や身体能力、余暇時間の長さなど、対照的な性格も持

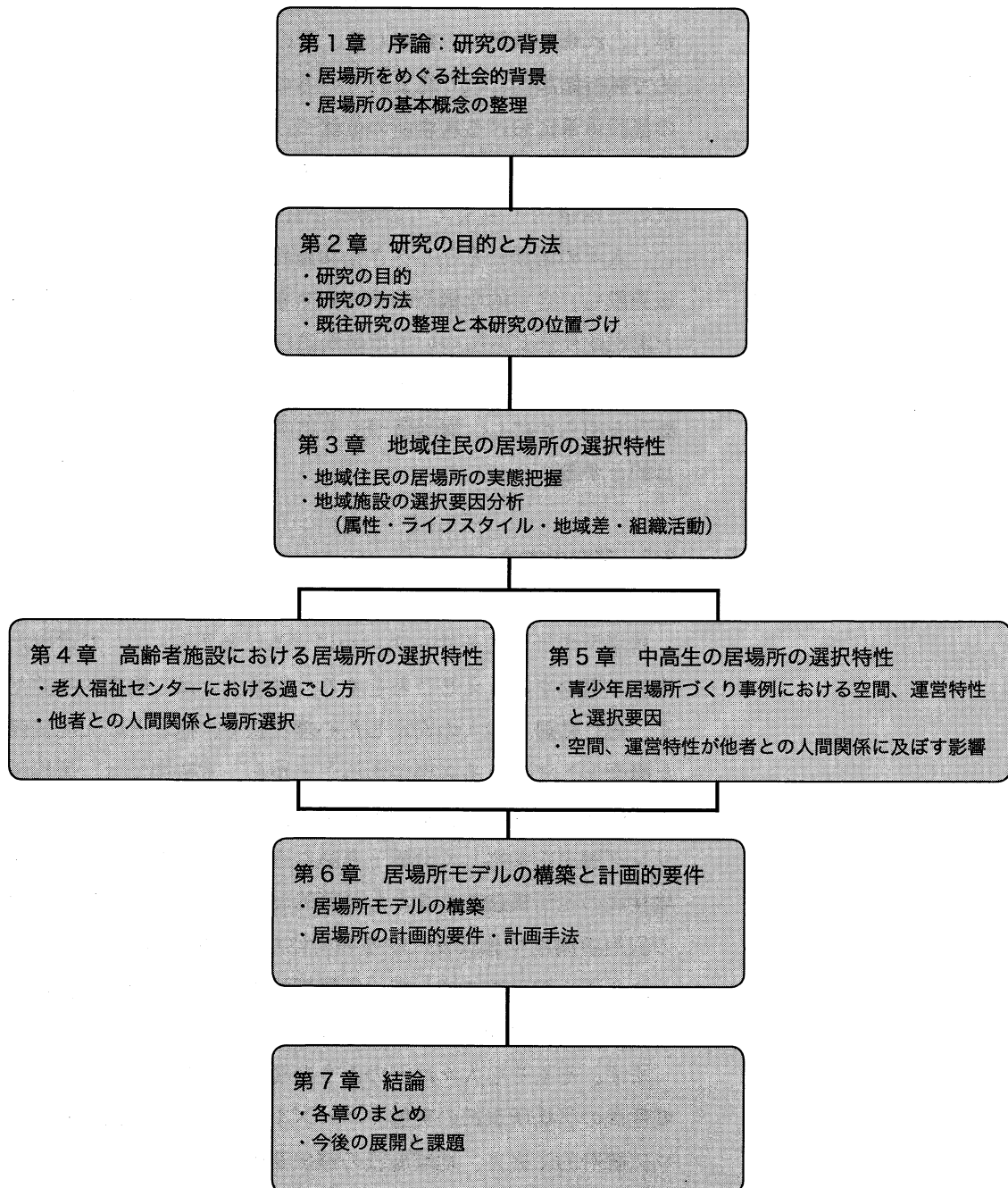


図 2-1 研究のフロー

ち合わせており、居場所に対する要求も異なると思われる。そこで、高齢者の居場所では、高齢者専用施設である老人福祉センターを対象として取り上げ、同様の運営形態をもった複数の施設における高齢者の多様な過ごし方の実態を把握する。さらに、居場所における人間関係に着目し、他者との人間関係に求める度合いと場所選択の関係について捉える（第4章）。

一方、中高生の居場所では、近年の青少年居場所づくりの取組事例を対象として取り上げ、様々な施設や運営形態をもった施設における利用者や運営者の意識を比較分析を通して、施設の立地・空間、運営特性と選択要因を把握する。また、居場所の立地・空間、運営特性が他者との人間関係に及ぼす影響について捉える（第5章）。

以上の結果をふまえ、人々の居場所として地域施設を計画するための要件を明らかにし、計画手法を提案する（第6章）。結論では、研究の要約と今後の課題・展開について述べる（第7章）。

2-3 研究対象の施設・地域

1) 対象施設

地域施設を対象とする。地域施設とは、地域住民が生活上利用する「自宅」「職場・学校」「友人宅」以外の建築的空間を含む場所を指す。公共施設と民間施設があるが、本研究では、居住地域に立地する施設の内、地域住民の生活に関連深い施設として、公共施設は、図書館、公民館等（集会所、市民センター含む）、文化施設、美術館等（博物館含む）、スポーツ施設、教育施設を対象とし、民間施設は、商業施設、娯楽施設、飲食店を対象とした。

2) 対象地域

居場所としての地域施設の計画的要件を明らかにする上で、地域特性の違いが地域住民の居場所選択に影響する可能性があるため、都市部から過疎地まで多様な地域特性を有する三重県内の都市を対象とした。具体的には、人口密度、施設整備状況、自然環境等の地域特性が異なる四日市、津、志摩、大紀の4地区を中心に調査対象とした。

2-4 研究対象の属性

様々な属性において居場所が必要であることは先に述べた通りであるが、本研究では特に第4章、第5章において中高生と高齢者を取り上げ、詳しく分析する。その理由は次の通りである。

1) 中高生の居場所

中高生の場合、小学生までは半ば強制的に地域の小学校に通うことが生活の中心になるが、中学生ぐらいになると行動範囲が広がり、様々な場所を選択できるようになる。しかし、高橋が「成長の途上でもっとも矛盾を抱え、不安や抑圧を感じている思春期の中高生に対し、公共施設は何ら対応することができないのが現状である」^{文2-1)}と述べているように、子どもを対象にした代表的な施設として児童館があるものの、専ら小学生以下の児童が対象であるため、放課後利用できる公共施設は図書館ぐらいしかなく、受け皿となる公的な整備が不十分な属性といえる。中高生がコンビニやゲームセンターなどをたまり場とすることが問題視され、全国各地で青少年の健全な育成を目的にした居場所づくりの取組がみられる一因にもなっている。また、田中は、『子どもの成長や自己形成にとっては、「陰の部分」や「無目的な場所」も必要である。以前は、路地裏、原っぱ、裏山などの、子どもたちが「隠れる場所」や「逃げ込む場所」があり、そうした空間で子どもたちは多様な人間関係や経験を重ねることができた。学校建築を見ても、「体育館の裏」に象徴される「陰」の部分は一掃され、学校や教室は“きれい”になっている。』^{文2-2)}と指摘するように、青年期の心的な発達上の観点から、親や教師の目の届きにくい家庭や学校以外の居場所が求められているといえる。

文2-1) 高橋鷹志：子どもを育てるたても
の学、チャイルド本社、2007

文2-2) 田中治彦：社会教育・生涯学習2
「居場所」の心理学、2002、[www.rikkyo.
ac.jp/~htanaka/05/Shakyo2_0504.html](http://www.rikkyo.ac.jp/~htanaka/05/Shakyo2_0504.html)

2) 高齢者の居場所

一方、高齢者の場合、今日の高齢社会に対応すべく、特に要介護者を対象にした様々な施設が整備されてきている。しかし、高齢者全体の約8割を占めるといわれる比較的元気な高齢者（自立高齢者）を対象にした施設は、高齢者専用施設である老人福祉センターぐらいしかなく、多様化するニーズに十分応えられていない。2007年から団塊世代の定年退職がピークを迎え、職場という第二の居場所を失い、生活スタイルの転換が余儀なくされる高齢者は、地域のどこに居場所を見出すのが課題となっている。また、一人暮らしの高齢者数も年々増加傾向にあり、家族との関係も希薄になることで孤独を感じることも少なくなく、自宅である第一の居場所の存在も不安定な状態になることが危惧される。

交通手段が限られ、加齢と共に身体機能が低下する傾向にある高齢者にとって身近な地域が重要となるが、外出したいと思っても行くところがないようでは外出意欲や機会を失うことになり、「ひきこもり」を助長しかねない。次第に活力が失われ虚弱し、残存能力が低下する

恐れがあり、認知症や要介護状態へ陥る可能性が高まる。介護予防の観点からも自宅以外の居場所が求められているといえる。

3) 中高生と高齢者の共通点と相違点

一般に、中高生と高齢者はともに交通手段が限られ、経済的にも中高生は小遣い、高齢者は年金の中でやりくりする必要があるなど、必ずしも経済的に恵まれているとはいえない。そのため、生活上、身近な地域への依存度が高く、生活環境との関わりや公的な支援が必要な属性であるといえる。

また、高塚が「生きがいも失って、悲哀感を抱いている高齢者の居場所を、どうやって作り出していくかということが、きわめて重要な問題になりつつあるのが、現代社会であると考えられる。しかし、実はそれは必ずしも老人だけの問題ではない。若者であっても確たる自己の存在感が持てなかったり、将来に対する目標がみえなくなっている若者も少なくない。その場合はやはり生きがいの喪失の状態に陥ってしまう」^{文2-3)}と、述べるように、高齢者は余生をどう生きるか、中高生は将来をどう生きるか、その「生きがい」を見出し、自己の存在感に対する確信をもつことが課題となっている点で共通している。

一方、相違点としては、

- ・家族人数（中高生：多、高齢者：少）、
- ・所属組織（中高生：有（学校）、高齢者：無）、
- ・身体能力（中高生：高、高齢者：低）、
- ・余暇時間（中高生：少、高齢者：多）
- ・健康上の課題（中高生：精神面、高齢者：身体面）

などがあげられる。

このことから、交通手段や経済面などで制約があり、特に地域施設における居場所整備の必要性が高いとみられる点で、高齢者と中高生は共通するが、居場所の選択においては、中高生の場合、地域施設は主として自宅や学校以外の第三の居場所として位置づけられるのに対し、高齢者の場合は、自宅以外の第二の居場所として位置づけられ、両者で居場所に対する要求や地域施設の位置づけも異なっていることが予想される。したがって、両者の属性を相対的に取り上げることで、居場所のあり方をより明確に提示できるものと考えられる。

文2-3) 高塚雄介：心理学から見た「居場所」（田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わり」の場へ、第2章）、学陽書房、2001

表 2-1 居場所に関する既往研究の推移

研究対象属性	年代	1980 -1984	1985 -1989	1990 -1994	1995 -1999	2000 -2004	2005 -2008	合計
不特定	主要論文			都市空間の中の居場所 李・鈴木・高橋ら 文2-7 文2-4,2-10 居場所としての病院外来待合 小松・加藤・谷口ら 文2-5 間仕切りが居場所に与える影響 彭・西出ら 文2-12 居場所と姿勢にみる床段差の影響 込山・初見ら 文2-11	図書館利用者の居場所 中井・今井(正)ら 文2-7 地域住民が設立・運営する交流の場 小松・辻ら 文2-8 外来病棟における面会者の居場所 日野・初見ら 文2-6	コミュニティ・カフェの設え 田中・鈴木ら 文2-9		
	論文数			3	20	13	21	57
子ども	主要論文			小学校の自由時間における児童の居場所 星野・上野ら 文2-16 小学校 OS における児童の居場所形成 柳澤 文2-14 保育所における園児の居場所 山田・上野ら 文2-17 フリースクールにおける環境行動 垣野・初見ら 文2-21 家族のコンタクトと居場所 森保・山田 文2-13	教室・OS での社会的交流と居場所選択 伊藤・長澤 文2-15 放課後の居場所づくり 長谷・斎尾ら 文2-18 放課後の居場所としての学童保育 山崎・定行ら 文2-19 地域における親子の居場所 松橋・大原ら 文2-20			
	論文数			1	2	17	22	42
中高生	主要論文	家庭及び地域における居場所 小澤 文2-22			中高生の居場所づくりの試み 金丸・鈴木ら 文2-26 単位制高校における居場所選択 周・西村ら 文2-23 児童館における中高生対応 定行・根橋 文2-25	中学校における居場所選択 常陸・上野ら 文2-24		
	論文数		1		7	22	10	40
高齢者	主要論文			高齢者の住居における居場所 古賀・高橋 文2-27 精神的な居場所と居住形態 牧野・今井(範) 文2-29	グループホームにおける居場所 山田・上野 文2-28 街角デイサービスの実態 今井(範)・阿部ら 文2-30 高齢者の居場所としての児童館活用 松垣・福田 文2-31			
	論文数				7	10	15	32
その他	主要論文			夫婦の居場所感 山崎・高橋 文2-33 小学校における教員の居場所 保坂・吉村ら 文2-34 知的障害者入所施設における居場所 山田・上野 文2-35 大学における学生の居場所 孫・今井(正)ら 文2-36	住まいにおける女性の居場所 藤井・小伊藤 文2-32			
	論文数		1	1	2	8	11	23
計	論文数	0	2	5	38	70	79	194
備考		●1982- 人間・環境学会発足 ふれあい・いきいきサロン創設(社協)1994- ●	●1985- 東京シュール(フリースクール)創設 ●1992- 学校週5日制実施 学校以外も指導要録上の出席扱いとなる(文部省)	2004-2006 地域子ども教室推進事業 (子どもの居場所づくり・文科省)	●2002- つどいの広場事業 (子育て支援・厚労省)	2007 年問題(団塊世代の定年退職)2007 ● ●2000- 公的介護保険制度導入		

注) 論文数は、日本建築学会計画系論文集、大会学術梗概集、技術報告集、人間・環境学会誌に掲載された居場所に関する論文の数(2008.2 現在)
表中の論文は本文中に取り上げた論文

2-5 用語の定義

・居場所：

居場所の基本概念については1-2において、建築学だけでなく、他の研究分野である心理学や教育学、社会学等において居場所を扱った文献を参照し、整理した。その結果、居場所とは、物理的空間と、そこに居る個人の安定した心理状態、さらには他者との関係によって捉えられることから、本研究では居場所を、

『物理的・对人的環境を拠り所に安心して居られる場所』と定義する。

なお、居場所づくり事業等により事業・制度等に基づいて意図的に計画された居場所については括弧書きの「居場所」と表記して区別する。

2-6 既往研究の整理と本研究の位置づけ

2-6-1 既往研究の整理

居場所に関する既往研究は、建築学だけでなく多岐の分野にみられるが、ここでは、本研究の専門分野である建築計画学の研究に絞って取り上げる。

日本建築学会の計画系論文集及び大会学術梗概集、技術報告集（1995年以降）、人間・環境学会誌（MERA Journal、1982年以降）に掲載された論文の中から〈居場所〉をキーワードに検索した結果^{注2-1)}、194件が抽出された（2008年2月現在）。研究対象の主たる属性では、194件のうち、不特定多数57件、子ども（小学生以下）42件、中高生40件、高齢者32件、その他（家族、教職員、女性、障害者、大学生等）23件である。年代別に既往研究の推移をみると（表2-1）、青少年問題が取り沙汰されるようになった1980年代後半より先駆的な研究がみられるようになり、特に1995以降、少子高齢化対策を反映するかたちで増加傾向にあり、今日、建築計画学分野における居場所研究の研究対象は、建築種、属性ともに幅広くみられる。

以下に研究対象の主たる属性別に〈居場所〉を扱った主要な研究を概観し、本研究の位置づけについて述べる。

注2-1) 論文情報ナビゲータ（CiNii、国立情報学研究所）を利用（人間・環境学会誌を除く）

1) 「不特定多数」の居場所を扱った研究

不特定多数が利用する居場所には居室等の単位空間から、公共施設や民間施設の地域施設を対象にしたもの、より広範な地域や都市、オープンスペースを対象にしたものがある。

地域施設における居場所の研究では、生涯学習施設、病院、図書館など、特定の施設種を対象にした研究がみられる。生涯学習施設では、時間つぶしや休憩など目的外利用の実態を捉え、地域施設が多様な属性の人々にとっての地域の居場所として利用されていることを示した李・鈴木^{文2-4)}らの研究がある。病院では、小松ら^{文2-5)}は外来患者の居場所という観点から病院外来待合等のコモンスペースについて考察し、主体的で選択的な居場所獲得が可能な座席配置等について検討している。また、日野・初見ら^{文2-6)}は外科病棟において従来より疎かになっていた面会者の居場所について調査し、計画上の留意点について示している。図書館では、中井・今井(正)ら^{文2-7)}は図書の貸出を目的としない滞在型の利用に着目し、居場所形成の要因を考察している。

これら公共施設以外にも、近年、既存の空き店舗や住宅などを利用し、コミュニティカフェや宅老所などの市民により企画・運営される場が各地に生まれてきていることから、このような街角の居場所を取り上げた研究がみられる。小松ら^{文2-8)}は地域住民が主体的に設立・運営する交流の場について、空間、運営、支援体制の実態とそれらの関係を示している。また、田中・鈴木^{文2-9)}は、コミュニティ・カフェを扱い、主の存在の重要性と運営を通して徐々にしつらえられていく場所の特性を示している。

単体の施設ではなく、地域・都市やオープンスペースにおける居場所の研究には、李・鈴木ら^{文2-10)}の都市のなかの居場所に関する一連の研究が挙げられる。人々が訪れるパブリックスペースにおいて、どのような物理的、社会的環境とどのような関係をもっているか、つまり、どのような「居方」^{注2-2)}をしているかを分析・考察し、環境デザインの手掛かりを得ようとしている。

一方、単位空間を扱った研究では、床レベル差がもたらす空間の印象と居場所への影響を扱った柿沼・初見ら^{文2-11)}の研究や、間仕切りが居場所選択行動に与える影響を行動観察実験により検証した彭・西出ら^{文2-12)}の研究など、物的環境が人間の行動特性や空間知覚に及ぼす影響やその関係を明らかにしようとした環境行動・環境心理学的研究がみられる。

注2-2)「居方」：建築計画学や行動科学において、人の行動と空間の関係を分析する基本となる「誰がどこで何をする(していた)」(属性、位置、行為)だけではカバーしきれないもの、すなわち、人がそこに居ることによって生じている風景や社会的関係を含めた状況を取り扱うための概念

(高橋鷹志+チームEBS編著：環境行動のデータファイル 空間デザインのための道具箱、彰国社、2003)

2) 「子ども」の居場所を扱った研究

子どもの居場所の研究では、家庭の住空間を対象としたものから、

日中過ごす保育所や小学校等の地域施設、放課後や休日に過ごせる地域の居場所、子育て中の親子と一緒に過ごせる居場所などの研究がみられる。

家庭では、個室化が進み家族との接触が減少してきたことを背景に、家族とのコンタクトと居場所との関係を解明しようとした森保・山田^{文2-13)}の研究がある。

小学校では、児童の行動と物理的環境とのまとまりで形成される場面を行動場面として抽出し、行動領域形成の傾向を捉えた柳澤の研究^{文2-14)}や、教室・オープンスペースを社会的な場と捉え、児童が他者と居合わせる場面を分析し、児童の社会的交流のパターンと居場所選択の関係を示した伊藤・長澤^{文2-15)}の研究がある。また、自由時間における児童の自発的な活動と場所の実態を捉えた星野・上野ら^{文2-16)}の研究などがある。保育所では、園児の一人ひとりの居場所の選択と活動の様子、周囲の環境との関わり方を分析した山田・上野ら^{文2-17)}の研究がある。

放課後の居場所では、近年、地域で子供たちの安全を確保しようとして取り組まれている放課後の居場所づくりの実態を整理した長谷・斎尾^{文2-18)}の研究や、女性就労の増加により学童保育の需要の高まりを受けて、学童保育施設の運営・施設環境の現状を調査した山崎・定行ら^{文2-19)}の研究がある。

この他、母親の育児不安や孤立化などに対する子育て支援策が課題となっていることから、子育て親子が地域で過ごす居場所の選択特性や要求、評価構造を捉えた松橋・大原ら^{文2-20)}の研究や、不登校の子ども達の居場所としてフリースクールに着目した垣野・長澤ら^{文2-21)}の研究などがある。

3)「中高生」の居場所を扱った研究

中高生の居場所の研究は、青少年問題を背景に他の属性よりもいち早く取り組まれており、家庭における居場所、中学校・高校の学校空間、児童館等の地域施設を対象にしたものがみられる。

その先駆的研究として、家庭や地域の居場所に対する意識と実態から中学生の自己形成に関わる生活空間のあり方について考察した小澤^{文2-22)}の研究が挙げられる。

中学校・高校の学校空間に関する研究では、従来の生活拠点となるクラスルームの設定が難しい単位制高校や教科教室型の学校において、生徒の行動特性と居場所選択の実態から、いかに生徒の居場所を確保すればよいか検討した周・西村^{文2-23)}らの研究がある。また、生徒の行動現象だけでなく、生徒の中学校空間に対する場所の認識から

捉えた常陰・上野^{文2-24)}の研究がある。

他の地域施設の研究では、専ら小学生を中心とした低年齢層の利用が主である児童館を中高生の受け皿として活用する方策について検討した定行^{文2-25)}の一連の研究や、自治体における中高生の居場所づくりの先進事例から居場所のあり方を考察した金丸・鈴木^{文2-26)}らの研究などがある。

4)「高齢者」の居場所を扱った研究

高齢者の居場所の研究では、介護だけでなく、介護予防、引きこもり対策、地域への依存度が高くなる生活の質的向上などを課題として挙げており、家庭の住空間を対象としたものから、特別養護老人ホーム等の介護施設内において日常的に過ごす居場所、自立高齢者を対象にした地域における居場所の研究などがみられる。

家庭では、一人暮らしの高齢者が住居内に形成する居場所について考察した古賀・高橋^{文2-27)}の研究がある。

施設では、増加する痴呆性高齢者の入居施設であるグループホームにおいて、個々の入居者の生活拠点となる居場所の選択と、刻々と変化する痴呆度やADLなどの変化に伴う居場所の変遷の要因について分析した山田・上野^{文2-28)}の研究がある。地域では、居住者の流出、単身化の進む歴史的地区在住の高齢者を対象に、自宅内外において精神的にくつろげ、落ち着き、楽しいと意識する居場所の特徴を捉えた牧野・今井（範）^{文2-29)}の研究のほか、自立高齢者の介護予防を図る観点から、既存施設を活用し住民参加による柔軟できめ細やかなサービスを提供する居場所づくりの取組について検討した今井（範）・阿部^{文2-30)}らの研究、地域に分布する児童館を高齢者の居場所として有効活用しようとする取組について検討した桧垣・福田^{文2-31)}の研究などがみられる。

5)「その他」の属性を扱った研究

1) から4) 以外の属性として家族、女性、教職員、障がい者、大学生等を扱った研究がみられる。

家族・女性の研究では、女性の社会進出に伴い、仕事・社会活動と家事・育児の両立をはかる上で、女性の居場所として家事空間に留まらない住要求を捉えた藤井・小伊藤^{文2-32)}の研究や、家庭における夫婦の居場所観の相違点から個室要求等を捉えた山崎・高橋^{文2-33)}の研究がある。

教職員では、小学校を児童だけでなく教職員にとっても生活の場所であるとの観点から、教職員の生活行動と滞在場所の実態と捉えた保

坂・吉村^{文2-34)}らの研究がある。

障がい者では、大規模で一括的な処遇から脱却し、入居者の個性を重視するグループリビング型の施設において、入居者の居場所選択要因を物理的・人的・個人的要素に着目して分析した山田・上野^{文2-35)}の研究がある。

大学生では、学習環境だけでなく学生の生活環境の観点から改善が望まれる大学において、低学年生が日常的に利用する共通教育スペースにおける居場所に着目した孫・今井（正）^{文2-36)}らの研究がある。

2-6-2 本研究の位置づけ

今日、建築計画学分野における居場所研究の研究対象は、建築種、属性ともに幅広くみられるが、居場所に関する分析上の着眼点についてみると、概ね次のa～cの3つに大別できる。

a) 地域における居場所の選択構造分析（生活構造論）

地域住民が、自宅以外に地域内の複数の居場所の中からどのように居場所を選択し、使い分け、日々の生活を組み立てているかといった、地域における居場所の選択構造や評価構造、居場所に対するニーズなどを捉える。

b) 住居や施設内における居場所選択行動・心理分析（空間論）

自宅や、福祉施設、学校、図書館などの施設内において利用者や職員等がどこに居場所を定め、どのような居方や過ごし方をしているかといった行動現象や意識を扱い、物理的環境や人的環境などとの関係からその選択行動パターンや選択要因などを捉える。

c) 居場所づくりの取組事例分析（運営論）

既存の公共施設を居場所として地域住民に開放したり、個人やボランティア、NPO団体などが空き家、空き店舗等を利用して設立・運営する居場所づくりの取組事例について、空間・運営面から特徴を捉える。

表 2-2 居場所に関する既往研究の分析上の着眼点と文献数

着眼点 対象属性	a. 地域における 居場所の選択構造分析	b. 住居や施設内における 居場所の選択行動・心理分析	c. 居場所づくりの 取組事例分析	計
不特定	8	38	11	57
子ども	11	22	9	42
中高生	9	21	10	40
高齢者	5	23	4	32
その他	2	21	0	23
合 計	35	125	34	194

施設の量的整備が達成された今日、施設も「生活の場」であることが重視されるようになってきていることから、施設内における利用者の個々人の多様な行動を捉えようとした選択行動・心理分析 (b) を主とした研究が多くみられ、数多くの貴重な成果が得られている (表 2-2、125 件 / 194 件)。

また、近年では、住民参加による公と私の中間的な居場所もつくられ、公共性を問い直すという点で、その先進的な取組事例分析 (c) もみられるようになってきている。

しかし、地域における居場所の選択構造分析 (a) の研究は、高齢者や子育て主婦、中高生の研究に一部みられるものの少なく、地域の居場所に対する幅広い属性のニーズを把握する必要があると考える。また、a～c のいずれの研究も建築種、属性を限定的に取り上げており、それらの相対的な比較分析や、地域における居場所を総合的に把握・整理した研究は少ない。今後、個々の居場所に関する既往研究の成果をふまえつつ、今一度、地域の総合的な施設整備を視野に入れながら、建築種や属性の枠組みを横断的に捉え、それぞれの居場所の位置づけを明確にすることが必要な段階に来ているといえよう。

そこで本研究では、研究過程において、選択行動・心理分析 (b) 及び取組事例分析 (c) を採用しつつ、最終的には、地域における様々な施設種や属性を横断的に捉える選択構造分析 (a) の視点を中心に据えて考察する。相対的な比較分析を行うことにより、単独では把握できない課題が発見できるものとする。また、居場所の選択要因には、単に物理的要素の影響だけでなく、利用者個人の意識、他者との人間関係によっても異なると予想されるため、利用者の行動把握や施設の物理的要因だけでなく、個々人の選択意識を捉えるために、アンケートやヒアリングなどの調査手法を中心とする。

このように本研究は、特定の利用者属性、施設種に限定するのではなく、公共、民間施設を含む地域施設全般を横断的に捉え、それぞれの居場所の位置づけを明確にし、地域における居場所特性をハード・ソフト両面から整理することによって、経験的で試行錯誤的に取組まれている居場所づくりに対して計画的指針を提示しようとする点を特徴としている。

参考文献

- 文 2-1) 高橋鷹志：子どもを育てるたてもの学、チャイルド本社、2007
- 文 2-2) 田中治彦：社会教育・生涯学習 2 「居場所」の心理学、2002、www.rikkyo.ac.jp/~htanaka/05/Shakyo2_0504.html
- 文 2-3) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わり」へ、学陽書房、2001
- 文 2-4) 李乙圭、鈴木毅、高橋鷹志：街の居場所としての地域施設、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、239-240、1995
- 文 2-5) 小松尚、岩岡弘文、加藤彰一、谷口元：移転改築前後の環境認識比較による居場所としての病院外来待合に関する研究、日本建築学会計画系論文集、513、151-158、1998
- 文 2-6) 日野大助、大橋美布、真野洋介、初見学：外科病棟における面会者の居場所に関する研究 その1 面会者が患者の傍から離れているときの面会者の居場所、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、447-448、2004
- 文 2-7) 中井孝幸、今井正次、大前裕樹：図書館利用者の館内行為と滞在場所からみた居場所の形成 滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、395-396、2001
- 文 2-8) 小松尚、辻真菜美、洪有美：地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況 地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究（その1）、日本建築学会計画系論文集、611、67～74、2007
- 文 2-9) 田中康裕、鈴木毅、松原茂樹、奥俊信、木多道宏：コミュニティ・カフェのしつらえ方についての考察 運営者の発言の分析を通して、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、935-936、2006
- 文 2-10) 李威儀、鈴木毅、高橋鷹志：台北市竜山寺の利用パターンからみた地域における場所的イメージの考察 都市の居場所としての公的空間に関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集、E、1111-1112、1993
- 文 2-11) 込山敦司、乙黒佳子、春木周作、初見学、高橋公子：体験者の居場所と姿勢に観察される床段差の影響 床段差のある空間の心理的・機能的評価に関する研究（その2）、日本建築学会梗概集、E-1、799-780、1996
- 文 2-12) 彭瑞二、橋本雅好、西出和彦：間仕切が体験者の居場所に与える影響に関する基礎実験 室空間における間仕切に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、535、131-137、2000
- 文 2-13) 森保洋之、山田直美：家族のコンタクトと子供の居場所の関係について 子供を中心にみた住空間の計画に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、23-24、2001
- 文 2-14) 柳澤要：小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について - 児童の行動場面から見た空間解析に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、424、31-42、1991
- 文 2-15) 伊藤俊介、長澤泰：小学校児童のグループ形成と教室・オープンスペースにおける居場所選択に関する研究、日本建築学会計画系論文集、560、119-126、2002
- 文 2-16) 星野武史、倉斗綾子、力安拓、小島千知、上野淳：小学校の自由時間における児童の居場所と行動に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、299-300、1999
- 文 2-17) 山田あすか、上野淳、登張絵夢：園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その2）、日本建築学会計画系論文集、587、49-56、2005
- 文 2-18) 長谷夏哉、斎尾直子：都市に育つ子どもたちの放課後の居場所づくりに関する研究：安全安心と豊かな空間確保 両立の視点から、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、549-550、2006
- 文 2-19) 山崎陽菜、定行まり子、淵本花恵：学童クラブと全児童対策からみた放課後の子どもの居場所、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、189-190、2007
- 文 2-20) 松橋圭子、大原一興、藤岡泰寛、三輪律江、谷口新：地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究：東京都三鷹市における外出調査より、日本建築学会計画系論文集、600、25-32、2006
- 文 2-21) 垣野義典、須田、眞史、初見学、長澤泰：子どもの「学校外の居場所」における空間構成 日本のフリースクールにおける環境行動研究、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、87-88、2002
- 文 2-22) 小澤紀美子：中学生の生活空間に関する調査研究、家庭および地域における居場所について、日本建築学会学術講演梗概集、E、113-114、1986
- 文 2-23) 周博、西村伸也、岩佐明彦、高橋百寿、和田浩一、長谷川敏栄、林文潔、渡邊隆見：単位制高等学校の建築計画に関する研究：居場所の特性と情報伝達の仕組み（その1）、日本建築学会計画系論文集、553、115-121、2002
- 文 2-24) 常陰有美、倉斗綾子、新田佳代、上野淳：中学校における生徒の場所の想起と居場所の選択に関する考察、日本建築学会計画系論文集、604、31-37、2006
- 文 2-25) 定行まり子、根橋由里子：児童館における中高生対応についての考察：地域における中高生の居場所に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、577、49-55、2004
- 文 2-26) 金丸まや、渡海裕司、鈴木毅、舟橋國男、木多道宏：佐倉市ヤングプラザの計画プロセスの分析 中高生の居場所づくりの試みとに関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、555-556、2000
- 文 2-27) 古賀紀江、高橋鷹志：一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察 高齢者の住居における居場所に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、494、97-104、1997
- 文 2-28) 山田あすか、上野淳：痴呆性高齢者グループホームの環境及び入居者の固有の居場所とその変容に関する研究、日本建築学会計画系論文集、592、93-100、2005
- 文 2-29) 牧野唯、今井範子：高齢期における交流からみた「精神的居場所」の特徴と居住形態との関係 奈良県橿原市今井町の場合、日本建築学会計画系論文集、522、131-138、1999
- 文 2-30) 今井範子、阿部文佳、伊東理恵：街かどデイサービスの実施状況 - 大阪「街かどデイハウス支援事業」運営者に対する調査から - 自立高齢者の生活を形作る居場所に関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、183-184、2005
- 文 2-31) 松垣牧子、福田由美子：高齢者の居場所としての児童館活用の可能性 高齢者の生活拠点施設に関する研究 (3)、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、149-150、2006
- 文 2-32) 藤井久美子、小伊藤亜希子：住まいにおける女性の居場所、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、33-34、2007
- 文 2-33) 山崎さゆり、高橋公子：夫婦の居場所観と生活意識の関係について、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、171-172、1995
- 文 2-34) 保坂裕信、浅井薫、小野寺昭、吉村彰：小学校教員の生活行動と心理からみた教員の居場所について（その1）、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、57-58、2001
- 文 2-35) 山田あすか、上野淳：知的障害者入所更生施設における入居者の生活様態と固有の居場所に関する研究、日本建築学会計画系論文集、588、71-78、2005
- 文 2-36) 孫イブン、今井正次、木下誠一、恒川和久、谷口元、田中裕伸：学生の居場所の視点からみる大学の共通教育ゾーンに関する研究：M大学とN大学の利用実態の比較を通して、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、365-366、2006

第3章 地域住民の居場所の選択特性

第3章 地域住民の居場所の選択特性

3-1 本章の目的と方法

3-1-1 目的

地域住民が日頃、居場所としてどのような場所をどのような理由で選択しているかについては、先にも述べたように特定の属性や施設種についての報告があるが、地域住民全般に渡っては必ずしも既往研究では明らかになっていない。そこで本章では、地域住民の居場所の実態とニーズをアンケート調査をもとにマクロに統計的に捉え、地域施設の選択要因について、属性別、ライフスタイル別、地域別、組織活動参加状況などの観点から分析し、地域住民の居場所の選択構造を概観する。

3-1-2 方法

1) 研究方法

地域住民の居場所の実態を把握するために、「自由な時間を過ごす場所」^{注3-1)}に着目する。「自由な時間を過ごす場所」は、地域住民が主体的に選択し、場所に対して概ね肯定的な印象をもっていると思われることから、地域住民の居場所であると解釈できる。そこで、地域住民に対し、「自由な時間を過ごす場所」に関するアンケート調査を行い、属性やライフスタイルの視点から居場所の選択特性を捉える。

次に、「自由な時間を過ごす場所」のうち、最もよく利用する地域施設（地域住民が生活上利用する自宅、職場・学校、友人宅以外の建築的空間を含む場所）について、施設種ごとに利用形態を整理し、施設に対して抱くイメージ（施設像）から施設種特有の利用意識を、公共施設と民間施設の比較を通して捉える。また、異なる地域特性をもつ地区を複数取り上げ、居場所選択特性の地域差を把握する。

さらに、居場所は上記のように個人単位で選択されるだけでなく、組織活動（サークル活動、団体活動等）のグループ、団体単位で選択される場合が予想されるため、組織活動の場としての居場所の利用実態を、組織団体へのアンケート調査により把握する。そして、組織・団体の特性と施設利用との関係、組織活動への参加を阻害する要因などを捉える。

以上より、地域住民の各個人の視点および彼らが所属する組織・団体の視点から、居場所としての地域施設の計画的要件を見出す。

注3-1)「自由な時間」とは、仕事、通勤、睡眠、食事、入浴等の生活必需時間を除いた時間を指す。

表 3-1 調査概要（地域住民アンケート調査）

1) 調査期間 : 2005 年 7 月～2005 年 8 月

2) 調査対象者 : 三重県内 4 地区（四日市市・津市・志摩市・大紀町）に住む 15 歳以上の地域住民

3) アンケート項目 :

- ・属性（年齢、性別、職業、家族構成など）
- ・自由な時間を過ごす場所
 （次の選択肢の中から 4 件まで選択。自宅、職場・学校、友人宅、図書館、公民館等、文化施設、美術館等、スポーツ施設、教育施設、商業施設、娯楽施設、飲食店、公園、山や海、その他）
- ・自由な時間を過ごす場所のうち最もよく利用する地域施設
 （次の選択肢の中から 1 件を選択。図書館、公民館等、文化施設、美術館等、スポーツ施設、教育施設、商業施設、娯楽施設、飲食店）
- ・上記の最もよく利用する地域施設の利用形態（交通手段、利用頻度、選択理由、一緒に過ごす人）と施設像（施設に対して抱くイメージ）
- ・その他（充実感を感じる時、地域活動の参加有無など）

4) アンケート方法 : 市街化程度を勘案し各地区を 1.5 ～ 3Km メッシュで区切り、各メッシュの中心付近 10 世帯を抽出。世帯毎に人数分の調査票を直接訪問配布・郵送回収

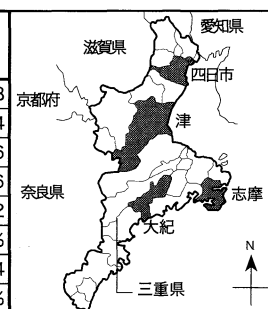
調査対象地区		四日市地区	津地区	志摩地区	大紀地区	計
世帯票	配布世帯票数	1,389	1,381	877	532	4,179
	回収世帯票数	602	597	356	181	1,736
	世帯票回収率	43%	43%	41%	34%	42%
個人票	配布個人票数	3,307	3,425	2,246	1,291	10,269
	回収個人票数	1,148	1,245	579	350	3,322
	個人票回収率	35%	36%	26%	27%	32%

表 3-2 調査概要（組織団体アンケート調査）

1) 調査期間 : 2007 年 9 月～11 月	
2) 調査対象 : 『津市生涯学習バンク』及び文化協会の登録団体	
3) 調査概要 : 組織活動実態を捉えるアンケートを、上記の登録団体に対し、郵送配布・郵送回収にて行った。	
4) 質問項目 : 団体票 : 団体の活動実績など、個人票 : メンバーの参加契機、活動意識など。 （個人票は各団体当り最大 10 名分）	
5) 回収率 : 団体票 : 212/358=59%（有効数）、個人票 : 1,120 名	

表 3-3 調査対象地区の概要

調査対象地区	四日市地区	津地区	志摩地区	大紀地区
総人口（人）	324,007	288,538	58,225	10,788
総面積（k m ² ）	220	711	180	234
人口密度（人／k m ² ）	1,474	406	324	46
総世帯数（戸）	119,464	109,332	20,700	4,086
生産年齢人口・比 （15 才～64 才）	213,199 65.8%	184,992 64.1%	34,324 59.0%	5,802 53.8%
老年人口・比 （65 才以上）	60,209 18.6%	63,197 21.9%	16,311 28.0%	3,804 35.3%



注) 各データは平成 17 年度国勢調査による

2) 調査方法

地域住民の居場所の利用実態及び利用意識を捉えるために、個人及び組織に対して、以下の2つの調査を行った。

①地域住民アンケート調査

調査は、都市部から過疎地まで多様な地域特性を有する三重県において、人口密度、施設整備状況、自然環境等の地域特性が異なる四日市、津、志摩、大紀の4地区を調査対象に選定し、15歳以上の地域住民を対象に「自由な時間を過ごす場所」に関するアンケート調査を行った。調査対象者のサンプリング方法は、本調査が施設の利用形態等を扱う関係上、地区内の中心部と郊外の地域的な偏りを抑え、地区全域に渡って広く抽出するために、ゼンリン住宅地図を用いたメッシュサンプリングとした。メッシュサイズは地区内の人口分布の度合いを考慮し1.5km～3.0kmの間隔で設定した。そして、各メッシュの中心付近の10世帯を抽出し、アンケートの直接配布・郵送回収を行った（個人票回収率32%^{注3-2)}）。調査概要を表3-1に示す。

調査対象地区の概要を表3-3に示す。四日市地区（朝日町・川越町を含む）は、名古屋大都市圏内にある三重県最大の都市である（人口約32万人）。津地区は、四日市地区に次ぐ人口規模の県都である（人口約29万人）。志摩地区は、名古屋大都市圏から離れた臨海部の観光都市である（人口約6万人）。大紀地区は、人口密度が低く、高齢化、過疎化が進行している農山漁村地域である（人口約1万人）。

②組織団体アンケート調査

居場所は個人単位だけでなく、グループ単位で選択されていることが予想されるため、組織活動の場としての利用実態を組織団体へのアンケート調査により把握する。調査対象は、三重県津市において行政及び文化協会に登録している団体とし、活動場所・活動意識・活動実績などに関するアンケートを郵送配布・郵送回収にて行った。調査概要を表3-2に示す。

注3-2) 回収率は約30%であるため、本調査の回答者構成を国勢調査(平成17年度)と比較し、サンプリングの代表性について検証した。各地区における性別(男、女)の構成割合は、両調査で3%以下しか差がみられず、年齢層別(15才～64才、65才以上)では、65才以上は津地区で8%、他地区で5%弱程度の差であった。以上から、両調査の結果は近似しており、代表性は概ね担保されていると判断した。ただし、津地区については、本調査の65才以上が国勢調査より若干多い点に留意しながら分析・考察を行うこととした。

表 3-4 自由な時間を過ごす場所 (有効回答者数 N=3051)

選択場所 属性	回答者 数	選択 場所数 /人	選択場所						
			自宅	職場 学校	友人宅	公共 施設	民間 施設	自然	その他
全 体	3051	3.0	89%	13%	32%	39%	55%	28%	13%
年 齢 層	若年層	227	94%	44%	56%	30%	71%	17%	7%
	中間層	1950	91%	12%	32%	37%	63%	30%	13%
	高齢層	821	83%	4%	26%	46%	34%	26%	15%
	不明	53	94%	19%	30%	25%	40%	25%	6%
性 別	男性	1431	88%	13%	24%	38%	52%	36%	15%
	女性	1573	90%	11%	39%	40%	58%	20%	12%
	不明	47	98%	19%	30%	19%	38%	21%	4%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満（不明欄除く）

選択場所の各項目の割合は、同じ項目の場所を複数回答した場合も1件としてカウント
「自然」は、公園、山や海を含む

表 3-5 自由な時間を過ごす地域施設 (有効回答者数 N=3051)

施設種 属性		回答者数	公共施設					民間施設			計	
			図書館	公民館等	文化	美術館等	スポーツ	教育	商業	娯楽		飲食店
全 体 (件数)		3051	12% (380)	13% (392)	5% (162)	3% (96)	14% (433)	2% (48)	38% (1161)	17% (502)	22% (657)	126% (3831)
年 齢 層	若年層	227	15%	1%	0%	1%	12%	5%	39%	32%	28%	133%
	中間層	1950	13%	9%	5%	2%	16%	1%	45%	19%	25%	134%
	高齢層	821	10%	27%	9%	6%	11%	2%	22%	7%	12%	105%
	不明	53	9%	9%	0%	2%	8%	0%	26%	17%	13%	85%
性 別	男性	1431	11%	10%	4%	3%	18%	2%	31%	21%	20%	120%
	女性	1573	14%	15%	6%	3%	11%	2%	45%	13%	23%	132%
	不明	47	4%	9%	0%	0%	6%	2%	26%	17%	15%	79%

注) 網掛け部は、25%以上（不明欄除く）。複数回答。

3-2 属性からみた「自由な時間を過ごす場所」の選択特性

3-2-1 選択場所（表3-4、表3-5）

まず、4地区全体における地域住民の居場所の選択特性について捉え、居場所における地域施設の位置づけを把握する。アンケートでは「自由な時間を過ごす場所」の選択肢として、自宅、職場・学校、友人宅、公共施設（図書館、公民館等、文化施設、美術館等、スポーツ施設、教育施設）、民間施設（商業施設、娯楽施設、飲食店）、自然（公園、山や海）、その他を挙げ、一人当たり最大4件^{注3-3)}まで選択してもらった（表3-4）。「自宅」を選択する人が89%で最も高く、次いで「民間施設」55%、「公共施設」39%、「友人宅」32%の順となり、「民間施設」や「公共施設」といった地域施設が、自宅や職場・学校以外で過ごす主要な居場所となっている。

次に、年齢層を若年層（15-24歳）、中間層（25-64歳）、高齢層（65歳以上）に分類し比較すると、いずれの層も「自宅」の選択率が高いが、若年層は、「職場・学校」44%（主として学校）、「友人宅」56%、「民間施設」が71%あり、また、選択場所数も3.5件/人と他属性より高く、逆に「公共施設」（学校除く）が30%と低いのが特徴的である。

施設種ごとにみると（表3-5）、民間施設では「娯楽施設」が32%と他属性より高く、その他に「商業施設」「飲食店」でも25%以上あり、公共施設の「図書館」も15%ある。また、「飲食店」「図書館」に関しては、若年層は他属性よりも選択率が高く、全体的に選択場所がばらついている。このことから、若年層は主に放課後や休日に友人達と自由に過ごせる場所を様々に選択していると考えられる。

中間層は、「自宅」に次いで「民間施設」が63%と高いが、他の場所は3割程度であり、「民間施設」が突出しているのが特徴的である。民間施設の中では「商業施設」が45%と他属性より高い。中間層は仕事や家事などにより自由な時間が限られるため、選択場所に偏りがみられると考えられる。また、「職場」は12%と低く、あくまで仕事の場として捉えられ、若年層の「学校」の意識とは異なる。

高齢層は、「自宅」の割合が他属性より1割ほど低く、「自宅」を居場所にできていない人が約2割いる。「自宅」以外の各選択場所も5割に満たず、選択場所数も2.6件/人と少ない。しかし、「公共施設」が46%と高く、「民間施設」が34%しかない点で他属性とは対照的である。特に、公民館等の身近な施設の利用が多い（27%）。つまり、高齢者といえども自宅に引きこもっている訳ではなく、学校や職場等の帰属組織を持たず、家族との関係も希薄になりがちな高齢層にとって、身近な「公共施設」が自宅以外で他者との交流が図れる貴重な居

注3-3) アンケートにおける選択肢は、「自宅」「職場・学校」「友人宅」「図書館」「公民館等（集会所、市民センター含む）」「文化施設」「美術館等（博物館含む）」「スポーツ施設」「教育施設」「商業施設」「娯楽施設」「飲食店」「公園」「山や海」「その他」の15項目とし、この中から最大4件まで選択可とした。

表 3-6 最もよく利用する地域施設 (有効回答者数 N=1824)

施設種	公共施設						民間施設			計
	図書館	公民館等	文化	美術館等	スポーツ	教育	商業	娯楽	飲食店	
回答者数	181	235	54	12	214	43	824	139	122	1824
	739						1085			

注) 単一回答

表 3-7 利用形態 (有効回答者数 N=1804:表 3-6 より性別・年齢不明 20 名を除外)

性別・年齢層 ・回答者数		男性				女性			
		若年層	中間層	高齢層	計	若年層	中間層	高齢層	計
利用形態	ほぼ毎日	2%	3%	5%	3%	11%	5%	3%	5%
	週3回以上	13%	9%	14%	11%	11%	14%	12%	13%
	週1回以上	31%	36%	29%	33%	28%	36%	30%	34%
	月2回以上	22%	27%	25%	26%	29%	25%	25%	26%
	月1回以上	18%	16%	13%	15%	14%	13%	19%	14%
	月1回未満	12%	8%	8%	8%	6%	5%	5%	5%
	不明	3%	1%	6%	3%	1%	2%	6%	3%
	計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
交通手段	徒歩	3%	3%	12%	5%	6%	3%	20%	6%
	自転車	24%	3%	4%	5%	13%	4%	16%	7%
	バイク	4%	1%	4%	2%	2%	2%	5%	2%
	公共交通	15%	2%	3%	3%	25%	3%	12%	7%
	タクシー	0%	1%	1%	1%	0%	0%	1%	0%
	自家用車	50%	90%	70%	81%	53%	86%	43%	75%
	その他	2%	0%	1%	1%	0%	0%	1%	0%
	不明	3%	1%	5%	3%	1%	2%	4%	2%
	計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
一緒に過ごす人	家族	10%	38%	24%	31%	16%	42%	19%	36%
	近所	0%	1%	10%	3%	1%	3%	16%	5%
	学生時代の友人	21%	2%	1%	3%	15%	1%	2%	3%
	家族の友人	0%	1%	4%	1%	0%	2%	1%	1%
	趣味の友人	15%	17%	23%	19%	6%	15%	41%	19%
	職場や学校の人	18%	4%	1%	4%	29%	2%	1%	4%
	ひとり	29%	34%	27%	32%	24%	30%	13%	26%
	その他	4%	3%	4%	3%	7%	2%	4%	3%
	不明	3%	2%	7%	3%	2%	3%	5%	4%
	計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
選択理由	サービス内容が充実	12%	13%	10%	12%	11%	15%	10%	14%
	職員の対応が良い	7%	6%	7%	7%	4%	5%	8%	6%
	家族・友人と利用できる	35%	29%	27%	29%	44%	37%	36%	38%
	誰にも邪魔されない	19%	25%	30%	26%	10%	15%	20%	15%
	家や学校・職場から近い	29%	17%	9%	16%	33%	21%	15%	21%
	ついで利用できる	7%	15%	6%	12%	12%	20%	6%	17%
	交通の便が良い	16%	17%	16%	17%	14%	15%	15%	15%
	施設の周辺環境が良い	3%	6%	10%	7%	3%	5%	4%	5%
	施設の雰囲気が良い	10%	15%	17%	15%	16%	12%	18%	14%
	施設内が暖やかで良い	6%	4%	4%	4%	7%	2%	2%	3%
	施設内が静かで良い	7%	7%	9%	7%	5%	4%	5%	5%
	その他	10%	14%	8%	12%	15%	14%	15%	14%
	不明	6%	3%	9%	5%	1%	4%	7%	4%
	計	169%	170%	161%	167%	177%	170%	160%	169%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満
 選択理由のみ複数回答（2つまで）。他の項目は単一回答

場所になっている。

性別でみると、選択場所数は約3件/人で、ほぼ同じであるが、女性は「友人宅」が男性より15%も高く39%あり、「民間施設」も若干高いのが特徴的である。一方、男性は、「自然」が女性より16%も高く36%あるのが特徴的である（表3-4）。施設種ごとにみると（表3-5）、「公共施設」では、男性は「スポーツ」、女性は「公民館等」がそれぞれ他属性より5%以上高い。「民間施設」では、女性は「商業施設」、男性は、「娯楽施設」を多く選択する傾向にあり、選択場所に男女差がみられた。

3-2-2 利用形態（表3-6、表3-7）

居場所として地域施設を選択する際の要因を捉えるため、ここでは、「自由な時間を過ごす場所」の選択肢の中から「自宅」「職場・学校」「友人宅」「自然」「その他」を除いた、最もよく利用する地域施設について、利用形態（利用頻度、交通手段、一緒に過ごす人、選択理由）を属性別に把握する。最もよく利用する地域施設の選択数は表3-6の通りであるが、ここでは地域施設を一括して分析する（4章で施設種ごとに分析）。利用形態に関するアンケート結果を表3-7に示す。

1) 利用頻度

施設の利用頻度をみると、男女共に、「ほぼ毎日」から「週1回以上」が各年齢層で約半数あり、日常生活において習慣的に地域施設で過ごしていることが分かる。「ほぼ毎日」から「週3回以上」の利用頻度の高い利用者は、どの属性でも1～2割程度みられる。特に男性の高齢層（19%）と女性の若年層（22%）が高く、頻繁に居場所を利用しているのに対し、男性の中間層（12%）は最も低く、週1回程度が主である。

2) 交通手段

施設への交通手段をみると、男女共に、「自家用車」の利用が平均約8割を占める。しかし、各属性でばらつきがみられ、中間層は男女共に80%以上と高いが、若年層は共に約50%、高齢層は男性70%、女性約43%と男女差がみられる。ちなみに、運転免許保有率は、中間層は約9割（男女共）、若年層は約5割（男女共）、高齢層は約6割（男約9割、女約3割）であり、高齢者女性の場合、免許保有率より「自家用車」の利用割合が1割程度高いのは、免許保有者との同伴利用と思われる。

他の交通手段では、若年層は「自家用車」に次いで「自転車」や「公

公共交通」の利用が2割前後みられるが、男性は「自転車」、女性は「公共交通」が高い。一方、高齢層は、「自家用車」に次いで「徒歩」の割合が高いのが特徴的である。特に、高齢層の女性の場合、免許保有率が男性より大幅に低く、「自家用車」の割合が中間層より4割程度落ち込むことから（男性の場合、約2割）、「自家用車」の利用を抑える傾向が男性より顕著であり、その分、「徒歩」が20%、「自転車」や「公共交通」が10%以上と高くなっている。

若年層や高齢層は、選択場所や生活圏が交通手段による制約を受けていると推察でき、より身近な施設が求められるといえる。

3) 一緒に過ごす人

施設で一緒に過ごす人についてみると、男女ともに「家族」「ひとり」が平均約3割、次いで「趣味の友人」が約2割と高い。属性別では、若年層は、男性は「ひとり」、女性は「職場や学校の人」が約30%と高い。中間層は「家族」が40%前後で最も高く、次いで「ひとり」が約30%である。高齢層は、男性は「ひとり」が27%で最も高いのに対し、女性は13%しかなく、代わって「趣味の友人」が41%で最も高い。つまり、高齢層は、子どもも独立し、時間的余裕もあるため、「家族」と過ごすよりも、男性は「ひとり」、女性は「趣味の友人」と過ごすことを選択する傾向にある。

4) 選択理由

施設の選択理由をみると、「家族・友人と利用できる」がどの属性においても約3割以上と高いが、特に女性が高い。次いで、若年層は、男女共に「家や学校・職場から近い」が約3割と高く、アクセスを重視している。中間層は、男性では「誰にも邪魔されない」(25%)、女性では、「家や学校・職場から近い」(21%)、「ついで利用できる」(20%)と続く。男女とも「ついで利用できる」は、若年層、高齢層より高いことから、自家用車を有し、限られた時間を効率的に過ごそうとする意識が窺える。高齢層は、男性では「誰にも邪魔されない」(30%)が最も高く、前述の「ひとり」で過ごす割合が高い理由と考えられる。このように、単にアクセス面の利用のしやすさだけでなく、「家族・友人と利用できる」や「誰にも邪魔されない」など、場所における人間関係に関する項目が主要な選択要因となっている。

3-2-3 属性からみた選択特性

以上より、「自由な時間を過ごす場所」の一人当たりの選択場所数は加齢に伴い減少し、選択場所も「自宅」「民間施設」は減少し、「公

共施設」は増加する傾向にあることがわかった。つまり、公共施設は、高齢層にとって主要な居場所となっているが、中間層や学校以外の公共施設の利用が少ない若年層に対して、いかに居場所を提供していくかが課題であるといえる。また、居場所の選択要因では、施設サービスよりも場所における人間関係やアクセスが重視されている。男性は家族や友人のほかに個人で過ごせる環境を、女性は家族や友人と過ごせる身近な環境を求める傾向がみられるなど、属性別の選択特性に配慮した施設計画が必要である。

表 3-8 充実感を感じる時の内容

(括弧内は略称)

・仕事や勉強をしている時(仕事)	・趣味に時間を費やしている時(趣味)
・育児や家事をしている時(家事)	・習い事をしている時(習い事)
・家族と団らんや旅行をしている時(家族)	・グループ・団体活動をしている時(団体活動)
・友人と雑談や旅行をしている時(友人)	・自主的な学習をしている時(自主学習)
・一人で休養をしている時(休養)	・その他

注) 複数回答(2つまで)。選択肢は「国民生活に関する世論調査」(内閣府)を参考

表 3-9 カテゴリースコア

(有効回答者数 N=2833)

指標		軸(寄与率)	I 軸 (15.4%)	II 軸 (12.1%)	III 軸 (10.8%)	IV 軸 (10.5%)	V 軸 (10.3%)
地域活動の参加有無	参加		1.81	0.67	-0.30	-0.12	0.35
	不参加		-0.98	-0.29	0.15	0.05	-0.16
自由な時間を過ごす 場所数の多さ	場所少		-1.17	1.92	-0.43	-0.34	0.91
	場所多		0.50	-0.86	0.20	0.14	-0.41
充実感を感じる 時の内容	仕事		-0.28	-0.13	-0.03	-0.79	0.54
	家事		0.08	-3.51	-4.26	-0.12	4.18
	家族		-0.02	-0.89	-0.20	-0.07	0.19
	友人		0.10	-0.28	1.30	-0.68	-1.73
	休養		-1.42	0.93	-0.08	-0.02	-0.07
	趣味		0.31	0.06	0.14	0.25	-0.27
	習い事		1.92	0.72	7.67	2.94	6.84
	団体活動		3.00	2.55	-1.60	-1.73	-0.48
	自主学習		0.35	1.40	-2.22	7.72	-1.64

注) 網掛け部は、濃：各軸の最大値、薄：各軸の最小値

(有効回答者数 N=2833)

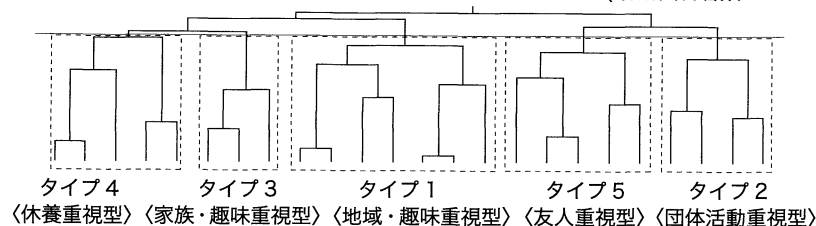


図 3-1 ライフスタイルの類型化 (クラスター分析樹形図)

表 3-10 タイプ別の構成人数割合と指標別割合

(有効回答者数 N=2833)

タイプ	回答数	構成人数割合	地域活動		場所数		充実感								
			参加	不参加	場所少	場所多	仕事	家事	家族	友人	休養	趣味	習い事	団体活動	自主学習
1	487	17.2%	94%	6%	2%	98%	28%	11%	53%	26%	3%	61%	6%	1%	0%
2	434	15.3%	85%	15%	38%	62%	22%	0%	20%	8%	16%	49%	0%	54%	18%
3	1010	35.7%	0%	100%	0%	100%	30%	0%	46%	31%	29%	49%	0%	0%	0%
4	666	23.5%	4%	96%	83%	17%	27%	16%	37%	2%	42%	37%	0%	0%	9%
5	236	8.3%	43%	57%	77%	23%	13%	0%	14%	81%	25%	27%	23%	5%	1%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満

表 3-11 タイプ別の属性

(有効回答者数 N=2833)

タイプ	回答数	年齢層				性別			計
		若年層	中間層	高齢層	不明	男性	女性	不明	
1	487	4%	71%	24%	1%	40%	59%	1%	100%
2	434	5%	53%	40%	2%	52%	46%	2%	100%
3	1010	13%	71%	15%	1%	52%	47%	1%	100%
4	666	4%	62%	31%	3%	49%	48%	3%	100%
5	236	9%	55%	36%	0%	27%	73%	0%	100%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満

表 3-12 年齢層別タイプ構成

年齢層・ 回答者数	年齢層		
	若年層	中間層	高齢層
タイプ	219	1835	733
1	10%	19%	16%
2	9%	13%	24%
3	61%	39%	20%
4	11%	23%	28%
5	10%	7%	12%
計	100%	100%	100%

注) 網掛け部は、25%以上

3-3 ライフスタイルからみた「自由な時間を過ごす場所」の選択特性

前節では、属性別に「自由な時間を過ごす場所」の選択特性をみてきたが、同じ性別・年齢層でも異なる過ごし方もみられることから、ここでは、ライフスタイルの視点から選択特性を捉える。

3-3-1 ライフスタイルの類型化（表 3-8 ～表 3-12、図 3-1）

まず、地域住民のライフスタイルを類型化する。ライフスタイルの指標には、生活に対する考え方や習慣など、様々な事柄が想定されるが、ここでは、「自由な時間を過ごす場所」の選択に影響すると考えられる以下の3つの指標を用いた。1つ目は、地域との関わりや活動状況を示し、地域施設の利用に関係すると考えられる「地域活動^{注3-4)}の参加有無（2項目）」である。2つ目は、外出行動の積極性や選択場所の豊富さを示し、「自宅」、「職場・学校」以外で過ごせる居場所を有するか否かの指標と見なすこともできる「自由な時間を過ごす場所数の多さ（2項目）」である。アンケートで「自由な時間を過ごす場所」（一人当たり最大4件まで）の選択数が2件以内を「場所少」、3件以上を「場所多」とした。3つ目は、生活上の志向性、価値観を示し、その多様性が選択場所に反映する考えられる「充実感を感じるときの内容（表 3-8）」である。以上、表 3-9 の通り、計3指標、13項目を設定し（「充実感を感じるときの内容」の「その他」を除く）、これらの指標をもとに数量化Ⅲ類及びクラスター分析（Ward 法）を用いて地域住民のライフスタイルを類型化した。数量化Ⅲ類では、5軸が得られ（累積寄与率 59%）、Ⅰ軸は、「余暇活動の積極性（+ 団体活動 - 休養）」、Ⅱ軸は、「社会的交流の積極性（+ 団体活動 - 家事）」、Ⅲ軸は、「活動の志向性（+ 習い事 - 家事）」、Ⅳ軸は「自主学习（+ 自主学习）」、Ⅴ軸は、「習い事（+ 習い事）」と解釈した（表 3-9）。さらに、クラスター分析を行った結果、5タイプに類型化できた（図 3-1）。

タイプの呼称は、地域活動の「参加」の割合が高い順にタイプ1、タイプ2とし、その他の「不参加」の割合が高い3つのタイプについては、高い順にタイプ3～5とした（表 3-10）。場所数では、タイプ1～3が「場所多」、タイプ4～5は「場所少」が高い。さらに、充実感を加味した各タイプの特徴を整理すると以下の通りとなる。

タイプ1は、地域活動は「参加」、場所数は「場所多」の割合が高く、充実感では「趣味」の割合が約6割と最も高い。よって、ここでは「地域・趣味重視型」とした。属性の内訳は、女性が約6割と高く、中間層の割合が約7割と高い（表 3-11）。また、属性別のタイプ構成割合（図 3-2）でも、中間層の女性における割合が最も高く（約2割）、若年層

注 3-4) サークル活動、ボランティア活動、趣味活動など、何らかのかたちで地域と関わりをもつ活動（自宅での個人的な趣味活動は含まない）。

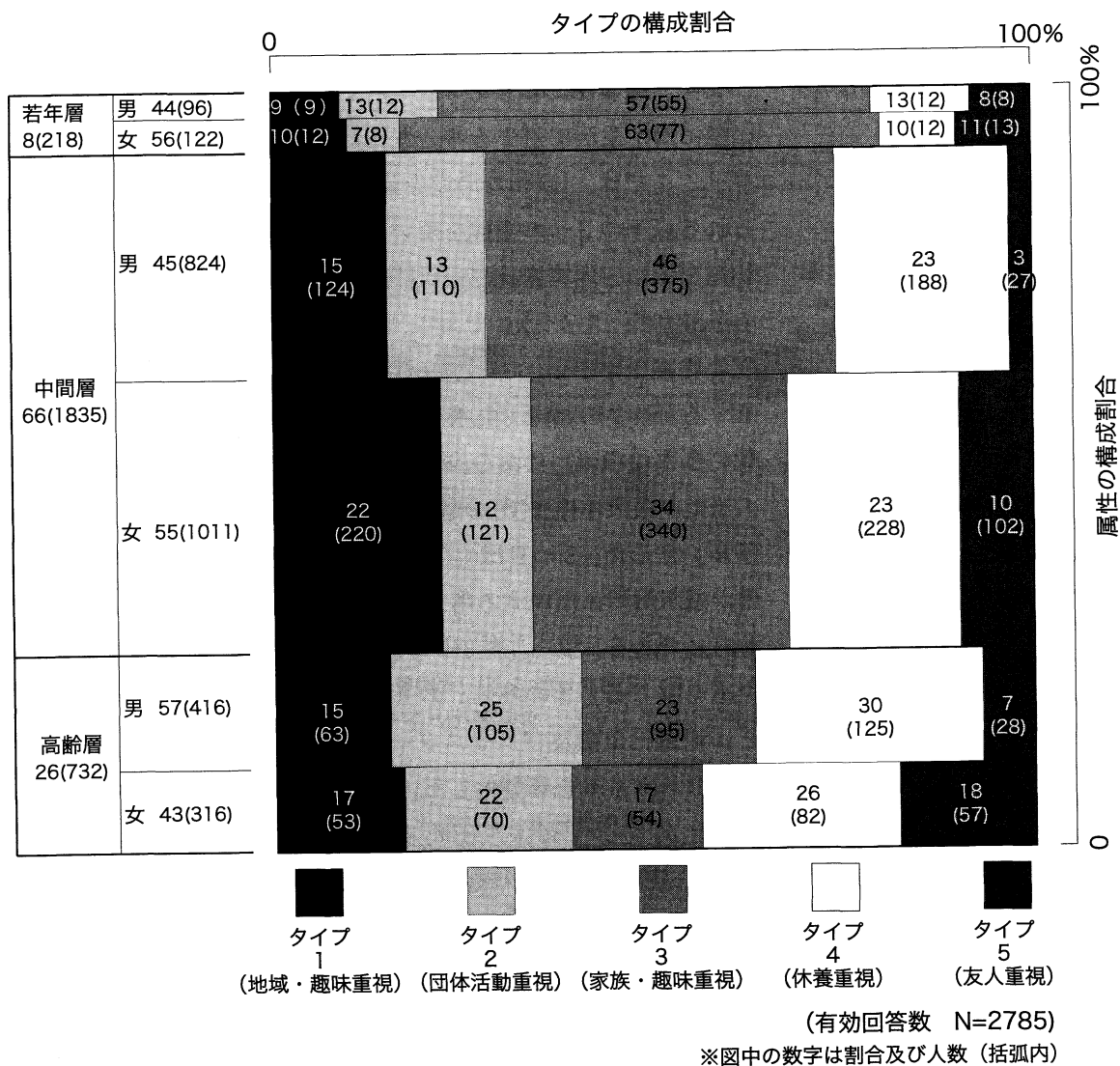


図 3-2 属性別のタイプ構成割合

が低い（約1割）。

タイプ2は、地域活動は「参加」、場所数は「場所多」の割合が高く、充実感では「団体活動」（54%）が最も高い。よって、「団体活動重視型」とした。属性の内訳は、性別の偏りは少なく、5タイプの中で最も高齢層の割合が高い（40%、表3-11）。属性別のタイプ構成割合（図3-2）でも同様に高齢層の割合が高く（約2割）、若年層が低い（約1割）。

タイプ3は、地域活動は「不参加」、場所数は「場所多」の割合が高く、充実感では「家族」「趣味」の割合が約5割と高く、「習い事」や「団体活動」などはみられない。つまり、地域の人々との関わりよりも家族や友人など親しい間柄との関係を重視し、団体活動など目的性の高い活動より、自由な趣味活動を好む層であるといえる。よって、「家族・趣味重視型」とした。構成人数割合は、5タイプの中で最も高い（約36%、表3-10）。属性の内訳は、性別の偏りは少なく、中間層の割合が約7割と最も高い（表3-11）。属性別のタイプ構成割合（表3-12、図3-2）では、若年層が約6割と最も高く、次いで中間層が約4割、高齢層が約2割の順となっており、加齢に伴い減少傾向にある。

タイプ4は、地域活動は「不参加」、場所数は「場所少」の割合が高く、充実感も「休養」が約4割と最も高い。つまり、地域との関係、活動、外出のいずれも消極的な層であることから、ここでは「休養重視型」とした。属性の内訳は、性別の偏りは少なく、中間層の割合が高いが（表3-11）、属性別のタイプ構成割合をみると、高齢層の中では最も多いタイプ（28%）となっており（表3-12）、特に高齢層の男性の割合が約3割と高い（図3-2）。

タイプ5は、地域活動は「不参加」の割合が高く、場所数は「場所少」が高い。充実感では「友人」が約8割と最も高く、「家族」が5タイプの中で最も低い。よって「友人重視型」とした。属性の内訳は、女性が約7割と高く、高齢層がタイプ2に次いで高い（36%、表3-11）。属性別のタイプ構成割合（表3-12、図3-2）では、各年齢層で女性の方が男性より高いが、特に高齢層の女性の割合が約2割と高い。

表 3-13 タイプ別の自由な時間を過ごす場所 (有効回答者数 N=2833)

タイプ	回答者数	選択場所						
		自宅	職場 学校	友人宅	公共 施設	民間 施設	自然	その他
1	487	91%	11%	36%	66%	71%	35%	13%
2	434	79%	10%	26%	63%	42%	26%	14%
3	1010	96%	21%	46%	33%	80%	39%	16%
4	666	89%	6%	14%	16%	27%	15%	10%
5	236	78%	6%	28%	33%	32%	11%	7%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満。「自然」は、公園、山や海を含む。
選択場所の各項目の割合は、同じ項目の場所を複数回答した場合も1件としてカウント

表 3-14 タイプ別の最もよく利用する地域施設 (有効回答者数 N=1729)

タイプ	回答者数	公共施設						民間施設			計
		図書館	公民館等	文化	美術館等	スポーツ	教育	商業	娯楽	飲食	
1	399	10%	18%	4%	1%	16%	3%	40%	5%	5%	100%
2	275	10%	31%	5%	2%	14%	4%	25%	4%	4%	100%
3	729	9%	2%	2%	0%	9%	1%	57%	11%	9%	100%
4	224	16%	4%	3%	0%	9%	0%	53%	7%	7%	100%
5	102	7%	27%	4%	0%	11%	4%	34%	7%	6%	100%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満。単一回答
公民館等には、集会所、市民センターを含む。美術館等には、博物館を含む。

表 3-15 タイプ別の地域施設の選択理由 (有効回答者数 N=1729)

タイプ	回答者数	サービス		人間関係		アクセス			施設環境				その他	計
		サービス内容が充実	職員の対応が良い	家族・友人と利用できる	誰にも邪魔されない	家や学校・職場から近い	ついで利用できる	交通の便が良い	施設の周辺環境が良い	施設の雰囲気が良い	施設内が賑やかで良い	施設内が静かで良い		
1	399	13%	5%	38%	16%	17%	12%	16%	6%	15%	4%	7%	16%	163%
2	275	7%	8%	29%	25%	17%	8%	11%	10%	15%	1%	7%	17%	155%
3	729	16%	7%	35%	20%	21%	18%	17%	5%	13%	4%	5%	10%	171%
4	224	16%	5%	29%	20%	17%	18%	20%	4%	12%	2%	6%	14%	162%
5	102	10%	0%	36%	21%	22%	12%	12%	9%	18%	4%	10%	10%	162%

注) 網掛け部は、25%以上。複数回答 (2つまで)

表 3-16 タイプ別の地域施設で一緒に過ごす人 (有効回答者数 N=1729)

タイプ	回答者数	家族	近所	学生時代の友人	家族の友人	趣味の友人	職場や学校の人	ひとり	その他	不明	計
1	399	33%	4%	2%	1%	30%	3%	21%	3%	4%	100%
2	275	18%	9%	1%	3%	34%	1%	26%	4%	4%	100%
3	729	39%	2%	4%	1%	8%	7%	34%	3%	3%	100%
4	224	47%	2%	3%	3%	5%	1%	36%	1%	2%	100%
5	102	23%	12%	5%	2%	25%	4%	24%	1%	5%	100%

注) 網掛け部は、25%以上。単一回答

3-3-2 選択場所と利用形態（表 3-13 ～表 3-16）

タイプ別に「自由な時間を過ごす場所」の選択場所をみると（表 3-13）、いずれも「自宅」を選択する割合が高い点で共通するが、地域施設の公共施設と民間施設の選択割合に各タイプの特徴がみられる。タイプ1（地域・趣味重視型）は公共・民間施設共に約7割と高い割合を占め、タイプ2（団体活動重視型）は公共施設、タイプ3（家族・趣味重視型）は民間施設の割合が高い。タイプ4（休養重視型）、タイプ5（友人重視型）は、公共・民間施設共に約3割以下と少なく、特にタイプ4は最も低い。公共施設の選択割合が高いのはタイプ1, 2であり、いずれも地域活動への参加割合が高い層である。

次に、タイプ別に「自由な時間を過ごす場所」のうち最もよく利用する地域施設をみると（表 3-14）、タイプ1（地域・趣味重視型）は、「商業施設」が40%と高く、次いで「公民館等」（18%）、「スポーツ施設」（16%）と公共施設がつづく。タイプ2（団体活動重視型）は、「公民館等」が31%と最も高く、次いで「商業施設」（25%）となる。タイプ3（家族・趣味重視型）は、「商業施設」（57%）が圧倒的に高い。タイプ4, 5は、前述の通り、地域施設の利用は少ないが、その中でも「商業施設」が共に最も高く、次いで、タイプ4（休養重視型）は「図書館」が16%と5タイプの中で最も高く、タイプ5（友人重視型）は「公民館等」（27%）が高いのが特徴的である。

地域施設の選択理由をみると（表 3-15）、各項目のタイプ間の差は1割以内であり、大きな開きはみられない。どのタイプも「家族・友人と利用できる」が3～4割程度あり、選択理由の中で最も高い。他の項目では、「誰にも邪魔されない」が、タイプ1を除く4タイプで20%以上ある。つまり、どのタイプも人間関係に関する項目が主要な選択要因となっていることがわかる。そこで、さらに地域施設で一緒に過ごす人について詳しくみると（表 3-16）、各タイプの25%以上の項目は、タイプ1（地域・趣味重視型）では「家族」「趣味の友人」、タイプ2（団体活動重視型）では「趣味の友人」「ひとり」、タイプ3（家族・趣味重視型）とタイプ4（休養重視型）では「家族」「ひとり」、タイプ5（友人重視型）では「趣味の友人」となっており、各タイプごとに特徴がみられる。

3-3-3 ライフスタイルからみた選択特性

以上より、地域住民のライフスタイルは、「自由な時間を過ごす場所」として地域施設の利用の多い層（タイプ1～3）と少ない層（タイプ4, 5）に大きく分かれる。また、前者における地域施設の選択では、地域活動の参加有無が関係しており、地域活動参加層（タイプ1, 2）は公共

表 3-17 施設種の利用形態

(有効回答者数 N=1824)

施設種 ・ 回答者数		公共施設						民間施設		
		図書館	公民館等	文化	美術館等	スポーツ	教育	商業	娯楽	飲食店
利用形態		181	235	54	12	214	43	824	139	122
交通手段	徒歩	6%	25%	4%	0%	2%	7%	2%	1%	7%
	自転車	7%	13%	11%	0%	5%	12%	4%	4%	3%
	バイク	4%	5%	4%	0%	3%	7%	1%	1%	0%
	公共交通	4%	3%	13%	17%	2%	19%	4%	10%	10%
	タクシー	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	5%
	自家用車	79%	51%	65%	75%	86%	53%	86%	82%	71%
	その他	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	2%
	不明	1%	3%	4%	8%	2%	0%	2%	3%	2%
計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
利用頻度	ほぼ毎日	0%	1%	0%	0%	4%	14%	5%	1%	13%
	週3回以上	6%	6%	2%	0%	20%	21%	15%	4%	12%
	週1回以上	22%	37%	17%	25%	44%	44%	35%	34%	24%
	月2回以上	46%	26%	19%	8%	21%	12%	25%	27%	23%
	月1回以上	19%	20%	33%	8%	5%	2%	13%	19%	19%
	月1回未満	8%	4%	24%	50%	5%	7%	4%	9%	7%
	不明	1%	5%	6%	8%	2%	0%	2%	5%	2%
	計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
一緒に過ごす人	家族	23%	2%	22%	25%	7%	5%	58%	17%	32%
	近所	1%	22%	4%	8%	6%	7%	0%	0%	6%
	学生時代の友人	1%	0%	2%	8%	5%	2%	2%	11%	7%
	家族の友人	0%	2%	0%	0%	2%	5%	1%	1%	5%
	趣味の友人	1%	58%	41%	0%	48%	35%	2%	22%	13%
	職場や学校の人	2%	1%	0%	8%	6%	21%	2%	8%	13%
	ひとり	72%	5%	22%	25%	21%	12%	30%	35%	17%
	その他	0%	5%	6%	17%	3%	12%	2%	2%	4%
不明		1%	6%	4%	8%	2%	2%	4%	4%	2%
計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満。単一回答
公民館等には、集会所、市民センターを含む。美術館等には、博物館を含む

表 3-18 施設種の施設像

(有効回答者数 N=1824)

施設種・回答者数		公共施設						民間施設		
		図書館	公民館等	文化	美術館等	スポーツ	教育	商業	娯楽	飲食店
施設像		181	235	54	12	214	43	824	139	122
活動意識	好きな活動をする所	13%	49%	30%	17%	40%	47%	3%	11%	2%
	新しい発見をする所	27%	11%	11%	42%	2%	7%	5%	1%	3%
	用事や仕事を済ませる所	6%	6%	7%	0%	1%	9%	32%	1%	2%
	遊ぶ所	1%	3%	6%	0%	11%	2%	6%	39%	4%
	気分転換する所	24%	26%	41%	42%	48%	21%	27%	47%	35%
	習慣的に行く所	10%	6%	4%	0%	7%	7%	13%	1%	9%
	暇をつぶす所	11%	3%	6%	0%	1%	7%	17%	9%	5%
	休憩する所	2%	1%	2%	8%	0%	0%	1%	6%	13%
人間関係	集まりに身を預ける所	0%	12%	6%	0%	2%	2%	0%	1%	0%
	家族・友人と過ごす所	6%	10%	13%	8%	13%	16%	18%	14%	40%
	知人に会える所	1%	23%	7%	0%	12%	28%	2%	4%	12%
	自分の時間を過ごす所	57%	14%	31%	17%	26%	9%	12%	22%	17%
立空地間	立ち寄る所	14%	5%	4%	0%	1%	5%	29%	6%	11%
	居心地の良い所	12%	5%	11%	8%	6%	16%	3%	12%	16%
他	その他	1%	3%	2%	17%	8%	16%	8%	2%	7%
不明		3%	5%	6%	8%	4%	0%	4%	6%	5%
計		187%	180%	185%	167%	185%	193%	178%	181%	181%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満。複数回答(2つまで)
公民館等には、集会所、市民センターを含む。美術館等には、博物館を含む

施設を主として選択し、不参加層（タイプ3）は民間施設を選択する傾向がみられた。今後、地域住民のライフスタイルへの対応が施設計画に必要であるといえるが、地域活動参加層の活動の場としての要求には、公民館等やスポーツ施設などの公共施設の機能的充実を図ることで対応可能であるといえる。しかし、地域社会の人間関係が希薄化している今日、多数を占める地域活動不参加層に対して、いかに公共施設をはじめとした地域施設が受け皿となるかが課題といえる。

3-4 利用者が抱く施設像

前節まで地域住民の属性やライフスタイルによって居場所の選択特性が異なることをみてきたが、ここでは、その主要な受け皿となる地域施設が居場所となるための課題を抽出するため、地域施設が利用者にどのような場所として認識されているか、利用者が抱く施設像を施設種ごとに捉える。そして、施設像に影響を及ぼす共通因子を見出し、施設種と施設像との対応関係について捉える。

3-4-1 施設種の利用形態（表 3-17）

まず、「自由な時間を過ごす場所」のうち最もよく利用する地域施設について、各施設種の利用形態（交通手段、利用頻度、一緒に過ごす人）を概観する。施設への交通手段は、どの施設種も「自家用車」の利用が大半を占めるが、公民館等は、「徒歩」「自転車」の割合も高い（約4割）。施設の利用頻度は、公共施設では、公民館等、スポーツ施設、教育施設の利用頻度は「週1回以上」が高く、図書館は「月2回以上」が中心であり、文化施設や美術館等に至っては「月1回以上」「月1回未満」が主で利用が少なく、非日常的な利用施設であるといえる。一方、民間施設は「週1回以上」と「月2回以上」で約半数を占める。施設で一緒に過ごす人をみると、公共施設では、図書館は「ひとり」が72%と最も高く、個人利用を主とした施設であるといえる。他の公共施設は美術館等を除き、「趣味の友人」が約4割で最も高く、趣味仲間との利用を主とする。一方、民間施設では、商業施設、飲食店は「家族」が3割以上と高いのに対し、娯楽施設は、「ひとり」や「趣味の友人」が2割以上あり、利用形態が異なる。

3-4-2 施設像の類型化（表 3-18 ～表 3-20）

各施設種の施設像を捉えるために、「自由な時間を過ごす場所」のうち、最もよく利用する地域施設について、「あなたにとってその場所はどんなところですか」という質問を行った。その回答の選択肢は、

表 3-19 因子負荷量

施設像	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
立寄	0.93	-0.32	-0.05	0.05	0.02
暇	0.87	-0.26	-0.10	0.15	0.18
用事	0.87	-0.07	-0.34	-0.01	-0.25
習慣	0.85	0.10	0.16	-0.14	0.11
知人	-0.02	0.86	0.29	-0.05	-0.29
活動	-0.30	0.85	-0.25	-0.14	-0.10
集まり	-0.13	0.77	-0.25	0.07	0.06
家族	0.23	-0.10	0.78	0.21	-0.28
居心地	-0.17	-0.02	0.68	-0.10	0.08
休憩	-0.28	-0.52	0.61	0.05	-0.13
遊ぶ	-0.17	-0.15	-0.04	0.78	0.07
気分	-0.59	-0.32	-0.07	0.50	-0.02
自分	-0.03	-0.21	-0.08	-0.17	0.80
発見	-0.34	-0.34	-0.24	-0.64	0.11
他	-0.16	-0.07	0.04	-0.42	-0.67

表 3-20 固有値と寄与率

因子 No.	固有値 (二乗和)	寄与率 (%)	累積 寄与率 (%)
1	3.92	26.10	26.10
2	2.82	18.80	44.90
3	1.87	12.47	57.37
4	1.60	10.68	68.05
5	1.41	9.42	77.48

(凡例)

立寄 : 立ち寄る所
暇 : 暇をつぶす所
用事 : 用事や仕事を済ませる所
習慣 : 習慣的に行く所
知人 : 知人に会える所
活動 : 自分の好きな活動をする所
集まり : 人の集まりに身を預ける所
家族 : 家族・友人と過ごす所
居心地 : 居心地の良い所
休憩 : 休憩する所
遊ぶ : 遊ぶ所
気分 : 気分転換する所
自分 : 自分の時間を過ごす所
発見 : 新しい発見をする所
他 : その他

注) 網掛け部は、因子負荷量が0.5以上

表 3-21 施設種の因子得点

施設種		因子	因子 1 (気軽さ)	因子 2 (社会的)	因子 3 (安らぎ感)	因子 4 (解放感)	因子 5 (個人的)
公共 施設	図書館		2.51	-2.24	-1.02	-1.78	3.54
	公民館等		-1.07	5.37	-1.79	-0.44	-0.35
	文化		-1.51	0.82	-0.79	0.41	1.15
	美術館等		-5.39	-2.49	-0.42	-2.20	-1.12
	スポーツ		-2.44	1.58	-0.94	0.85	-0.13
	教育		0.42	3.82	0.97	-1.74	-2.31
民間 施設	商業		9.00	-2.46	-1.63	0.36	-0.66
	娯楽		-2.02	-2.18	0.47	3.75	0.89
	飲食店		0.51	-2.23	5.16	0.79	-1.03

注) 網掛け部は2以上

公民館等には、集会所、市民センターを含む。美術館等には、博物館を含む

表 3-22 地域別のアンケート回答者属性

(有効回答者数 N=3051)

属性	地区・回答者数	四日市	津	志摩	大紀	計
年齢層	若年層	8%	8%	5%	8%	7%
	中間層	68%	60%	67%	59%	64%
	高齢層	23%	30%	24%	32%	27%
	不明	1%	2%	3%	2%	2%
性別	男性	48%	46%	47%	49%	47%
	女性	51%	53%	51%	50%	52%
	不明	1%	1%	3%	1%	2%

表 3-23 地域別の主要な施設整備状況

施設	地区	四日市	津	志摩	大紀
施設数	公共				
	図書館	5	12	3	0
	公民館	34	40	17	6
	体育館	6	8	4	2
	大規模店舗	6	5	1	0
(人口あたり)	民間				
	小売業商店・飲食店数	4,214	3,593	1,100	227
	公共				
	図書館数/1万人	0.2	0.4	0.5	0.0
	公民館/1万人	1.1	1.4	2.8	5.3
(人口あたり)	民間				
	体育館/1万人	0.2	0.3	0.7	1.8
	大規模店舗/1万人	0.2	0.2	0.2	0.0
(人口あたり)	民間				
	商店・飲食店数/1万人	131.4	125.4	178.5	200.3

注3-5) アンケート回答の選択肢は、既往研究である下記の論文を参照し、図書館以外の施設種にも適用できるように再整理している。

・高木直子・今井正次ほか「利用意識からみた図書館像 地域施設論の再構築に関する研究2」日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 401-402、1997. 9

過ごす場所における「活動意識」、「人間関係」、「立地・空間」に関する計15項目(その他含む)とした^{注3-5)}。この回答割合を表3-18に示す。これより、各施設種は利用者に多様な施設像がもたれていることがわかる。また、施設像の共通点もみられ、特に「気分転換する所」は公共、民間施設ともに2割以上あり、これらの施設は、生活の核となる自宅や学校・職場などから離れ、気分転換を図る居場所として意識されているといえる。

次に、各施設種の施設像の回答割合(表3-18)をもとに因子分析を行い、施設像に影響を及ぼすと考えられる共通因子を抽出する。分析の結果、固有値1以上の因子軸が1～5軸得られた(表3-20、累積寄与率77%)。表3-19は、因子負荷量(各因子が各施設像に及ぼす影響の度合いを示す)が0.5以上の項目を、因子1より順に並び替えて整理したものである。これより、因子1は「気軽さ」(+立寄・暇、-気分)、因子2は「社会的」(+知人・活動、-休憩)、因子3は「安らぎ感」(+家族・居心地、-用事)、因子4は「解放感」(+遊ぶ・気分、-発見)、因子5は「個人的」(+自分、-他・知人)と解釈できる。

3-4-3 施設種の施設像(表3-21)

上記の各因子における各施設種の因子得点を整理したのが表3-21である。公共施設と民間施設を比較すると、公共施設は、公民館等や教育施設をはじめとして因子2が6施設中4施設で正の値であり、民間施設のすべてで負の値であることから、公共施設特有の施設像として、他者との人間関係を深め、目的をもった活動を行う社会的な居場所の意識があげられる。一方、因子3,4は全般的に公共施設が低く、特に因子3は、6施設中、教育施設以外の5施設で負の値であることから、公共施設は、因子3の得点の高い飲食店のよう、家族や友人と落ち着いて過ごせる安らぎ感のある居場所としての意識が低いといえる。公共施設において、いかにこのような特性をもたせるかが課題であるといえる。

因子1は、公共施設では図書館、民間施設では商業施設の値が高く、ふらっと立ち寄れる気軽な居場所として意識されている点で両者は類似した性格をもった場所といえる。他の公共施設では因子1の値が低いことから、アクセスの改善、利用料や時間制限の緩和、目的外利用への対応など、気軽な居場所とするための改善が求められる。また、図書館は、因子5が10施設で最も高い点が商業施設と異なり、個人的な居場所でもあるといえる。公共施設では気軽に立ち寄れ、個人で過ごせる居場所は図書館ぐらいしかなく、いかに他の施設種でこのような公的な空間で私的に過ごす要求に応えていくかが課題であろう。

表 3-24 選択場所の地域差

(有効回答者数 N=3051)

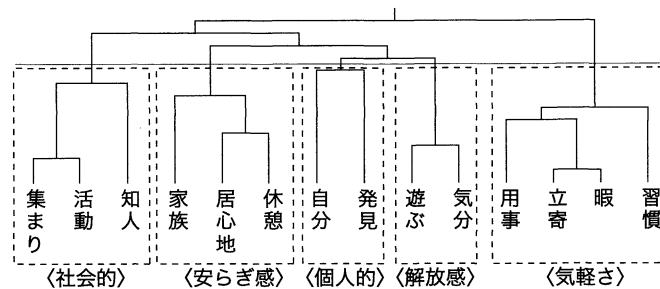
地区・回答者数		四日市	津	志摩	大紀
選択場所		1091	1138	527	295
自宅		90%	88%	90%	89%
職場・学校	135%	12%	13%	13%	11%
友人宅		33%	29%	35%	33%
公共施設	図書館	8%	17%	17%	4%
	公民館等	11%	16%	11%	10%
	文化	6%	6%	4%	4%
	美術館等	3%	5%	1%	1%
	スポーツ	16%	14%	13%	8%
	教育	2%	2%	1%	1%
民間施設	商業	44%	39%	34%	23%
	娯楽	18%	18%	13%	12%
	飲食店	25%	21%	19%	13%
自然	公園	15%	8%	10%	9%
	山や海	15%	20%	27%	29%
その他		12%	13%	16%	16%
計		309%	307%	303%	262%
(選択場所数/人)		(3.1件/人)	(3.1件/人)	(3.0件/人)	(2.6件/人)

注) アンケートでは、「自由な時間を過ごす場所」を一人当たり最大4件まで選択可とした

表 3-25 ライフスタイルの地域差

(有効回答者数 N=2833)

タイプ・回答者数	地区	四日市	津	志摩	大紀	全体
1 地域・趣味重視型	487	17%	18%	17%	13%	17%
2 団体活動重視型	434	14%	15%	16%	19%	15%
3 家族・趣味重視型	1010	37%	36%	36%	29%	36%
4 休養重視型	666	23%	23%	24%	29%	24%
5 友人重視型	236	9%	8%	7%	10%	8%
計	2833	100%	100%	100%	100%	100%



注) 表18の因子負荷量をもとに、「その他」を除く14項目についてクラスタ分析を行った (Ward法)。各項目については、表18の凡例を参照

図 3-3 施設像の類型化 (クラスタ分析樹形図)

表 3-26 施設像の地域差

(有効回答者数 N=1812: 地区不明を除外)

地区・施設・回答者数		四日市			津			志摩			大紀		
施設像		公共	民間	全体	公共	民間	全体	公共	民間	全体	公共	民間	全体
気軽さ	立寄	228	443	671	339	402	741	124	161	285	44	71	115
	暇	5%	24%	18%	7%	27%	18%	7%	17%	13%	2%	17%	11%
	用事	3%	14%	10%	6%	16%	12%	6%	14%	10%	2%	13%	9%
	習慣	4%	26%	18%	4%	26%	16%	8%	22%	16%	0%	18%	11%
	計	7%	11%	9%	7%	12%	10%	7%	13%	11%	9%	3%	5%
社会的	計	18%	74%	55%	25%	81%	55%	27%	66%	49%	14%	51%	37%
	知人	15%	4%	8%	11%	2%	6%	17%	4%	10%	9%	1%	4%
	活動	38%	5%	16%	33%	4%	17%	34%	1%	15%	43%	4%	19%
	集まり	6%	0%	2%	4%	0%	2%	9%	1%	4%	2%	1%	2%
	計	58%	9%	26%	48%	6%	25%	60%	6%	30%	55%	7%	25%
安らぎ感	居心地	9%	6%	7%	8%	5%	6%	7%	6%	6%	2%	7%	5%
	休憩	0%	3%	2%	2%	4%	3%	1%	3%	2%	5%	4%	4%
	家族	9%	21%	17%	11%	17%	14%	12%	22%	18%	14%	23%	19%
	計	18%	29%	26%	21%	26%	24%	19%	30%	25%	21%	34%	29%
	遊ぶ	8%	11%	10%	4%	8%	6%	3%	8%	6%	2%	18%	12%
解放感	気分	36%	29%	31%	34%	29%	31%	28%	35%	32%	30%	35%	33%
	計	44%	40%	41%	38%	37%	38%	32%	43%	38%	32%	54%	45%
	自分	29%	13%	18%	32%	14%	22%	22%	11%	15%	25%	24%	24%
	発見	9%	5%	6%	14%	4%	8%	17%	3%	9%	11%	3%	6%
	計	38%	18%	24%	46%	18%	31%	39%	13%	24%	36%	27%	30%
その他		6%	6%	6%	4%	7%	5%	5%	13%	10%	9%	3%	5%
計		182%	176%	178%	180%	174%	177%	182%	171%	175%	166%	175%	171%

注) 表中の割合 (%) は、「自由な時間を過ごす場所」として、公共又は民間施設を選択した人が、その施設に対して抱く施設像 (15項目のうち2つまで選択) の割合を示す。網掛け部は、濃: 50%以上、薄: 25%~50%未満

3-5 「自由な時間を過ごす場所」の地域差

居場所の選択特性は、地域における施設整備状況や、地域住民の人口構成・ライフスタイルなどにより影響を受けていることが予想される。そこで、ここでは、地域特性の異なる三重県内の4地区を比較し、「自由な時間を過ごす場所」の選択特性の地域差を捉える。

なお、地区別のアンケート回答者属性は表3-22の通りである。津地区と大紀地区は高齢層の割合が高く中間層が低い、他地区との差は1割以下であり、概ね同程度の属性構成となっている。

3-5-1 地域別の施設整備状況（表3-3、表3-23）

4地区（四日市、津、志摩、大紀）の主要施設の整備状況を表3-23に示す。人口が同程度の四日市地区と津地区を比較すると、四日市地区は、商業施設等の民間施設が充実しているのに対し、津地区は公共施設が充実している。中でも図書館が12ヶ所あり、四日市の倍以上である。県都であるため県施設が整備され、また、近年の市町村合併により旧町村部の公共施設が加わり、公共施設が充実する。人口が4地区で中程度の志摩地区は、津地区と比べ公共・民間ともに施設数こそ少ないが、人口あたりの施設数は若干多い。過疎地で最も人口が少ない大紀地区は、図書館は整備されていないが、人口あたりの施設数に換算すると、公民館や体育館は4地区で最も多い。

3-5-2 選択場所の地域差（表3-24）

4地区の「自由な時間を過ごす場所」の選択割合を表3-24に示す（一人当たり最大4件まで選択可）。各地区の選択割合の合計をみると、四日市、津、志摩地区はいずれも300%程度（約3件/人）であるのに対し、大紀地区は262%（約2.6件/人）と約40%（約0.4件/人）もの差がみられ、一人あたりの場所数が少ないことを示している。

選択場所の内訳をみると、「自宅」「職場・学校」「友人宅」の合計は4地区とも130%程度で地域差はみられず、主に公共・民間施設の選択において地域差が生じている。公共施設では、施設の充実する津地区が60%で最も高く、大紀地区が28%で最も低い。また、民間施設でも同様に、同施設の充実する四日市地区が87%で最も高く、大紀地区が48%で最も低い。大紀地区は公共・民間施設の選択割合が低い、海や山などの自然に恵まれた環境を有していることから、「自然」が志摩地区とともに37%で最も高い。つまり、公共・民間施設が不足する分、身近な自然環境を利用して過ごしていると考えられる。このように、施設整備状況や自然環境などの地域特性が、地域住民の

選択特性に顕著に影響していることがわかる。

3-5-3 ライフスタイルの地域差（表 3-25）

各地区の地域住民のライフスタイルについて、3-3 で導き出したタイプをもとに、タイプ別の構成割合をみると（表 3-25）、大紀地区を除きほぼ同程度で地域差はみられない。大紀地区は、タイプ3（家族・趣味重視型）が他地区より7%程度低く（29%）、タイプ4（休養重視型）が6%程度高い（29%）。これは、高齢層が若干多い年齢構成の影響が考えられるが（表 3-22）、高齢層の割合が同程度の津地区と比較しても差異がみられることから、地区の施設整備水準の低さが、ライフスタイルに少なからず影響しているものと推察できる。

3-5-4 施設像の地域差（図 3-3、表 3-26）

地域施設の施設像（3-4 参照）の地域差を捉えるため、表 3-19 の各因子の因子負荷量をもとに、15 項目の施設像のうち、その他を除く 14 項目についてクラスター分析を行い、「気軽さ」「社会的」「安らぎ感」「解放感」「個人的」の 5 項目に整理した（図 3-2）。この項目別に公共及び民間施設に対する施設像の地域差をみる（表 3-26）。

いずれの地区も、公共施設は「社会的」「個人的」が、民間施設は「気軽さ」「安らぎ感」が高く、「解放感」は同程度であり、3-4-3 でみた公共と民間の施設像の特徴が表れている。しかし、その割合には地域差がみられる。「気軽さ」は、四日市、津地区（55%）が高く、次いで志摩地区（49%）、大紀地区（37%）の順となり、2 割近い開きがある。「気軽さ」の施設像は、都市化の程度と関係していると推察できる。一方、「解放感」は大紀地区が 4 地区で最も高い（45%）。つまり、「解放感」は、「遊ぶ所」「気分転換する所」といった施設像と関連していることから、過疎地の大紀地区では、施設数や交通手段が限られるため、地域施設は身近な場所というより、むしろ日常から解放される居場所として意識される傾向が高いといえそうである。また、大紀地区のような非都市部においては、気軽な居場所となる民間施設も限られるため、公共施設を、より気軽に過ごせるような居場所として整備する必要があるといえる。

津地区の公共施設をみると、「気軽さ」（25%）、「個人的」（46%）が高く、「社会的」（48%）が他地区より低い。これは、3-4-3 でみた図書館の施設像の傾向と関連しており、他地区に比べ図書館が充実していることが要因と考えられる。他地区では、図書館に代わる気軽に立ち寄り、個人で過ごせる居場所の整備が必要といえる。

3-6 組織活動としての居場所の選択特性

前節までは、主として地域住民の各個人の視点で、居場所の選択特性について把握した。そこでは、「自由な時間を過ごす場所」として組織活動（サークル活動、団体活動等）の場を挙げる一定の層（団体活動重視型）がみられ、公民館等の地域施設を居場所として利用していることがわかった。組織活動は、地域施設の利用を促進し、個人活動からの活動展開をはかる意味で重要であると考えられる。

そこで、居場所は上記のように個人単位で選択されるだけでなく、組織的なグループ、団体単位で選択される場合が予想されるため、組織活動の場としての居場所の利用実態を、組織団体へのアンケート調査により把握する。そして、組織・団体の特性と施設利用との関係、組織活動への参加を阻害する要因などを捉える。

3-6-1 団体の活動実態

1) 対象団体の概要（表 3-27、表 3-28）

「現人数」は30人程度までの小・中規模な団体が多い。「活動内容」は音楽や俳句といった室内の趣味活動が半数以上と多いが、それ以外にもみられ、取り組む活動は多岐に渡っているといえる。「創設年」は1980年代以降で多く、近年の需要の高まりが確認できる。「活動頻度」は大多数の団体が月に1回以上の活動を行っており、組織活動が身近なものとして行われている。

メンバー構成比をみると、女性・高齢者・無職の属性に若干の偏りがみられるが、幅広い人々が多様な活動に取り組んでいる。また、「居住地」は旧市町村内までの範囲の集まりが多いが、旧市町村の域を超えた広がりもみられる。

2) メンバーの活動意識（表 3-29）

性別・年齢によらず、メンバーは団体内の交流、能力・技術の向上を重視している。つまり、他者との交流・自己実現要求を満たすことにより、メンバー自身の生活を充実させているといえる。また、地域への貢献といった、自己の為ではない要求を抱く団体もみられる。

3-6-2 団体の結成と新たな加入

1) 団体の結成契機（表 3-30）

団体の結成契機は大きく分けて、「講座」によるものと「既存の人間関係」によるものがみられる。前者は特に、安価で参加でき、誰もが気軽に利用できる公共施設（特に公民館）が行う講座が契機となる

表 3-27 団体の基礎情報

総数	212	
団体票なし	11	
現 人 数	団体数	201
	現人数不明	1
	回答団体数	200
	-9 名	39 20%
	10-19 名	87 44%
	20-29 名	34 17%
	30-49 名	16 8%
	50-99 名	8 4%
	100 名以上	16 8%
	総計	200 100%
活 動 内 容	団体数	201
	活動内容不明	9
	回答団体数	192
	室内の趣味活動	106 55%
	教養学習活動	22 11%
	ボランティア活動	13 7%
	スポーツ・健康活動	31 16%
	育児・教育活動	3 2%
	その他	17 9%
	総計	192 100%
創 設 年	団体数	201
	創設年不明	21
	回答団体数	180
	1949 年以前	5 3%
	1950 年代	6 3%
	1960 年代	11 6%
	1970 年代	19 11%
	1980 年代	32 18%
	1990 年代	59 33%
	2000 年代	48 27%
	総計	180 100%
活 動 頻 度	団体数	201
	活動頻度不明	47
	回答団体数	154
	週 1 回以上	40 26%
	月に 2 回程度	61 40%
	月に 1 回程度	41 27%
	月に 1 回未満	12 8%
	総計	154 100%

表 3-28 団体のメンバー構成

総数	212	
団体票なし	11	
男 女 構 成	団体数	201
	男女構成不明	4
	回答団体数	197
	すべて男性	9 5%
	男性多め	25 13%
	男女半々	17 9%
	女性多め	74 38%
	全て女性	72 37%
	総計	197 100%
年 齢 構 成	団体数	201
	年齢層不明	4
	回答団体数	197
	独身が多め	1 1%
	子育て期多め	4 2%
	子育て後多め	34 17%
	退職後多め	119 60%
	多様な年代	39 20%
	総計	197 100%
居 住 地	団体数	201
	居住地不明	3
	回答団体数	198
	小学校区内	19 10%
	旧市町村内	103 52%
	隣接旧市町村まで	17 9%
	合併津内	52 26%
	津より大	7 4%
	総計	198 100%
職 業 構 成	団体数	201
	職不明	7
	回答団体数	194
	すべて無職	26 13%
	ほとんど無職	98 51%
	有職・無職半々	44 23%
	ほとんど有職	23 12%
	すべて有職	3 2%
	総計	194 100%

(単一回答、調査 2)

* 以降の分析は回答のあった
201 団体に対して行う。

表 3-29 団体の活動意識

(最大2種回答、調査2)

	男女構成別比較			LC 構成別比較				全体	
	男性 主体	男女 半々	女性 主体	子育て まで	子育て 後多め	退職後 多め	多様な 年代	総計	
各母数	34	17	146	5	34	119	39	201	
重視不明	1	0	11	0	3	7	2	13	
回答団体数	33	17	135	5	31	112	37	188	
団体内の交流・親睦	67%	59%	66%	100%	61%	70%	51%	123	65%
他団体との交流・親睦	12%	24%	7%	40%	3%	8%	14%	17	9%
能力・技術の向上	58%	53%	51%	20%	48%	60%	38%	99	53%
技術の伝承・普及	3%	6%	12%	0%	3%	10%	16%	18	10%
作品の創作・展示	15%	24%	16%	0%	26%	16%	14%	31	16%
地域への貢献	18%	12%	27%	20%	39%	17%	35%	46	24%
その他	9%	6%	5%	20%	6%	4%	8%	12	6%
総計	182%	182%	184%	200%	187%	185%	176%	346	184%

男女構成では表9の「すべて男性」「男性多め」を、「男性主体」とする。女性も同様。

表 3-30 団体の結成契機

総数	201	
経緯不明	4	
回答数	197	
講座	公民館講座からの独立	73 37%
	公共講座（公民館以外）	6 3% 43%
	民間講座	6 3%
既存の 人間 関係	職場・学校の活動から	2 1%
	近隣住民の集まりから	18 9% 44%
	自主的な結成	67 34%
-	既存団体からの分裂・変更	7 4%
	その他	18 9%
総計	197 100%	

表 3-31 メンバーの増減

総数	201	
増減不明	15	
回答数	186	
減少	20人以上減少	6 3%
	10-19人減少	20 11%
	5-9人減少	22 12%
	1-4人減少	30 16%
増減なし	21 11%	
増加	1-4人増加	23 12%
	5-9人増加	23 12%
	10-19人増加	21 11%
	20人以上増加	20 11%
総計	186 100%	

表 3-32 新規参入者の参加契機

総数	201	
不明	12	
回答数	189	
参加者のつて	123	65%
他グループとのつながり	13	7%
ネットや会報から情報	5	3%
参入は殆どない	32	17%
その他	16	8%
総計	189 100%	

表 3-33 新規参入に対する意見

総数	201	
不明	14	
回答数	187	
増やしたい	152	81%
鑑賞者は増やしたい	24	13%
増やしたくない	11	6%
総計	187 100%	

(表11-14はいずれも単一回答、表10のメンバー増減は現人数と創設時人数の差、調査2)

表 3-34 施設の使い分けタイプ

(各団体の活動実績より分類、調査2)

タイプ	団体数	割合	総活動数	備考
拠点のみ	74	47%	845	活動実績の全てが、特定の活動場所
拠点あり	43	27%	579	活動実績の半数以上が、特定の活動場所
拠点なし	34	22%	440	特定の活動場所をもたない
施設不明	6	4%	52	活動実績に利用施設の記載なし
実績なし	44	-	-	活動実績に記入なし
総計	201	100%	1916	

割合は「実績なし」を除いた総計に対するもの。
(活動実績との対応、調査2)

表 3-35 施設の使い分けタイプにみる利用する施設

		拠点のみ	拠点あり	拠点なし	不明	総計
総活動数		845	579	440	52	1916
利用施設不明		0	9	7	0	16
回答数		845	570	433	52	1900
公共施設	自治会集会所	0%	6%	0%	0	32 2%
	公的集会施設	90%	67%	45%	28	1369 72%
	教育施設	0%	4%	6%	0	50 3%
	スポーツ施設	0%	2%	3%	0	25 1%
	地方文化施設	5%	5%	10%	0	116 6%
	図書館	3%	0%	2%	0	33 2%
	宗教施設	0%	0%	0%	0	2 0%
	福祉施設	0%	3%	3%	0	28 1%
民間施設	民間の貸し施設	0%	4%	6%	0	46 2%
	店舗	0%	4%	4%	0	18 1%
その他		0%	0%	0%	0	2 0%
施設ナシ	個人住宅	2%	4%	11%	24	113 6%
	施設は使用しない	0%	5%	9%	0	66 3%
総計		100%	100%	100%	52	1900 100%

(人数増減は現人数と創設時人数の差、調査2)

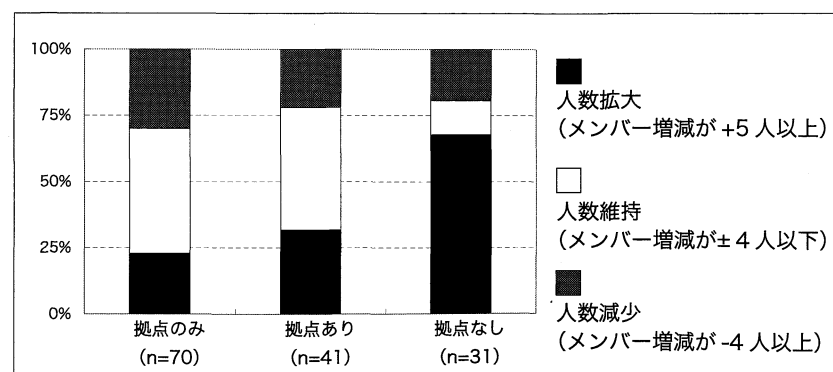


図 3-4 施設の使い分けタイプにみるメンバー増減

場合が多い。施設が開催する講座に参加することで同志をみつけ、団体結成に至っており、施設整備により促進できる可能性が高い。よって、更なる団体の結成を促す為には、講座を開催する公共施設の充実が必要といえる。

2) 新たな加入者の参加契機 (表 3-31 ～表 3-33)

メンバーの増減をみると、半数近い団体は増加しているが、減少している団体も4割程度と、相当の増減がみられる。減少については、メンバーの高齢化による脱退が多いと考えられる。

また、多くの団体は新たな加入者を増やしたいと考えているが、現状での参入契機の多くは、参加者のつてという、既存の人間関係による場合が多い。前述した団体の結成契機も既存の人間関係によるものが多く、内輪的な人間関係による展開が多いといえる。逆に言うと、既存の人間関係をもたない人が団体に参加するのは困難な状況である。一方、内輪的な人間関係によらない参加契機は、少数ではあるが会報やインターネット、さらには団体が行う成果発表である講演会や展示会から情報を得る加入に至る場合が多い。つまり、既存の人間関係をもたない人に参加契機を与えるには、情報提供の場を広く与える必要がある。

3-6-3 活動実績にみる施設利用の実態

1) 活動拠点の有無 (表 3-34)

各団体の活動実績（最大15回分の過去実績）から施設の使い分けタイプを設定したところ、7割以上の団体が活動の拠点施設を有していることが明らかとなった。ここでは、タイプによる施設利用実態をみる。

2) 利用する施設とメンバーの増減 (表 3-35、図 3-4)

活動場所として利用する施設は公共施設、特に公的集会施設が多い。活動が生活に身近なものとなっているため、低料金かつ近くに整備されている公共施設が選ばれる。その傾向は拠点施設をもっているほど強い。一方、拠点施設がない場合は地域施設を利用しない場合もある。また、公的集会施設もその内訳は様々であり、要は貸し館事業を行っている施設を選択している。

拠点施設を有する団体ほどメンバーの増加は少ないが、これは各団体がそれぞれ別個の施設で活動を行っているため、その情報が活動団体の身内以外には伝わらないためと考えられる。前述同様、既存の人間関係をもたない人への情報提供が不足がしているといえる。

表 3-36 非活動者の参加を阻害する要因

不参加者総数	2128		
不参加理由不明	90		
回答数	2038		
『時間』	時間合わない 時間がない	531 857	26% 42% 68%
『情報』	団体知らない 場所知らない	312 115	15% 6% 21%
『人間関係』	地域に友人少ない 人間関係煩わしい	171 236	8% 12% 20%
『趣向』	興味のある内容なし	533	26%
『施設整備』	場所不便 施設サービス不十分	72 24	4% 1% 5%
その他		228	11%
総計		3079	151%

(最大2種選択、図15は表17を整理・図化したもの、調査1)

(余暇を過ごす場所の選択状況と組織活動への参加有無の回答合わせ、調査1)

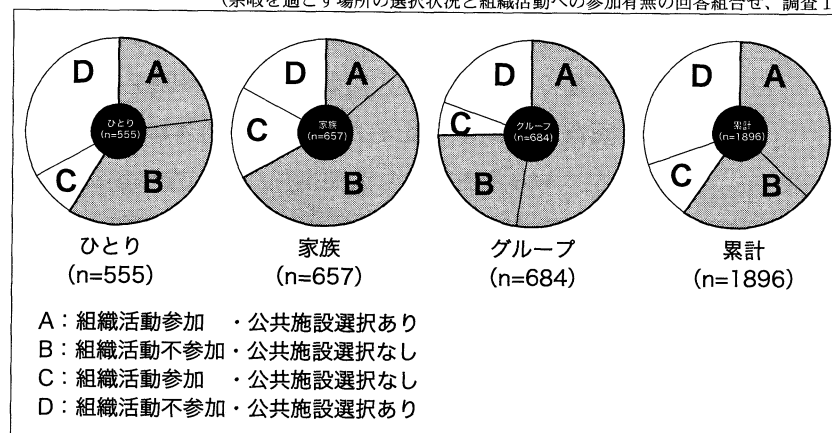


図 3-5 組織活動の参加有無と公共施設利用の関連

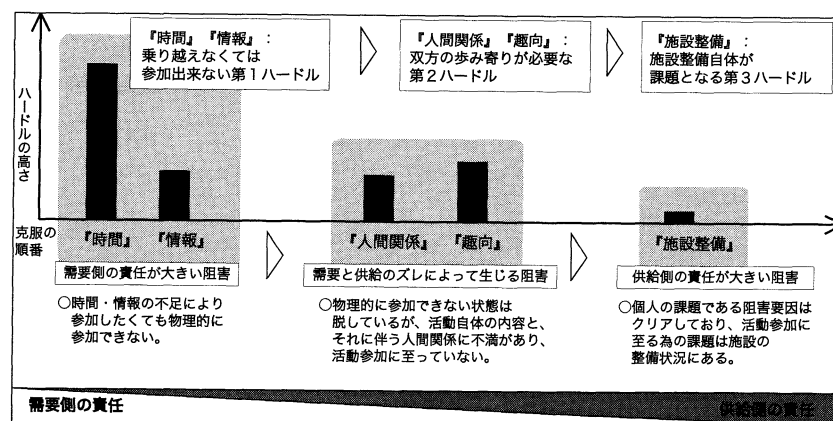


図 3-6 非活動者の参加を阻害する要因

個人の課題	1) 時間の不足	2) 情報の不足	3) 人間関係の不足	4) 趣向が合わない
団体の課題		成果発表・周知の不足	内輪の人間関係による結成と展開	
プログラムによる対応	講座を開催する時間帯の偏り	情報提供機会の不足	活動者と非活動者のコミュニケーション促進 非活動者同士のコミュニケーション促進	講座・催しの多様化・充実
施設運営による対応	施設の開催時間の延長・拡張		交流・親睦機会の提供	
施設整備による対応		常設・定期的な発表を行うスペースの拡張整備・充実	交流・親睦のスペースの拡張整備・充実	活動内容に伴う設備・しつらえの対応 活動を行う施設の拡充

図 3-7 組織活動参加を促す施設整備要件

3) 施設整備・運営への不満と要望にみる施設整備の課題と可能性

活動団体にフリーアンサー形式で記入してもらった施設整備・運営への不満と要望を整理した。そのうち、回答が多く、大きな課題である以下の3点を挙げ、施設整備の可能性を探る。

「活動場所の確保」

組織活動を行う団体の増加に伴い、活動を行う施設・室の絶対数の不足が問題とされている。また、それ以上に予約の取りにくさが挙げられる。改善がみられる例もあるが、施設の空き情報は各施設を直接訪れなくては知ることができず、活動場所を確保するのに利用者は苦心している。活動場所の横断的・体系的な場所提供が求められる。

「施設の常連化の課題」

拠点施設をもって活動する団体が多数存在することが明らかになったが、それに伴う課題。“常連”の団体が場所を確保しており、施設側もそれらの団体の予約を優先するため、拠点施設をもたない団体は活動場所を確保しにくい（表3-35にて拠点のない団体が、「施設」を利用しない一因であろう）。

「発表の場の不足」

外部に向けた情報発信を行いたい・参加者を増やしたいという要求をもつ団体は多いが、常設の展示や多くの観客（1000名規模収容施設を求める声もある）を集めることのできる施設は少ない。

これらは各団体が活動を行う施設がそれぞれ個別に整備・運営されていることに起因するといえよう。各施設間の相互調整を行うことで、予約が取れない団体に代わりの活動場所となる施設を紹介したり、他団体の活動情報を周知する必要があるといえよう。また、既存の人間関係をもたない人たちの参加を促す可能性が高い発表を行う場、ひいては情報提供の場の不足は、組織活動の展開において深刻な課題である。従って、発表の場の補完を含め、組織活動を行う施設はもちろん、個人的な余暇活動で利用する施設との、相互調整による施設間連携を促進する必要がある。

3-6-4 組織活動への参加促進要件

組織活動の場としての居場所の利用実態と施設整備の課題をみてきたが、ここで、今一度、組織活動そのものへの参加を阻害する要因について整理しておく。非活動参加者の意識から、参加を阻害する要

因を明らかにし、組織活動への参加を促す要件を探る。

1) 組織活動と公共施設利用の関連

組織活動では活動場所として公共施設を多用することから、参加者は個人として余暇を過ごす場所にも公共施設を選択すると推測される。それを【組織活動への参加・不参加】と、【自由な時間を過ごす場所（最大4件選択）に公共施設を含んでいるか否か】の2軸4分類にて確認したのが図3-5である。同伴形態別・累計のいずれも、6割以上に組織活動と公共施設利用の関連がみられる（図の灰色着色部）。つまり、組織活動への参加を促すことが公共施設の利用促進につながるといえ、そのための施設整備を考える必要がある。

2) 組織活動への参加を阻害する要因

非活動参加者が活動に参加しない理由をみると（阻害要因：最大2種選択、表3-36）、『時間』の不足が7割近く挙げられており、最も大きな阻害となっている。また、自分の行いたい活動と、施設が提供する内容が異なっている『趣向』が3割近く、『情報』の不足と『人間関係』の課題が2割近くみられる。一方、『施設整備』は1割にも満たない。但し、『施設整備』が少ないのは現状の整備が十分な為ではなく、それ以前の阻害で停滞している人が殆どであり、施設整備状況を意識する段階にない為と考えるのが妥当であろう。

図3-6は、これらの阻害要因を、利用者である地域住民（需要側）と、提供する施設側（供給側）の責任の所在によって、整理・図化したものである。同時に、個人が各段階の阻害をクリアし、組織活動参加へ至る為に克服すべき順でもある。これより、未だ個人の責任である第1ハードルの段階で滞っている人が非常に多いことがわかる。

3) 組織活動を促す施設整備要件

個人及び団体における課題をふまえ施設側が組織活動を促すための整備要件を以下に示す（図3-7）

①施設の開館時間の延長

活動時間の不足に対しては、地域住民側の事情による影響が大きい。施設側としても施設の開館時間を延長し、参加への時間的な制約を緩和する必要がある。

②人々に情報を与え参加の契機を与える

活動情報や発表機会を提供し、非活動参加者に対して活動に触れるきっかけづくりを行う必要がある。

③非活動参加者の新たな人間関係の形成

活動に参加をする時間を確保しても、既存の団体が内輪的な人間関係に留まっており、非活動参加者は参加することが困難な状況にあるため、活動参加者と非活動参加者や、非活動参加者同士の交流・親睦を図る機会を提供し、コミュニケーションを促進する必要がある。そのためには、非活動参加者も多く利用している民間施設を含めた地域施設全般を活動の場として連続的に整備することも有効であると考えられる。

④利用者のニーズにあった企画を充実させる

活動時間や一緒に活動する人間関係を確保しても、本人が希望する活動内容と合っていなかったり、適した場所が不足している場合もあるため、講座や催しの多様化、施設整備の充実化を図る必要がある。

3-7 小括

地域住民の居場所といえる「自由な時間を過ごす場所」に着目し、属性やライフスタイルからみた選択特性や、施設種と施設像との対応関係、地域差、組織活動参加状況などの観点から分析し、地域住民の居場所の選択構造を概観した。以下に、その主な結果を示す。

- 1) 一人当たりの選択場所数は、加齢に伴い減少し、選択場所は自宅、民間施設は減少し、公共施設は増加する傾向にある。
- 2) 地域施設の選択要因では、施設サービスよりも場所における人間関係やアクセスが重視されている。
- 3) ライフスタイルとして、「地域・趣味重視型」「団体活動重視型」「家族・趣味重視型」「休養重視型」「友人重視型」の5類型が得られ、公共施設と民間施設の選択割合に各タイプの特徴がみられた。
- 4) 地域施設の選択は、地域活動の参加有無が関係し、参加層は公共施設を主に選択し、不参加層は民間施設を選択する傾向にある。
- 5) 地域施設の施設像に影響を及ぼす共通因子として、「気軽さ」「社会的」「安らぎ感」「解放感」「個人的」の5因子を見出した。これらは、利用者が居場所として地域施設に求める施設特性といえる。
- 6) 公共施設特有の施設像として、「社会的」な居場所の意識が高く、「安らぎ感」のある居場所としての意識が低い。
- 7) 施設整備状況や自然環境などの地域特性が、地域住民の居場所の選択特性に顕著に影響している。
- 8) 組織活動の場としての居場所では、多くの団体が活動拠点を有し、公民館等における講座や既存の人間関係が団体の結成や新規加入の契機となる場合が多い。
- 9) 非活動参加者の参加阻害要因では、需要側に起因する「時間」の不足が最も多く、次いで、「趣向」「情報」「人間関係」が影響し、供給側に起因する「施設整備」の影響は少ない。

居場所の整備にあたっては、地域住民の属性・ライフスタイルに配慮し、地域の施設整備状況をふまえ計画する必要がある。特に、地域住民は居場所の選択要因として人間関係を重視している。つまり、何ができるかではなく、誰と過ごせる環境かが重要であるといえる。また、既存の人間関係が希薄な人に対して組織活動への参加契機をいかに与えていくかが課題となっている。このことから、地域施設（特に公共施設）においては、従来のような集団的な活動を主とした機能偏重の施設計画ではなく、地域活動不参加層のニーズをふまえ、個人や家族、友人といった人々と気軽に過ごせる施設環境として整備する必

要があると考え。そのためには、ロビー等の共用空間や外部空間の充実など、空間的な許容性・選択性を高めるとともに、運営的には、利用料や時間制限の緩和、目的外利用への対応、施設の専門的業務を越えた施設職員との関わりなど、柔軟な運営行うことなどが考えられる。例えば、ひとりで過ごす場所として利用されている図書館では、退職後と思しき高齢者が単身、ブラウジングコーナーで新聞や雑誌を読んでいる姿をよく見かける。しかし、飲食・私語が禁止されている図書館の性格上、他者との人間関係を形成するには課題がある。室内に組み入れるのは困難であろうが、室外に付随する形で他者との交流・親睦のきっかけとなるスペースを提供することは可能だろう。また、活動情報の提供や人間関係形成のきっかけづくりを支援するイベントやプログラムなどを仕掛けることも考えられる。その結果として生まれる交流から、目的をもった活動への参加・意識転換が図られることも期待できるのではないだろうか。

地域住民の多くは、無料で自由に滞在できる商業施設を居場所に求める傾向にあるが、三重県のような地方都市においては、民間施設が全ての需要をカバーすることは困難であり、公共施設との連携を図る必要がある。

以降の4章及び5章では、交通手段や経済面などで制約があり、居場所整備の必要性が高いという点で共通するが、本章でみたように居場所の選択数や種類において対照的で、居場所に対する要求も異なるとみられる高齢者と中高生の居場所の事例を取り上げ、さらに詳しく空間特性や施設での過ごし方、運営形態などについて分析を行い、居場所となるための計画的要件を捉える。

参考文献

- 文3-1) 磯村英一：人間にとって都市とは何か、NHK ブックス、1968
- 文3-2) Ray Oldenburg：The Great Good Place、Marlowe & Company、1999
- 文3-3) 松橋圭子、大原一興ほか：地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究 - 東京都三鷹市における外出調査より -、日本建築学会計画系論文集 第600号、pp.25-31、2006.2
- 文3-4) 金丸まやほか：中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp.555-558、2000.9、E-1分冊、pp.1097-1098、2001.9
- 文3-5) 浅沼由紀、天野克也、谷口汎邦：都市居住高齢者の生活特性と余暇関連施設の利用特性について - 都市居住高齢者の地域施設利用構造に関連する研究 その2 -、日本建築学会計画系論文集 第492号、pp.119-125、1997.2
- 文3-6) 林田大作、舟橋國男ほか：職場周囲に構築されるサードプレイスに関する研究 - 神田地域・品川地域の比較分析 -、日本都市計画学会学術研究論文集 No.38-3、pp.433-438、2003.11
- 文3-7) 鈴木毅ほか：「好きな場所」に見る人と環境の関わり方の研究、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp.807-808、2000.9
- 文3-8) 李乙圭、高橋鷹志、鈴木毅：社会的交流からみた地域施設の利用しやすさに関する考察 - 東京都の社会教育施設のケーススタディー -、日本建築学会計画系論文集 第493号、pp.145-152、1997.3

本章の関連論文

〈査読論文〉

- 1) 木下誠一・矢部亮・今井正次：居場所としての地域公共施設のあり方に関する研究 - 三重県における居場所選択特性と地域差 -、日本建築学会計画系論文集、NO.628、pp.1205-1212、2008.6
- 2) 矢部亮・今井正次・木下誠一、西本雅人：余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備要件 - 生涯を通じての同伴形態の変化に着目して -、日本建築学会地域施設計画研究、第26回、pp.89-98、2008.7

第4章 高齢者施設における居場所の選択特性

第4章 高齢者施設における居場所の選択特性

4-1 本章の目的と方法

4-1-1 目的

前章より、高齢者は交通手段が限られ、他の属性より居場所の選択数が少なく、自宅を居場所として選択する割合も低いのが特徴的であった。また、時間的余裕はあるものの、学校や職場等の帰属組織を持たず、家族との関係も希薄になりがちな高齢層にとって、地域の限られた選択肢の中で、公民館等の身近な公共施設が、他者と過ごしたり、団体活動に参加したりできる貴重な居場所となっている。

しかし、今後、高齢者の多様なニーズをふまえた施設づくりが必要であるといえるが、要介護者を対象にした様々な施設は整備されてきているものの、多数を占める比較的元気な高齢者を対象にした施設は少なく、地域の中で高齢者が居場所として日常的に過ごせる受け皿は、必ずしも充分とはいえない。

そこで本章では、比較的元気な高齢者を対象にした代表的な高齢者専用施設である老人福祉センター^{注4-1)}を事例に取り上げ、実際に高齢者がどのように施設を居場所として選択し利用しているのか、施設における高齢者の過ごし方の実態や、他者との人間関係などに対する利用意識から居場所の選択特性を捉え、高齢者の居場所を計画する上で配慮すべき事柄を明らかにする。老人福祉センターは、高齢者が予約無しで利用できる施設であり、比較的職員の関与が少なく、高齢者が主体的に自由に場所を選択でき、多様な過ごし方がみられると予想されることから、調査対象として選定した。

4-1-2 方法

調査対象は、三重県津市内に、高齢者の利用圏を考慮して分散配置され、比較的同様の機能を有する老人福祉センター4施設(H, S, T, M)を取り上げ、利用者に対し日常生活や施設での過ごし方など、施設利用に関するヒアリング調査を行った(調査日2007年10月～11月)。調査方法は、平日、施設内で過ごしている利用者の中から性別、場所、時間帯などサンプリングの偏りに配慮しながら対象者を抽出し、統一的な質問項目に従って行った(計69名:男39名、女30名。表4-1)。

これらの調査データをもとに、施設における利用者の利用形態、利用意識を把握した上で利用パターンを類型化し、整理する。次に、高齢者が居場所として施設や諸室を選択する際の選択要因について捉

注4-1) 老人福祉センターの目的は、「無料又は低額な料金で、老人に関する各種の相談に応ずるとともに、老人に対して、健康の増進、教養の向上及びレクリエーションのための便宜を総合的に供与すること」(老人福祉法第20条の7)とされている。

え、施設が居場所となるための計画的要件について考察する。

なお、老人福祉センターに関する既往研究には、施設の利用形態や利用者の常連化現象などを捉えた鈴木らの研究^{文4-1)}、都市居住高齢者の余暇活動のニーズを捉えた浅沼らの研究^{文4-2)}、近年の老人福祉センターの現状をハードだけでなく、利用規程や活動内容などのソフト面を含め捉えた石飛らの研究^{文4-3)}がある。このほか、コミュニティセンター内の高齢者専用スペースの利用実態と活動展開を捉えた田中らの研究^{文4-4)}がある。これらは、いずれも主にアンケート調査等をもとに統計的に利用実態の全体像を把握しているのに対し、本研究では、利用者へのヒアリング調査を通して、より個々人の多様な利用意識を定性的、記述的に捉えることで、居場所に対し肌理細かな対応が可能な計画的指針が得られるものと考えている。

4-1-3 施設概要

調査対象である4施設は、高齢者の各種相談、健康増進、教養の向上、レクリエーションなどを行うための諸室により構成されている。M施設以外の3施設では、和室、教養娯楽室、機能回復訓練室、浴室、図

文4-1) 鈴木成文ほか：「地域老人福祉施設に関する基礎的研究（その1～4）」、日本建築学会大会梗概集、E分冊、pp. 843-850、1977. 10

文4-2) 浅沼由紀ほか：「都市居住高齢者のための地域施設計画に関する研究（その1～5）」、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp. 7-12 1997. 9、pp. 435-438 1998. 9

文4-3) 石飛知華ほか：「老人福祉センターの現状と整備の方向性 過去10年間に開設された老人福祉センターを対象として」、日本建築学会計画系論文集 第574号、pp. 25-32、2003. 12

文4-4) 田中裕基ほか：「自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究 - 多摩市コミュニティセンター内の高齢者スペースにおけるケーススタディ -」、日本建築学会計画系論文集 第562号、pp. 165-172、2002. 12

表4-1 各施設の利用状況（年間）とヒアリング対象者数

施設		性別		主要諸室		計	開館 日数	1日 平均 人数	ヒア リング 対象者数
		男	女	浴室	機能 回復 訓練室				
H施設	人数	20,996	13,129	21,960	18,144	34,125	308	111	18名
	(%)	62%	39%	64%	53%	100%			
S施設	人数	24,784	12,254	27,531	12,650	37,038	308	120	18名
	(%)	67%	33%	74%	34%	100%			
T施設	人数	16,052	17,035	15,982	10,130	33,087	294	113	19名
	(%)	49%	52%	48%	31%	100%			
M施設	人数	12,718	11,960	14,820	—	24,678	307	80	14名
	(%)	52%	49%	60%	—	100%			
計	人数	74,550	54,378	80,293	—	128,928	—	—	69名
	(%)	58%	42%	62%	—	100%			

注) 平成18年度実績。利用人数は個人利用のみとし、団体利用は除く。

M施設の機能回復訓練室は記録なし。

表4-2 各施設の諸室構成と併設施設

施設	和室	娯楽 教養 室	機能 回復 訓練室	浴室	図書 室	ロビー 玄関	その他 / 併設施設
H施設	○	○	○	○	○	○	相談室 / 市民センターを併設
S施設	○	○	○	○	○	○	生活相談室 / 市民センターを併設
T施設	○	○	○	○	○	○	生活相談室 / 併設なし（単独施設）
M施設	×	○	○	○	○	×	カラオケルーム / 児童館を併設

書室、玄関ロビーが揃っている点で共通するが、M施設は、他施設より規模が小さいため、このうち和室や玄関ロビーが整備されていない点で異なる（表4-2、図4-1）。

施設の運営は、いずれも指定管理者制度にもとづき、同一の社会福祉法人によって運営されており、職員が数名常駐する体制をとっている。職員による利用者への対応は、基本的に利用者の自主性を尊重しており、利用上困った時や利用者間のトラブルが発生した時などに関与する程度で、見守り・巡回、施設管理等の安全管理を主としている。（表4-3）

企画活動では、いずれの施設も頻度は異なるが館主催で年に数回、カラオケや踊り等のイベントを開催し、日頃の趣味活動の練習成果を発表できる機会を設けている。このほかS、T施設では健康相談を月に2回、T施設では機能回復訓練教室を週に2回程度定期的で開催している。また、S施設では、自由参加のカラオケの集いを週2回、和室で開催しており、福祉団体より寄贈された機器を使用し、市民ボランティアが世話人となって運営されている。

運営サービスでは、設置目的の主要サービス（入浴・機能回復・レクリエーション等）以外に、いずれの施設も飲食可となる場所（H、S、T施設は和室、M施設は教養娯楽室）を設け、給茶無料サービスも行っており、利用者がお菓子や弁当などを持参して、くつろいで滞在できるように配慮している。団体の活動拠点にもなっているT施設では、運営委員会を月1回開催して利用団体の代表者と意見交換を行い、団体活動の優先日を設定したり、活動に使用する団体所有の物品保管場所を提供するなど、意見を運営に反映するようにしている。

また、H施設では、併設するコミュニティ施設で開催される各種講座・教室に、センターの利用者も参加できるよう仲介し、活動展開を促す配慮をしている。

4-2 老人福祉センターの利用状況

4-2-1 施設データからみた利用状況

施設より入手したデータにおける各施設の利用状況は表4-1、4-2の通りである。4施設とも年間約300日開館し（H、S、M施設は月曜、T施設は日・祝休館）、年間利用者数は約3万人前後、1日平均約80～120名が利用している。性別では、概ね男性が約6割、女性が約4割であるが、T施設のみ女性の比率がやや高い。月別利用者数は、各施設ともお盆や正月の8月と12月にやや落ち込みがみられるものの、年間を通して利用者数の変動は少ない。（図4-2）。

表4-3 各施設の運営概要

施設	H 施設	S 施設	T 施設	M 施設
開設年	1988	1991	1981	1971
休館日	月・年末年始	月・年末年始	日・祝・年末年始	月・年末年始
開館時間	AM9:00-PM5:00	AM9:00-PM5:00	AM9:00-PM4:00	AM9:00-PM5:00
運営主体	社会福祉法人（市指定管理者）			
利用対象者	市内在住の概ね 60 歳以上の人			
利用料金	無 料			
利用手続（個人）	予約不要 ・来訪時に受付にて個人使用簿に必要事項（氏名・年齢・性別・住所・使用室等）を記入			
利用手続（団体）	和室・教養娯楽室は事前予約受付可			-
職員体制	数名でローテーション（職員 5 名）	数名でローテーション（職員 5 名）	数名常駐	3 階受付に 1 名常駐（1 階事務室に数名常駐）
企画活動	・イベントを年 4 回開催（カラオケや踊りなど）	・イベントを年 8 回開催（芸能・玉突き・囲碁など） ・カラオケ発表会を週 2 回開催（和室にて。福祉団体より寄贈された機器を使用。市民ボランティアが世話人となって運営） ・健康相談を月 2 回開催	・イベントを年 3 回開催（カラオケ、踊り、大正琴など） ・健康相談を月 2 回開催 ・機能回復訓練を週 2 回開催	・イベントを年 1 回開催（カラオケ発表会。併設する児童館の集会室を使用）
運営サービス	・和室のみ飲食可 ・給茶無料サービス ・併設するコミュニティ施設で開催される各種講座・教室への参加を仲介	・和室のみ飲食可 ・給茶無料サービス	・和室のみ飲食可 ・給茶無料サービス ・運営委員会を開催（月 1 回。利用団体の代表者と意見交換し、運営に反映） ・団体活動の優先日を設定 ・活動に使用する団体所有の物品保管場所を提供	・教養娯楽室のみ飲食可 ・給茶無料サービス

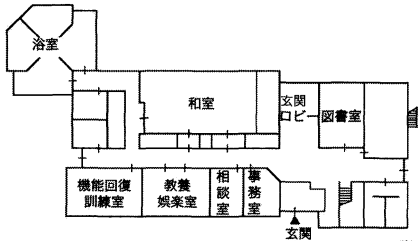
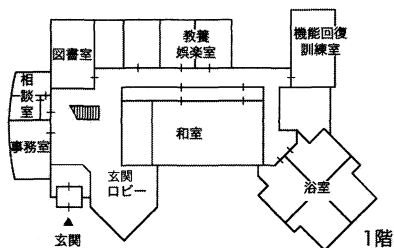
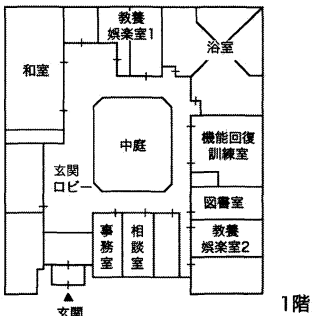
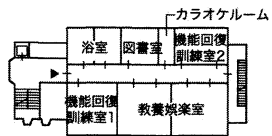
施設名	H 施設	S 施設
平面図	 S=1/1000 1階	 S=1/1000 1階
規模 / 階数	985 m ² （老人福祉センター部分）/ 2 階建	950 m ² （老人福祉センター部分）/ 2 階建
併設施設	市民センター（2 階）	市民センター（2 階）
立地	郊外	郊外
施設名	T 施設	M 施設
平面図	 S=1/1000 1階	 S=1/1000 3階
規模 / 階数	1,105 m ² （老人福祉センター部分）/ 1 階建	365 m ² （老人福祉センター部分）/ 4 階建
併設施設	併設なし	児童館（4 階）
立地	郊外	中心市街地

図4-1 施設概要

老人福祉センターの主要サービスである入浴についてみると、約6割の人が浴室を利用しており、入浴中心の利用であることがわかる。

4-2-2 ヒアリングデータからみた利用状況

ヒアリング対象者（計69名）の利用状況は表4-4の通りである。

- ・性別：男性は約6割、女性は約4割であり、前述の施設データと概ね同割合である。
- ・年代：70代が約6割と多く、ついで80代、60代、90代の順である。
- ・家族構成：男性は夫婦世帯が約7割、女性はひとり世帯が5割と多く、男女差がみられる。同居は共に2、3割程度である。
- ・交通手段：男性は自家用車や自転車が多く、女性は徒歩の割合が男性より高いのが特徴的である。
- ・利用頻度：ほぼ毎日（週4日以上）の利用が7割以上を占め、常連化の実態が窺える。
- ・滞在時間：男性は3～4時間の半日利用が約4割と多いが、女性は6時間以上の長時間滞在者も約3割みられる。全体としては、一日、半日（2～5時間未満）、一時（2時間未満）の利用に大別できる。
- ・利用内容：男女ともに入浴、健康機器が約6割と多く、前述の施設データと概ね同割合である。その他、男性は、囲碁・将棋、玉突きが多く、女性はカラオケが約6割と多い。また、食事も約4割ある。女性は長時間の滞在が多いためとみられるが、どの施設も食堂がないため、自宅から弁当を持参したり、コンビニ等で購入して施設内で昼食をとる。また、T施設では昼食時に施設近くの喫茶店に仲間と一緒に利用する人もいる。利用者のほとんどが概ね健康であり、各自が、思い思いに多種の施設サービスを自主的に利用して過ごしている。

4-3 利用契機と利用理由

4-3-1 利用契機（表4-5）

利用のきっかけは、4施設全体で、家族や友人の紹介が約6割を占め最も多い。市民センターを併設するH施設などでは、カラオケや料理教室など講座への参加がきっかけとなっており、複合施設の相乗効果がみられる。このほか一人暮らしになったり、自宅の風呂が故障するといった家庭的事情や、病気のリハビリのために利用するなど身体的事情による場合などもみられる。その他、施設の開設を機に利用するようになったり、何かのついでに利用したのがきっかけとなる場合がみられる。このように、主に口コミで利用するようになり、次第に習慣化、常連化していくとみられる。

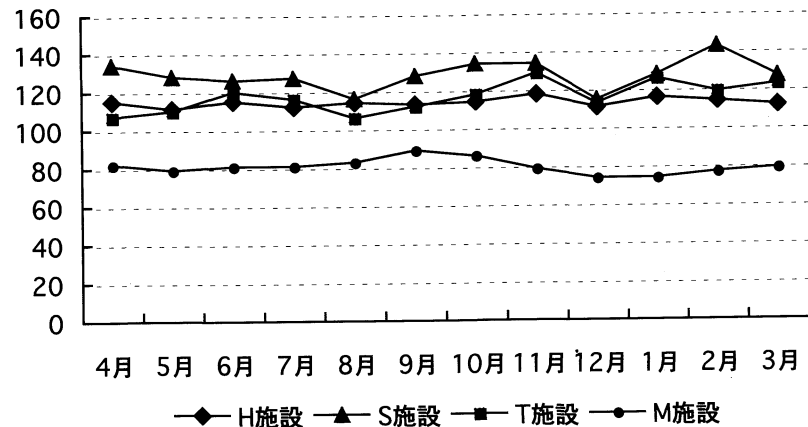


図4-2 各施設の月別利用者数の推移

表4-4 ヒアリング回答者の利用状況 (4施設合計)

項 目	性別	男	女	総計
	人数 (人)	39	30	69
	割合 (%)	57%	44%	100%
年 代	60才代	13%	10%	12%
	70才代	56%	67%	61%
	80才代	26%	20%	23%
	90才代	5%	3%	4%
家族構成	ひとり	8%	53%	28%
	夫婦	69%	13%	45%
	同居	23%	33%	28%
交通手段	徒歩	8%	37%	20%
	自転車	33%	23%	29%
	バイク	3%	0%	1%
	バス	0%	10%	4%
	自家用車	56%	30%	45%
利用頻度	ほぼ毎日 (週に4日以上)	79%	60%	71%
	週に3日	3%	3%	3%
	週に2日	16%	24%	19%
	月に6回程度	0%	3%	1%
	週に1日	0%	7%	3%
	ふと思い立った時	0%	3%	1%
	年に2~3日	3%	0%	1%
滞在時間	1時間未満	5%	0%	3%
	1時間~2時間未満	28%	27%	28%
	2時間~3時間未満	8%	20%	13%
	3時間~4時間未満	36%	3%	22%
	4時間~5時間未満	5%	10%	7%
	5時間~6時間未満	5%	7%	6%
	6時間~7時間未満	10%	20%	15%
	7時間以上	3%	13%	7%
利用内容	入浴	59%	73%	65%
	健康機器・健康体操	64%	73%	68%
	カラオケ	31%	63%	45%
	囲碁・将棋	26%	0%	15%
	玉突き (パンパー)	23%	7%	16%
	卓球	3%	7%	4%
	TV	10%	7%	9%
	読書 (新聞・雑誌・書籍)	28%	17%	23%
	食事	15%	37%	25%
	仮眠・休憩	5%	7%	6%

注) 網掛け部は50%以上。

表 4-5 利用のきっかけ (4 施設合計)

項目	回答者数	回答割合	年齢別人数	性別人数	施設別人数	回答事例
家族の紹介	5	7%	60代:0 70代:5 80代:0 90代:0	男:4 女:1	H:1 S:3 T:1 M:0	<ul style="list-style-type: none"> ・65歳で定年になり、娘にこういうセンターがあると聞いて、くるようになった。(S/77才/男) ・1日息子宅に世話になったとき、遊べるところを探したところ、息子がインターネットで見つけた。最初はみんな知らない人ばかりで、来るのに勇気がいったが、来てみたらみんな親切だったので、はまってしまった。(T/70才/女)
友人の紹介	40	58%	60代:4 70代:26 80代:9 90代:1	男:23 女:17	H:11 S:8 T:13 M:8	<ul style="list-style-type: none"> ・友人から、風呂があり、歌も歌えると聞き、カラオケをしにぼちぼち来始めるようになった。二人で来るようになって5、6年になる。(T/84才/男) ・最初はヘルストロンがあることを友人から聞いたのがきっかけ。事務員の方からお風呂も勧められて利用するようになった。(M/89才/女)
併設施設	6	9%	60代:1 70代:2 80代:2 90代:1	男:1 女:5	H:3 S:3 T:0 M:0	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティセンターの2階で行われるカラオケ教室に参加したのがきっかけ。(H/81才/男) ・3年前は月2回の料理教室にきていたが、2年目に風呂に入ること勧められ、今も入るようになった。(H/75才/女)
家庭的事情	9	13%	60代:3 70代:4 80代:2 90代:0	男:4 女:5	H:3 S:1 T:3 M:2	<ul style="list-style-type: none"> ・主人が亡くなって一人になってから。(T/72才/女) ・自宅の風呂が故障した際に、友人から勧められたのがきっかけ。(H/80才/男) ・息子が転勤し、一人暮らしになってから。(H/79才/女)
身体的事情	5	7%	60代:0 70代:4 80代:1 90代:0	男:4 女:1	H:0 S:0 T:1 M:4	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年、脳梗塞を患ったので、ヘルストロンがここにあると聞き、リハビリがてらに来るようになった。(M/72才/女) ・病院から退院してから、体に良いと聞いてここにきている。(T/85才/男)
その他	4	6%	60代:0 70代:2 80代:1 90代:1	男:3 女:1	H:1 S:2 T:1 M:0	<ul style="list-style-type: none"> ・この施設のある場所の前を車で良く通っていたので、施設が出来たのを機に行ってみようと思った。(S/90才/男) ・昨年、夏の暑い日に市内で奥さんと待ち合わせする必要があった時に、ここにきたのがきっかけ。以来、読書等をしにきている。(M/75才/男)

表 4-6 利用理由 (4 施設合計)

項目	回答者数	回答割合	年齢別人数	性別人数	施設別人数	回答事例
立地	14	20%	60代:0 70代:12 80代:1 90代:1	男:7 女:7	H:4 S:4 T:3 M:3	<ul style="list-style-type: none"> ・足が悪いので、家に近いのがいい。(H/75才/女) ・この施設の立地場所は、2つの地区の間になるため、一方の地区に独占されることが無いのでよい。(H/76才/男) ・市役所、図書館、百貨店、友人宅などのついでに立ち寄れる。(M/76才/女)
風呂	26	38%	60代:7 70代:13 80代:6 90代:0	男:17 女:9	H:4 S:12 T:5 M:5	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅に風呂がない。(T/77才/男) ・風呂が広いから。家の風呂は小さいし、一人は寂しい。それに、年寄りのあとに若い者は入りたがらない。(T/76才/女) ・風呂があるから。ウォーキングのついでに立ち寄れる。(S/68才/女) ・家にお風呂があるけど、一人で炊くのはもったいないので、ここに来る。ここに来ないときは銭湯を利用する。(M/89才/女) ・夜は家で入るが、ここは朝風呂が入れるのがいい。(S/77才/男) ・お風呂に昼間に入れるから。銭湯は夜なので、一人だと怖い。家では、シャワーを浴びるくらい。(M/68才/女)
施設・設備	12	17%	60代:2 70代:8 80代:2 90代:0	男:5 女:7	H:2 S:5 T:3 M:2	<ul style="list-style-type: none"> ・夏、冬と冷暖房が効いている。(S/70才/男) ・涼しいから。自宅は国道沿いにあり、夏場は熱くて家に居づらいので、ここに来て1日を過ごす。(M/79才/女) ・駐車場が広い。(T/70才/女) ・清潔だから。(S/76才/女) ・静かで環境が良く、整理整頓が行き届いている。(T/84才/男)
料金	22	32%	60代:2 70代:16 80代:4 90代:0	男:12 女:10	H:10 S:5 T:5 M:2	<ul style="list-style-type: none"> ・無料だから。年金暮らしなので、高いと足が遠のく。(H/84才/女) ・無料だから。風呂代の節約にもなる。(S/70才/男)
過ごし易さ	15	22%	60代:1 70代:10 80代:3 90代:1	男:9 女:6	H:5 S:4 T:2 M:4	<ul style="list-style-type: none"> ・ここだと公共の施設なので遠慮無く過ごせる。友人宅で毎日過ごすそうすると家の若い者に嫌われてしまう。(H/87才/男) ・ここは、それぞれが無関心で放っておいてくれ、根掘り葉掘り聞かないので居やすい。(H/76才/男) ・ここは自由に居させてくれる。文句言われない。(S/90才/女) ・事務の人が親切に対応してくれるので、来やすい。(S/85才/女) ・お茶も自由に飲め、のんびりできる。(M/75才/男) ・自分の行動が制約されないし、受付の手続きが楽。(M/78才/男)
交流	54	78%	60代:4 70代:32 80代:15 90代:3	男:28 女:26	H:18 S:14 T:17 M:5	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとり暮らしだと、家に居るとも何も言わないので、ここにくれば人に会えるし、いろんな話が出来るし、会話が聞こえてくる。お風呂で裸のつきあいができる。(S/74才/女) ・お互いにお裾分けしたり、もらったりして知り合いができ、親しい間柄になれる。いろんな人が集まるので生活の知恵など知らないことを教えてもらえ社会勉強にもなる。(H/76才/男) ・うちにいると毎日が日曜みたいで暇をもてあますので、ここにくれば、たとえ3時間でもいろんな人と交流できる。(T/76才/男) ・仕事を辞めてから人に会わなくなり、一人になった。ここに来れば、「おはよう」と挨拶もするし、友達もできる。(H/76才/男) ・お風呂が4～5人入れる程度と狭いので、自然と会話が生まれ、適当に話ができるので気がほぐれる。(M/78才/男) ・同じ年代で、近所の人が多いので、コミュニケーションがとりやすい。(M/68才/女)
健康	31	45%	60代:1 70代:20 80代:9 90代:1	男:15 女:16	H:11 S:7 T:8 M:5	<ul style="list-style-type: none"> ・家にいるとしゃべらなくなるので、健康のためにも人としゃべるのが良いと思う。呆け防止になる。(H/81才/男) ・施設に来るのが運動になる。(H/74才/女) ・月に2回、健康相談があり、とても気さくで何でも健康相談やおしゃべりに乗ってくれ、ちゃんと聴診器をあててくれる先生が来てくれるので安心。(H/75才/女) ・自宅にもマッサージ機やエアロバイクがあるが、いつもあると思うと使わない。ここだと、順番に時間を区切って使えるので、やりすぎることなく健康にも良い。(H/76才/男) ・ヘルストロンを使いたいから。動脈瘤を患ってから、ここにきて血行が良くなったので、これだけには乗りたいと思って来ている。(M/89才/女)
外出機会	15	22%	60代:0 70代:9 80代:5 90代:1	男:8 女:7	H:9 S:3 T:3 M:0	<ul style="list-style-type: none"> ・家にいると息が詰まるので、ここは気晴らしになる。(H/72才/女) ・毎日、弁当をつくってからここに来るのが楽しみ。(H/73才/女) ・家で夫婦2人が顔を突き合わせているよりも、ここの方が楽しい。(H/76才/男) ・年寄りはどこも行くところが無いので、ここは助かる。(S/76才/女) ・一日、時間をつぶすのにちょうど良い。(T/74才/男)
余暇活動	12	17%	60代:1 70代:7 80代:3 90代:1	男:8 女:4	H:2 S:2 T:8 M:0	<ul style="list-style-type: none"> ・カラオケでも上手や下手関係なく自由に歌うことが出来るのが良い。発表会に向けて練習するのが楽しみ。(H/81才/女) ・囲碁ができるから。同じレベルの人がたくさんいるから楽しめる。(T/79才/男)

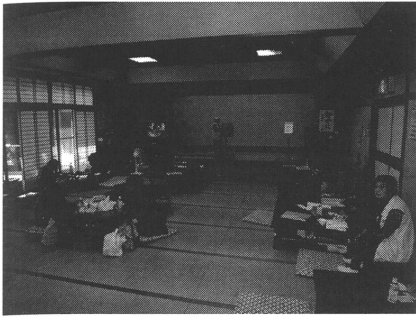


写真 4-1 和室でカラオケ (S 施設)



写真 4-2 教養娯楽室で将棋 (S 施設)

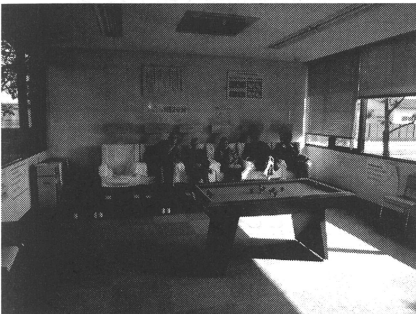
写真 4-3 機能回復訓練室で
ヘルストロン (S 施設)

写真 4-4 廊下で会話 (S 施設)

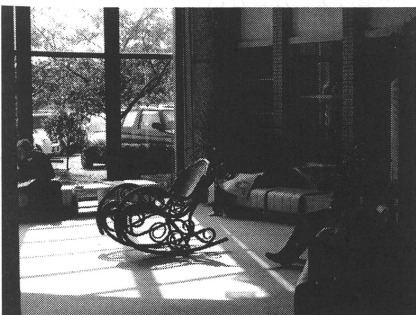


写真 4-5 玄関ロビーで新聞 (S 施設)

4-3-2 利用理由 (表 4-6)

利用理由では、立地、風呂、施設・設備、料金、過ごし易さ、交流、健康、外出機会、余暇活動の9項目に整理した。「交流」が約8割と最も多く、多くの利用者がたとえ数時間でも他者と交流できることを重視している。次いで「健康」が約5割と多く、自身の健康への不安から、健康機器や健康相談、他者との会話、施設への散歩などを通じて健康づくりを行っている。「風呂」は約4割あり、自宅に風呂がない、施設では昼間に入れる、風呂が広いなど、自宅では得られない質を求めて利用しており、高齢者に対する入浴支援は重要なサービスと受けとめられている。特に男性の割合が高い。

「料金」は約3割あり、無料で一日過ごせ、風呂等も利用できることは、年金等に頼る生活費の限られた高齢者には重要であり、無料で風呂等が利用できることは自宅の光熱費削減にもなっている。

このほか「立地」では、近さ、ついで利用のし易さ、「施設・設備」では、冷暖房完備や駐車場、「過ごし易さ」では、自由に滞在できる運営サービス(利用ルール、職員の対応、お茶サービスなど)があげられ、利用者にとって、施設が、毎日、気軽に自宅以外で過ごせる場所であることが利用上重要となっている。

4-4 利用者類型と過ごし方

各施設では特に利用上の制限はなく、また職員による誘導、働きかけも行われていないため、利用者は基本的に自由に居られることができ、各自が主体的に施設内の様々な場所や活動などを選択し利用している(写真4-1～4-5)。ここでは利用頻度、滞在時間をもとに利用者の類型化を行い、過ごし方の傾向を整理する。利用頻度は、休館日を除く週6日の開館日の内、過半の週4日以上ほぼ毎日来ている常連層と、週3日以下の利用頻度の少ない層(頻度少)に分け、滞在時間は、一日、半日、一時(2時間未満)に分け、その組み合わせからⅠ～Ⅵの6タイプに分類した。人数構成は、Ⅱタイプが約3割(21/69)と最も多く、次いでⅠ、Ⅲが約2割、その他が約1割である(表4-7)。タイプ別の過ごし方の特徴は以下の通りである。

・Ⅰ(常連・一日):

入浴、健康機器等の利用を日課とし、他の利用者とカラオケや玉突き等の余暇活動を行って一日を過ごす。昼時には施設内外で食事を取る。女性が約7割。

・Ⅱ(常連・半日):

表4-7 タイプ別の過ごし方の事例

類型	人数	割合	年齢別 人数	性別 人数	施設別 人数	施設	年齢	性別	家族	過ごし方（利用者のコメントより抜粋）
Ⅰ （常連・一日）	12名	17%	60代：0 70代：7 80代：4 90代：1	男：4 女：8	H：4 S：4 T：4 M：0	H	81	男	同居	・朝食後、スーパーに立ち寄り、昼食用の弁当を購入してから、施設に来る。施設では、入浴、ヘルストロン、あんま機など一通りこなすのが日課。その後、カラオケをする。 ・家にいるとしゃべらなくなるので健康にも良いと思う。
						S	76	女	ひとり	・毎朝、1時間かけて弁当をつくってから施設に来る。施設では、カラオケ→ヘルストロン→風呂→カラオケ、会話などをして過ごすのが日課。年寄りはどこも行くところが無いので、ここは助かる。
Ⅱ （常連・半日）	21名	30%	60代：2 70代：15 80代：4 90代：0	男：15 女：6	H：6 S：4 T：7 M：4	T	76	男	夫婦	・午前中は散歩や食事などをして過ごし、昼食後、施設に来る。施設では囲碁をして過ごす。うちにいると暇をもて余すので、ここにくれば、たとえ3時間でもいろんな人と交流できる。 ・4時頃帰宅し、畑や花の手入れ、家の草刈り、TVなどをみる。
						H	75	女	同居	・朝6時から9時までお経をあげ、朝食、掃除を済ませ、昼食後、施設に来る。施設では、入浴、ヘルストロン、あんま機、エアロバイクなどを利用する。風呂上がりに、浴室前の日当たりの良い縁台に座って、友人と話をするのが好き。 ・4時頃施設を出て近くの友人宅に立ち寄って会話し、買い物をしてから帰宅。行き帰りの道を変えて散歩を楽しむ。
Ⅲ （常連・一時）	16名	23%	60代：1 70代：10 80代：3 90代：2	男：12 女：4	H：5 S：3 T：1 M：7	H	75	女	夫婦	・ここに来るのは夫婦の昼食後の日課。今は、夫に倒れられると自分も困るので、夫の世話をすることに専念している。施設では、入浴、ヘルストロン、健康関係の調べものや新聞を読んだりして過ごす。 ・年寄り2人暮らしでは日常生活がマンネリ化するので、ここはストレス解消になり、色んな人と情報交換ができる。
						M	78	男	夫婦	・散歩を兼ねて施設に来る。 ・施設では、入浴し、ヘルストロンに20分座り、新聞を読んだりするのが日課。自宅の風呂やシャワーだとくつろがない。銭湯だと3時からしか入れないので、ここを使っている。
Ⅳ （頻度少・一日）	7名	10%	60代：1 70代：4 80代：2 90代：0	男：3 女：4	H：0 S：0 T：6 M：1	T	72	女	夫婦	・午前中は健康体操、午後はカラオケの集まりがあり参加している。昼食は弁当を持参し、仲間と一緒に和室で食べる。 ・家で夫というとうとうしいのでここに来る。お互い干渉しない方がよい。夫は家で留守番やパチンコをして過ごす。
						M	75	男	夫婦	・妻におにぎりを作ってもらってここに来る。施設では、ヘルストロンやあんま機等の健康器具を利用したり、図書室で読書、和室で昼寝などをして一日を過ごす。あまり人と雑談せず、一人で過ごすことが多い。
Ⅴ （頻度少・半日）	8名	12%	60代：1 70代：5 80代：2 90代：0	男：4 女：4	H：3 S：4 T：1 M：0	H	87	男	夫婦	・昼食後、施設に来て、3時半頃帰って家でテレビをみる。施設では、入浴、ヘルストロン、新聞を読んだりして過ごす。カラオケは半年前ぐらいから喉の調子が悪くなったのでやめた。ここは公共施設なので遠慮無く過ごせる。
						T	79	女	同居	・週に1回、10時から昼まで自主的な健康体操の集まりがあるので参加している。施設には、9時頃来て、始まるまでヘルストロンに座って友人と雑談などをして過ごす。 ・この施設の近くに畑があり、若い頃から仕事でいつも坂を上っていたので、施設への坂道は苦にならない。
Ⅵ （頻度少・一時）	5名	7%	60代：3 70代：1 80代：1 90代：0	男：1 女：4	H：0 S：3 T：0 M：2	S	69	男	同居	・週に1回は午前中に市内の体育館でバドミントンを練習後、この施設に必ず立ち寄りお風呂に入る。午前中はお風呂が混んでいるので、少し時間帯をずらして来ている。 ・引越してきて近所に知り合いは少ないし、施設で将棋もやりたいと思っているが仲間がいないので、今は遠慮している。
						M	68	女	ひとり	・この施設の他に、他の2施設にそれぞれ週に1回は行く。その日の気分で3ヶ所を使い分けている。 ・施設では入浴後、新聞や雑誌をみて過ごす。ここはお風呂に昼間に入れるからいい。銭湯は夜なので一人だと怖い。

入浴、健康機器等に次いで囲碁・将棋の割合が高い。午前中は、散歩や家事、農作業、趣味などの時間に費やし、午後から施設に来て半日を過ごす。男性が約7割。

・Ⅲ（常連・一時）：

健康機器の利用が約8割と高い。毎日20分ほど利用すると効果的といわれるヘルストロンなどを中心に、入浴や読書などを行ってひと時を過ごす。男性が約7割。

・Ⅳ（頻度少・一日）：

定期的集うカラオケ等のサークル活動を主とし、入浴や食事も行っ一日を過ごす。T施設で多い。

・Ⅴ（頻度少・半日）：

健康機器等の利用や入浴、カラオケなどを行って半日を過ごす。S施設で多い。

・Ⅵ（頻度少・一時）：何かのついでに利用したり、複数の施設を気分を使い分けたりする。S施設で多い。女性が約8割。

4-5 施設選択特性

4-5-1 複数館利用

調査対象者のうち24名（35%）が、4施設の中から複数館利用している（表4-8）。2館の利用が16名と多く、3館は6名、4館は2名である。特に当館以外に、比較的新しく施設水準の高いS施設を利用する場合が多い。

他施設の利用形態を「イベント」「ついで」「休館日」「活動目的」「気分転換」に分類すると、「休館日」が11名で最も多く、次いで「イベント」、「ついで」となっている（表4-9）。「イベント」では、カラオケの発表会や囲碁の交流会などのイベント時に利用する（練習と発表の場の使い分け）。「ついで」では、買い物や知人宅などに出かけたついでに利用する。「休館日」では、普段利用する施設の休館日や、風呂がメンテナンス等で利用できない時に利用する。特に休館日が他施設と異なるT施設で多くみられ、多少遠くても入浴などを行うために利用している。「活動目的」では、カラオケや囲碁・将棋等の目的をもった活動を行うために利用し、「気分転換」では、たまに普段とは変わった施設の雰囲気や人々との交流を楽しむために利用する。このように、高齢者といえども複数の施設を使い分けている実態がみられた。

一方、利用者（M施設/70才/男）のように、他にどのような施設があるか知らない人もいるため、施設側による利用者への周知が課題となっている。

表 4-8 複数の施設選択

施設	対象者数	複数利用	H施設	S施設	T施設	M施設
H施設	18	7	-	7	2	1
	100%	39%	-	39%	11%	6%
S施設	18	6	3	-	3	3
	100%	33%	17%	-	17%	17%
T施設	19	6	1	4	-	2
	100%	32%	5%	21%	-	11%
M施設	14	5	2	3	3	-
	100%	36%	14%	21%	21%	-
計	69	24	6	14	8	6
	100%	35%	9%	20%	12%	9%

注) 複数回答

表 4-9 他施設の利用形態

他施設	イベント	ついで	休館日	活動目的	気分転換	計
H施設	3	1	3	0	1	8
S施設	0	1	3	2	1	7
T施設	2	0	4	0	0	6
M施設	1	2	1	1	1	6
計	6	4	11	3	3	27

注) 複数回答

表 4-10 遠方の施設選択要因

利用施設	年齢	性別	最寄施設	交通手段	選択要因	
H施設	80	男	S	車	・ここでの人間関係が良い。 (S施設にも友人が多いので両施設を利用する)	人間関係
	90	男	M	車	・風呂が広くて新しい。 ・施設ができる前から仕事でこの付近をよく通っていた。	施設水準 習慣
	76	女	T	バス	・友人から無料の風呂があると聞いて利用する。	習慣
	77	男	M	自転車	・将棋仲間やバンパー(玉突き)仲間がいる。	人間関係
	69	男	M	自転車	・M施設は風呂が狭いと聞いているので行かない。	施設水準
	68	女	M	車	・カラオケの集まりがある。	人間関係
	77	女	M	バス	・カラオケの集まりがある(サークル代表を務める)	人間関係
	74	男	M	車	・カラオケ教室と違って自由にのびのび歌えるのが良い。	運営
	74	男	M	自転車	・将棋仲間がいる。(M施設は風呂が小さく、他者との人間関係も良くないので行かなくなった)	人間関係
	79	男	M	車	・風呂が広い。 (HやT施設には、ここが休みの時などに行く)	施設水準
T施設	76	男	H	車	・ここが評判良いから。	施設水準
	70	女	市外	車	・この施設のカラオケサークルに入っている。 (最寄施設でも民謡教室や体操教室に通っている)	人間関係
M施設	80	男	S	自転車	・この施設で知り合った多くの仲間がいる。	人間関係
	72	男	T	自転車	・以前は自宅に近いT施設を利用していたが、妻の知人が多くプライバシーが保てないので利用をやめた。	人間関係
	75	男	S	車	・S施設の方が近いが、ここは旧宅や買い物に行くついでに利用できる。	立地環境

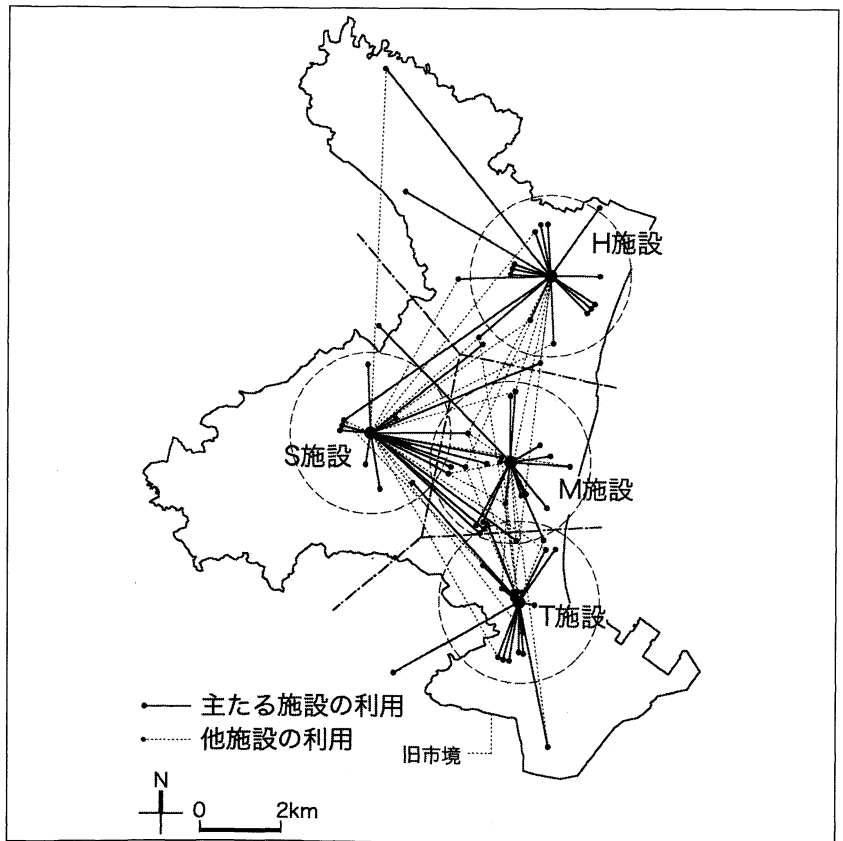


図 4-3 施設利用圏

注4-2) 隣り合う施設の間に垂直二等分線を引いて、ボロノイ (Voronoi) 多角形に分割された領域。

4-5-2 遠方館利用

ヒアリング対象者の居住地と施設との立地関係についてみる。利用圏域は、4施設とも概ね半径2kmの範囲とみられるが(図4-3)、必ずしも居住地の最寄施設を利用するとは限らず、遠方の施設を主たる利用施設とする者は15名(22%)おり、特にS施設に多い(ボロノイ領域^{注4-2)}外からの利用)。

その要因として、「人間関係」「施設水準」「立地環境」「習慣」「運営」があげられる(表4-10)。S施設とM施設の関係では、S施設の方が新しく、浴室も広いなど施設水準が高いことや、カラオケや将棋などの集まりがあるため、S施設が選択されている。また、友人が多いなど良好な人間関係が成立している場合や、逆に、自分や家族のプライバシーが公になるのを嫌って、敢えて遠くの施設を利用する場合もみられる。

しかしながら、利用者(M施設/78才/男)のように、以前は遠方の施設を利用していたが、自転車で行くのが困難となり、施設の職員に勧められ最寄りの施設を利用するようになった人もいるため、施設への交通アクセスの確保が課題といえる。

4-5-3 老人福祉センター以外の利用

利用者は、老人福祉センター以外でも日常的に、散歩や公園、買い物、墓参り、山登り、畑仕事、親戚・友人宅、喫茶店、病院、デイサービスなど、地域の様々な場所を利用している。公共施設では図書館の利用が14名(20%)と多い。図書館は無料で過ごせることや、老人福祉センター内の図書室は図書の貸出ができないこと、蔵書数が少なく読みたい本がないなどから、より高水準のサービスを求めて、老人福祉センターの行き帰りに立ち寄って利用しているものと思われる。

他には、月に数回、文化施設でカラオケや講演会などのイベントに参加したり、公民館やスポーツ施設等において趣味教室・講座などに通う利用者也みられる。また、無料で自由に居られる場所として、証券会社の玄関ロビーで株式の掲示板をみながら過ごしたり、情報センターのITコーナーでパソコンを行うなどして過ごす人もいる。

このように、利用者は老人福祉センターだけでなく、他の施設を利用しながら生活にメリハリを持たせている。ある利用者(H施設/78才/男)が「この施設を利用していた友人のうち2人は、ここでの人間関係がうるさいので、最寄りのショッピングセンターで朝から晩まで過ごすようになった」と語るように、老人福祉センターのみの人間関係では閉鎖的になることが懸念されるため、他にも高齢者の受け皿を地域として用意し、選択できる環境を整える必要がある。

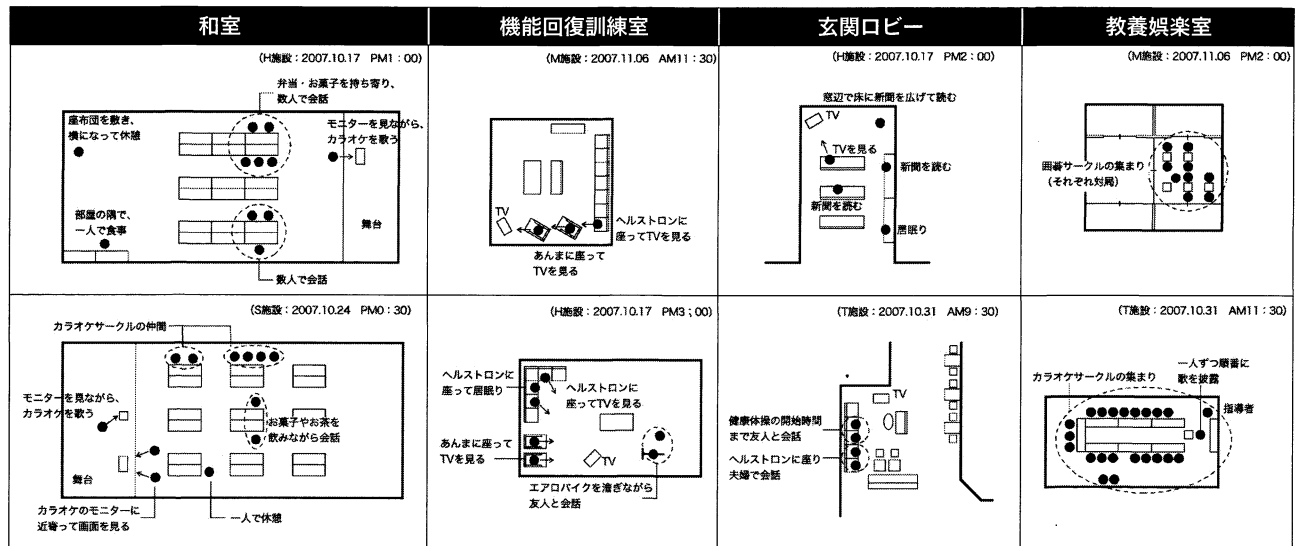


図 4-4 各諸室における利用例

表 4-11 タイプ別の交流意識

類型	人数	年齢別人数	性別人数	施設別人数	交流意識 (利用者のコメントより抜粋)
組織的交流	15名	60代: 2 70代: 9 80代: 4 90代: 0	男: 7 女: 8	H: 0 S: 2 T: 13 M: 0	<ul style="list-style-type: none"> 週に2日、カラオケの集まりに参加している。わきあいあいとした雰囲気が入っている。(S/77才/女) 囲碁サークルには同じレベルの人がたくさんいるから楽しめる。(T/77才/男) 午前中は健康体操、午後はカラオケの集まりに参加して過ごす。人間関係も良く、同じ年代が多くて話が合う。(T/72才/女) 囲碁サークルに属する。うちにいると暇をもてあますので、ここにくれば、たとえ3時間でもいんな人と交流できる。(T/76才/男) 週に1回、午前中に自主的な健康体操の集まりがあるので参加している。ここでは若い人がいて、話ができて、仲間もできる。(T/79才/女)
友人的交流	21名	60代: 0 70代: 13 80代: 8 90代: 0	男: 13 女: 8	H: 12 S: 5 T: 4 M: 0	<ul style="list-style-type: none"> お互いにお裾分けしたり、もらったりして知り合いができ、親しい間柄になれる。いろんな人が集まるので生活の知恵など知らないことを教えてもらえ社会勉強にもなる。(H/76才/男) 年寄りばかりで気を遣わなく遊んでいられ、交友関係も広がる。(H/87才/男) 毎朝、弁当をつくってからここに来る。友人とカラオケや会話などをして過ごすのが日課。(S/76才/女) ここには将棋仲間5人程度の他に、バンパー仲間もいる。午後に将棋仲間が来るので、それまで入浴や食事をするなどして過ごしている。(S/77才/男) お風呂に入りに来るにつれ友人もでき、一緒に卓球を始めるようになった。(T/76才/女)
知人的交流	18名	60代: 2 70代: 10 80代: 3 90代: 3	男: 8 女: 10	H: 6 S: 7 T: 0 M: 5	<ul style="list-style-type: none"> 人に声を掛けてもらったときが嬉しい。ここは、根掘り葉掘り聞かないので居やすい。(H/76才/男) 世間話や1日の出来事などについて情報交換ができ、口の運動にもなる。過去の経歴や肩書き、人間関係とくに縛られずに、皆が平等で対等な関係が良い。和室は仲間が出来上がっており、人間関係が煩わしいので利用しない。(H/78才/男) いろいろと話ができることが幸せ。ここでの知り合いはその場限りだが、中には色んな人がいるので、話をする際には気を遣う。人の話を聞いても他人に公開しないように気を遣っている。(H/75才/女) ここでは自由に話ができて、文句も言われずに居させてくれる。(S/90才/女) 気分が3施設を使い分けており、それぞれの施設では井戸端会議のようにその時々のニュースや色んな話題を知ることが出来る。(M/68才/女)
非交流	15名	60代: 4 70代: 10 80代: 1 90代: 0	男: 11 女: 4	H: 0 S: 4 T: 2 M: 9	<ul style="list-style-type: none"> 他施設でスポーツをした帰りに立ち寄り、入浴するのが目的。この施設で将棋もやりたいと思っているが仲間がいないので遠慮している。(S/69才/男) 昼食後ウォーキングのついでに立ち寄り、入浴するのが目的。カラオケは演歌が嫌いなので、ここでは参加しない。(S/68才/女) 施設に行くときは昼食を持参してここに来る。主に読書をするために来ており、人と雑談は余りせず一人で過ごすことが多い。(M/75才/男) ヘルストロンを利用すると足が軽くなるような感じがして続けている。(M/76才/女) 以前は自宅に近いT施設を利用していたが、妻の知人が多くプライバシーが保てないので利用をやめた。ここでも、あまり人とは顔なじみになりたくないと思っている。(M/72才/男)

4-6 諸室選択特性

4-6-1 諸室の利用形態

前述のとおり、各施設の諸室は、和室、教養娯楽室、機能回復訓練室、浴室、図書室、玄関ロビー等で構成されており、利用者は各自、思い思いに場所を選択し過ごしている。各室の典型的な利用の様子を整理したのが図4-4である。約80畳程ある和室では、主としてカラオケが行われているが、順番待ちの間は、仲間同士で持ち寄ったお菓子を食べながら会話したり、一人横になって休憩したり、食事したりするなど、場所を共有しつつも各自が思い思いに過ごしている様子が伺える。機能回復訓練室や玄関ロビーでは、ヘルストロン（健康器具）に座ってTVをみたり、会話、居眠りなどを行っている。教養娯楽室では、主としてカラオケや囲碁等のサークル活動に利用されており、会に所属するメンバーの活動の場となっている。

4-6-2 交流意識からみた利用者類型

前章までの分析より、利用者は単に施設の物理的要因のみでなく、他者との人間関係などを意識しながら自分の過ごす施設や場所を選択していると考えられる。そこで、ここでは利用者が施設において場を共有する他者との人間関係をどのように意識し（交流意識）、居場所を獲得しているのか、その人間関係の特性に着目して諸室の選択特性について捉える。分析は、利用者へのヒアリングにおいて、他者との人間関係に言及したコメントをもとに行った。

交流意識は、他者との人間関係を持つことに対して積極的か、消極的かによって交流型と非交流型に大きく分類できる。交流型は、趣味活動や会話などを通して他者との交流を目的に施設を利用するのに対し、非交流型は、他者との交流よりも入浴や健康づくり、暇つぶしなど自己の目的のために施設を利用する。他者との交流はあくまで活動に付随した関係にすぎない。

前述の利用理由の分析でみたように交流型は約8割を占める(54/69)。また、交流型はその人間関係の親密度^{注4-3)}により、さらに組織的交流型、友人的交流型、知人的交流型の3つに分類できる。以上、非交流を含め4タイプに利用者を類型化することができ、その特徴を以下に示す(表4-11)。

1) 組織的交流型

カラオケ、将棋・囲碁、踊りなどの組織（クラブ・サークル等）に属し、趣味活動などを通して交流をはかる。過ごし方の利用者類型で

注4-3) 菅野仁: ジンメル・つながりの哲学、日本放送出版協会、2003（文4-4）
「ジンメルは大きくいって近代以降の人間関係の性質を、人格的距離の遠近にもとづいて大きく3つに分けて分析を加えている（「目的結合」「知人関係」「親密な関係」）。

表 4-12 交流タイプ別の利用諸室割合

交流 タイプ		人 数	平均 滞 在 時 間 (h)	利用諸室							合計
				和室	教養 娯楽室	機能 回復 訓練室	浴室	図書室	玄関 ロビー	その他	
				23	16	45	45	11	24	12	
交流 型	組織的	15	5.0	47%	80%	27%	40%	0%	60%	7%	261%
	友人的	21	4.1	57%	14%	76%	76%	5%	33%	24%	286%
	知人的	18	2.3	17%	0%	89%	89%	28%	17%	17%	256%
	計	54	3.8	41%	28%	67%	70%	11%	35%	17%	269%
非交流型		15	1.8	7%	7%	60%	47%	33%	33%	20%	207%
全 体		69	3.3	33%	23%	65%	65%	16%	35%	17%	255%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満。複数回答。

表 4-13 交流タイプ別の利用者類型（過ごし方）

利用者類型		人数	I 常連 一日	II 常連 半日	III 常連 一時	IV 頻度少 一日	V 頻度少 半日	VI 頻度少 一時	合計
交流タイプ									
交流型	組織的	15	13%	33%	0%	40%	13%	0%	100%
	友人的	21	38%	38%	10%	0%	14%	0%	100%
	知人的	18	11%	22%	44%	0%	11%	11%	100%
非交流型		15	0%	27%	40%	7%	7%	20%	100%
全 体		69	17%	30%	23%	10%	12%	7%	100%

注) 網掛け部は、25%以上。

は、Ⅰ（常連・一日）は少なく、Ⅱ（常連・半日）やⅣ（頻度少・一日）の割合が3割以上と高い（表4-13）。特定の決まった曜日・時間帯に決まったメンバーで集まるため、時間的に拘束された交流形態が特徴的であるが、その活動時間帯以外も、入浴や食事、健康機器を利用するなどして過ごす人もおり、滞在時間も平均5時間程度と長くなっている（表4-12）。特にT施設の割合が高い。

2) 友人的交流型

気の合った特定の数人の仲間と共通の趣味や会話等を通して交流をはかる。過ごし方の利用者類型では、Ⅰ（常連・一日）が4タイプの中で最も高く3割以上あり、Ⅱ（常連・半日）も同様に高い（表4-13）。毎日の日課として施設を訪れ、一日を過ごすなど比較的、長時間の滞在（約4時間）が多い（表4-12）。また、気の向いた時間に訪れ、気楽に仲間と過ごすことができるため、1より時間的拘束が少なく、参加の自由度が高い交流形態であるといえる。また、場を共有する仲間以外の他者ともカラオケなど趣味活動を通して交流し、交友関係を広げている。特にH施設の割合が高い。

3) 知人的交流型

その場に居合わせた不特定の他者と、世間話などの日常的な交流をもつ。お互いのプライバシーに干渉することなく、会話や情報交換などができる顔見知り程度のつきあいが居心地の良さとなっている。過ごし方の利用者類型では、Ⅲ（常連・一時）の割合が約4割と高い（表4-13）。他者とのその場限りの交流であっても、呆け防止やリハビリにもなるとの思いで毎日訪れ、少しの時間過ごしたり、顔見知りがいることで一人暮らしの孤独感が和らげられ、安心感をもって訪れる利用者也みられる。また、当施設だけでなく、他施設と使い分けている多趣味をもった利用者は、自分のペースで過ごせることを重視し、深い人間関係を築くよりも交友関係を広げることを大切にしていたりする。滞在時間は約2時間程度と、上記2タイプより短い（表4-12）。組織的交流の多いT施設を除く3施設で同程度みられる。

4) 非交流型

他者との交流よりも、入浴、健康づくり、趣味活動、暇つぶしなど自己の目的のために施設を利用する。他者との交流はあくまでその目的に付随した関係にすぎず、自分の時間を過ごすことを大切にしている。過ごし方の利用者類型では、Ⅰ（常連・一日）はなく、Ⅲ（常連・一時）やⅡ（常連・半日）の割合が高い（表4-13）。あえて他者との

交流を避けて一人で読書をしたりして過ごす人もいれば、いずれは趣味活動に参加したいという潜在的な要求はあるものの、今のところ仲間がいないため活動には至っておらず、一人で過ごす利用者もいる。また、他施設と使い分けしている多趣味をもった利用者は、他施設で交流をはかっていたりもする。滞在時間も約2時間以下と、4タイプの中で最も短くなっている（表4-12）。M施設で多く、特に男性の割合が高い。前章の分析でも男性はひとりで過ごすことを好む傾向がみられたが、施設利用においても同様の特徴がみられた。

4-6-3 交流意識からみた選択特性

交流タイプ別に利用諸室割合を示したのが表4-12である。交流型全体（3タイプ）と非交流型を比較すると、交流型は和室、浴室の利用が多いのが特徴的である。浴室は裸の付き合いとして、和室はカラオケなどをきっかけとして他者と交流をはかるのには適した場所として選択されていると考えられる。一方、非交流型では図書室が約3割と高くなっており、一人でゆっくり過ごせるスペースとして選択されている。機能回復訓練室や玄関ロビー^{注4-4)}は、交流型、非交流型のいずれにも利用されている。これらの室は、一人で居ることも、居合わせた他者と交流することも可能な室として選択されている。M施設には、他の3施設と異なり、和室や玄関ロビーが設置されていないことが、非交流型が多い一因となっていると考えられる。

以上のように、利用者は単に物理的要因だけでなく、他者との人間関係に対する交流意識が居場所の選択に影響しており、利用者は各自が望む他者との人間関係の度合いや心理的な距離感を意識しながら居場所を選択している。居場所の計画においては、利用者が選択できるように4つの交流タイプを考慮して諸室を構成する必要がある。交流タイプの異なる性格の諸室を有することによって、例えば、組織活動に参加したいという潜在的な要求はあるものの、今のところ仲間がいないため参加できず、早々に施設を後にする利用者にとっては、施設を日々訪れ、他者との知人的・友人的交流を通して組織的交流へと展開できたり、逆に、組織的交流を行うことが身体的、健康的に困難な状況になっても、友人的・知人的交流の場として施設を継続して利用できることもあるため、異なる性格の諸室を相互に関係づけながら室構成を行う必要がある。

注4-4) 組織的交流において玄関ロビーの割合が高いのは、組織的交流型の人数が多い施設がT施設であり、この施設では玄関ロビーに健康機器が設置されているため利用が多いと考えられる（その分、機能回復訓練室の割合が低くなっている）

4-7 小括

高齢者がどのように施設を居場所として選択し利用しているのか、高齢者専用施設である老人福祉センターを事例に取り上げ、施設における高齢者の過ごし方の実態や、他者との人間関係などに対する利用意識から、施設選択及び諸室選択とその要因について捉えた。以下に、その主な結果を示す。

- 1) 運営体制は、いずれの施設も職員が数名常駐しているが、職員の対応は、基本的に利用者の自主性を尊重しており、施設管理や見守り・巡回等の安全管理を主としている。
- 2) 利用者は70才代が多く、ほとんどが概ね健康であり、各自が思い思いに多種の施設サービスを自主的に利用して過ごしている。
- 3) 利用頻度は、ほぼ毎日（週4日以上）の利用が7割以上を占め、常連化の実態が窺える。
- 4) 利用のきっかけは、4施設全体で、家族や友人の紹介が約6割を占め最も多く、主に口コミで利用するようになり、次第に習慣化、常連化していくとみられる。
- 5) 利用理由では「交流」が約8割と最も多く、多くの利用者がたとえ数時間でも他者と交流できることを重視している。
- 6) 利用者の多様な過ごし方を、利用頻度、滞在時間をもとにⅠ～Ⅵの6タイプに類型化できた。
- 7) 高齢者といえども「休館日」や「イベント」、「ついで」などの理由で、他の施設を使い分けている実態がみられた。
- 8) 高齢者は必ずしも居住地の最寄施設を利用するとは限らず、人間関係やプライバシー等の理由から遠方施設を選択することもある。
- 9) 交流意識を他者との人間関係の持ち方から「組織的交流型」「友人的交流型」「知人的交流型」「非交流型」の4タイプに類型化した。
- 10) 交流型と非交流型では、利用諸室の選択に違いがみられた。また、交流タイプと6)の過ごし方の利用者類型（Ⅰ～Ⅵ）にも特徴的な関係がみられた。

特に高齢者が居場所を選択する上で、物理的空間だけでなく人間関係が影響していることがわかった。したがって、居場所として地域施設を計画する際には、どのような人間関係をもたらし場所（施設や諸室）なのかを念頭におく必要があり、その際に交流意識からみた4タイプの類型が参考になるであろう。また、特定の施設だけの利用は人間関係が閉鎖的になりかねないため、休館日をずらしたり、施設の複

合化などハード・ソフト両面で施設の個性化や、施設間の連携を図り、利用者の施設選択を可能とする整備が必要であると考え。なお、タイプ別の計画的要件及びタイプ間の連携については、6章において、5章の分析結果とともに考察することとする。

参考文献

- 文 4-1) 鈴木成文ほか：「地域老人福祉施設に関する基礎的研究（その1～4）」、日本建築学会大会梗概集、E分冊、pp. 843-850、1977. 10
- 文 4-2) 浅沼由紀ほか：「都市居住高齢者のための地域施設計画に関する研究（その1～5）」、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp. 7-12 1997. 9、pp. 435-438 1998. 9
- 文 4-3) 石飛知華ほか：「老人福祉センターの現状と整備の方向性 過去10年間に開設された老人福祉センターを対象として」、日本建築学会計画系論文集 第574号、pp. 25-32、2003. 12
- 文 4-4) 田中裕基ほか：「自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究 - 多摩市コミュニティセンター内の高齢者スペースにおけるケーススタディ -」、日本建築学会計画系論文集 第562号、pp. 165-172、2002. 12
- 文 4-5) 菅野仁：ジンメル・つながりの哲学、日本放送出版協会、2003

本章の関連論文

〈査読論文〉

- 1) 木下誠一・今井正次：老人福祉センターの利用意識からみた居場所選択特性
- 高齢者の居場所に関する研究 -、第27回 地域施設計画研究、pp. 147-156、2009. 7

第5章 中高生の居場所の選択特性

第5章 中高生の居場所の選択特性

5-1 本章の目的と方法

5-1-1 目的

若年層は高齢層と同様に交通手段や経済面などで制約があり、居場所整備の必要性が高いという点で共通するが、第3章において、若年層は地域の中で多くの居場所を有し、使い分けている点で対照的であった。両者で居場所に対する要求や地域施設の位置づけも異なっていると思われる。

本章では、この若年層のうち、より交通手段が限られ、地域への依存度が高いと考えられる中高生を取り上げる。地域施設において、子どもを対象にした代表的な施設として児童館があるが、主に小学生以下の児童が対象であり、中高生が放課後利用することは難しく、家庭や学校以外に地域でその受け皿を用意する必要性が高いと考えられる。また、田中が「マス(集団)として子どもや若者を捉えられなくなった」^{文5-1)}と指摘するように、ニーズが多様化し、グループ離れが進む中で、集団的に扱ってきた行政や健全育成団体だけでなく、柔軟に対応できる民間組織も含めて、その役割が問われている。今後、地域全体として中高生を受け入れていくには、中高生の施設に対するニーズを把握し、公共施設だけでなく民間施設も含めた総合的な施設整備のあり方を検討する必要があると思われる。

そこで、4章の高齢者の居場所では特定の施設種を対象にしたが、本章では、若年層が多様な居場所を選択している実態をふまえ、様々な施設種、規模、設え、運営形態などを有する「青少年居場所づくり」の取組事例を中心に対象として取り上げる。そして、施設における利用者や運営者の意識を比較分析を通して、施設の空間特性や施設での過ごし方、他者との人間関係、運営形態などについて分析を行い、居場所となるための計画的要件を捉える。

「青少年の居場所づくり」は、近年、学校週5日制の導入や中高生の問題行動の深刻化、地域社会における人間関係の希薄化などを背景に、中高生が安心して集える活動の場の提供を目的として、全国の自治体やNPOなどによる青少年の居場所づくりの取組みが各地で展開され、自宅や学校以外に様々な「居場所」^{注5-1)}が生まれている^{注5-2)}。しかし、こうした取組みはまだ新しく、個々に試行錯誤しながら運営されているのが実情であり、その現状と課題を分析し、その成立条件について考察する。

文5-1) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わり」の場へ、学陽書房、2001

注5-1) 事業・制度等に基づいて意図的に計画された居場所は括弧書きの「居場所」と表記して区別している。

注5-2) ホームページにて「青少年の居場所づくり」をキーワードに検索した結果、都道府県では、秋田県、三重県、京都府、岡山県、島根県など、市町村では奥州市(水沢市)、葛飾区、杉並区、横浜市、東海市、神戸市などの取組が抽出された。これらは一部であるが、多くの自治体で取り組まれていることがわかる。(2006年10月現在)

表 5-1 調査対象施設の概要

施設 類型		施設 略称	施 設	運営主体	所在地	運営者 ヒアリ ング	利用者 アン ケート
近隣型	公共型	Su	公共施設（市民活動センター）	任意団体	津市	○	○
		Fs	公共施設（公民館）	任意団体	津市	○	○
		Tt	公共施設（地区会館）	任意団体	津市	○	-
		Z	公共施設（市民活動センター）	NPO 法人	松阪市	○	-
		H	公共施設（児童館）	任意団体	志摩市	○	○
		A	公共施設（公民館）	任意団体	紀北町	○	-
	民間型	Ss	民間施設（新築戸建）	NPO 法人	四日市市	○	○
		Ys	民間施設（古民家）	NPO 法人	四日市市	○	○
		M	民間施設（古民家）	NPO 法人	四日市市	○	-
		S	民間施設（旧旅館）	NPO 法人	津市	○	○
広域型	K	公共施設（郊外・複合文化施設）	三重県	津市	-	○	
	U	公共民間複合施設（駅前再開発ビル）	三重県	津市	-	○	

表 5-2 調査概要

中高生 生活実態 アンケート	調査期間 調査対象 調査対象者 アンケート項目 アンケート方法	: 2005 年 10 月～2005 年 11 月 : 中学校 5 校（三重県四日市市 2 校、津市 2 校、大紀町 1 校） : 中学 2 年生 計 414 名（男子 203、女子 211 名） : 属性 / 自由な時間を過ごす場所 / 交通手段 / 利用頻度 / 利用理由 / 対人関係 / 充実感を感じる時 / など : 学校経由で中学生に配布・回収
	調査期間 調査対象 有効回収数 アンケート項目 アンケート方法	: 2005 年 7 月～2005 年 8 月 : 三重県内 4 地区（四日市市・津市・志摩市・大紀町）に 住む高校生。 : 計 99 名 : 上記、中学生アンケートと同じ : 市街化程度を勘案し各地区を 1.5～3Km メッシュで区 切り、各メッシュの中心付近 10 世帯を抽出。 世帯毎に 15 歳以上の人数分の調査票を直接訪問配布・ 郵送回収（配布世帯数 4,179 世帯、配布調査票数 10,269 票、回収票数 3,322 票、回収率 32%）。 上記回収票のうち、高校生による回答分を抽出（99 票）。
運営者 ヒアリング	調査期間 調査対象施設 調査対象者 ヒアリング項目 その他	: 2004 年 7 月～2004 年 10 月、2006 年 1 月 : 近隣型 10 件（Ss,Ys,M,S,Su,Fs,Tt,Z,H,A） : 施設の運営者（コーディネーター） : 運営組織 / 開館日時 / 企画活動内容 / 補助金の使途 / 「居場所」での中高生の主な活動 / 中高生の利用状況 / 運営上の問題点・留意点 / 「居場所」の理想像 / など : 「居場所」内の設え等のレイアウト採取
利用者 アンケート	調査期間 調査対象施設 調査対象者 アンケート項目 アンケート方法	: 2005 年 11 月～2006 年 1 月 : 近隣型 6 件（Fs,H,Su,Ys,S,Ss） ・公共型: 公民館（Fs）、児童館（H）、市民活動センター（Su） ・民間型: 古民家（Ys）、旧旅館（S）、新築戸建（Ss） 広域型 2 件（K: 郊外,U: 駅前） : 施設を利用する中高生（浪人含む） : 属性 / 交通手段 / 利用頻度 / 利用形態 / 利用内容 / 一緒に過ごす相手 / 場所像 / 施設選択理由 / など : 近隣型は、運営者経由で利用者に配布・回収 広域型は、調査者が利用者に直接配布・回収

注5-3)「三重県青少年居場所づくり事業」は、三重県がH15年度から開始した民間委託事業（H17年度までの3年間を補助事業）であり、県生活部青少年育成室が総合的に管理を行う。事業目的は、「中高生の世代の青少年が、土日や放課後の時間帯を中心に、気軽に立ち寄り、自由に集まることのできる「居場所」を設け、そこに集まる青少年自らが企画・運営する「青少年の、青少年による、青少年のための活動」を通じて、地域の大人達との語らいや交流などにより、青少年が、自立心や社会規範を身につけ、また、自分たちが地域の構成員の一部であることの自覚を高めていくこと」を活動理念とする。主な設置基準は以下の通りである。

- ・活動拠点となる「居場所」を地域の公民館、空店舗等につくる。
- ・青少年で組織された「居場所」運営にあたる青少年委員会を設置する。
- ・青少年委員会をサポートするコーディネーター（運営者）を設置する。（採用条件は成人であること以外、経歴等は問われない。）
- ・青少年委員会で企画したサークル活動・体験活動等を行う。
- ・「居場所」の利用料は無料とする。
- ・原則、土曜を含む週4日以上、かつ、1日3時間以上開館する

注5-4) 調査対象施設は、地域の中での居場所づくりを試みた実践事例であり、事業実施後1年以上経過し施設利用が定常化しつつあること、また公共施設だけでなく民間施設もあり、運営主体もNPO団体からボランティア、行政職員など多岐にわたり、比較分析を行う上で適切であると判断した。

注5-5) 公共型とは、「居場所」を公共施設に設置した施設

注5-6) 民間型とは、「居場所」を民間施設に設置した施設

注5-7) 利用者が予約や手続き無しに施設内で自由に過ごせる場所。

5-1-2 方法

まず、中高生の日常的な生活構造について捉える。第3章における地域住民アンケートでは調査対象を15才以上を対象にしていたため、特に中学生の生活実態については十分把握できていない。そこで、放課後や休日などの自由な時間をどのような場所で過ごしているのか、その生活像を捉え、施設整備の課題を把握する。

次に、行政による居場所づくり事業に基づき、主に市町村域を誘致圏とした公民館等の公共施設や民家等の民間施設において意図的に設置され、市民団体等により運営されている「居場所」（以下、近隣型）を中心に引き上げ、施設相互及び同事業以外で広域的な誘致圏を有する施設（以下、広域型）との比較分析を通して利用特性を把握する。さらに、「居場所」の立地・空間、運営面の特性を捉え、これらが他者との人間関係に及ぼす影響や、「居場所」に求められる成立条件を考察する。

なお、関連する既往研究には、中高生対象施設の先進事例を扱った金丸らの研究^{文5-2)}、中高生対応の児童館を扱った定行らの研究^{文5-3)}などがある。また、中高生の利用場所における意識や人間関係に着目した田中らの研究^{文5-4)}がある。中高生以外の不特定利用者を対象にした街角の居場所に関する研究では、空き店舗の活用事例を扱った張らの研究^{文5-5)}、地域住民が主体的に設立・運営する交流の場を扱った小松らの研究^{文5-6)}などがある。これらは、主に先進的な個別事例について詳細に分析しているが、施設相互の比較分析は少ない。中高生が地域の中で居場所の選択を可能にするような総合的な施設整備を視野に入れながら、公共と民間や、誘致圏の異なる施設相互の比較分析を通して特性を把握し、各施設の位置づけを論じる必要がある。

調査対象は、居場所づくりの取組みが行われている三重県内の施設及び中高生とする。調査対象施設は、近隣型は三重県による「三重県青少年居場所づくり事業^{注5-3)}」（以下、「居場所事業」）に登録する「居場所」（H15年度：14件）の中から調査協力の得られた10件を選定した^{注5-4)}。10件の内訳は、公共型^{注5-5)}6件と民間型^{注5-6)}4件である。公共型には、公民館及び地区会館（3件）、市民活動センター（2件）、児童館（1件）があり、民間型には、古民家（2件）、旧旅館（1件）、新築戸建（1件）がある。一方、広域型は「居場所事業」以外で中高生をはじめとして不特定多数が利用し、広域的な誘致圏を有する県の公共施設2件を選定した。これらは県内有数の大規模施設であり、中高生が自由に過ごせるロビーや中庭等のフリースペース^{注5-7)}を有する。調査対象施設の概要及び調査概要を表5-1、表5-2に示す（施設名は以下、表5-1の施設略称を用いる）。主な調査は以下の3つである。

表 5-3 自由な時間を過ごす場所

自由な時間を過ごす場所	中学生		高校生	
	男子 n=203	女子 n=211	男子 n=50	女子 n=49
自宅	94%	96%	96%	82%
学校	55%	54%	44%	43%
知人・友人宅	73%	56%	64%	45%
公共施設	図書館	9%	15%	20%
	公民館・集会所	1%	9%	0%
	文化施設	2%	1%	2%
	美術館・博物館	1%	1%	0%
	スポーツ施設	21%	10%	22%
	教育施設	4%	7%	4%
民間施設	商業施設	32%	40%	28%
	娯楽施設	27%	31%	30%
	飲食店	6%	15%	14%
自然	公園	9%	11%	6%
	山や海	13%	5%	10%
その他	22%	26%	6%	8%
不明	0%	1%	2%	6%
計	369%	377%	348%	320%

注) 最大4ヶ所まで選択可とした。

表 5-4 交通手段

交通手段	中学生		高校生	
	男子 n=167	女子 n=191	男子 n=39	女子 n=40
徒歩	10%	13%	3%	10%
自転車	69%	47%	41%	23%
バイク	0%	1%	5%	0%
公共交通	5%	7%	23%	38%
タクシー	1%	2%	0%	0%
自家用車	13%	30%	21%	30%
その他	2%	1%	5%	0%
不明	0%	0%	3%	0%
計	100%	100%	100%	100%

注) 「自由な時間を過ごす場所」の中で、最も利用する場所に対する回答である。

表 5-5 充実感を感じる時

充実感を感じる時	中学生		高校生	
	男子 n=203	女子 n=211	男子 n=50	女子 n=49
勉強・仕事	5%	4%	14%	14%
育児・家事	1%	5%	0%	4%
一人で休養	33%	23%	30%	33%
家族と団らん・旅行	18%	22%	8%	10%
友人と雑談・旅行	35%	54%	40%	57%
趣味	71%	59%	54%	45%
習い事	4%	4%	4%	4%
グループ・団体活動	18%	14%	12%	4%
自主学習	3%	6%	12%	4%
その他	4%	7%	6%	6%
不明	3%	1%	0%	2%
計	195%	198%	180%	184%

注) 2つまで選択可とした。

表 5-6 対人関係

対人関係	中学生		高校生	
	男子 n=167	女子 n=191	男子 n=39	女子 n=40
家族	11%	24%	15%	20%
隣近所の人	1%	0%	0%	0%
家族の友人	1%	2%	0%	0%
趣味の友人	10%	5%	15%	10%
学校の友人	53%	50%	39%	53%
一人	20%	13%	26%	10%
その他	5%	7%	0%	5%
不明	0%	1%	5%	3%
計	100%	100%	100%	100%

注) 「自由な時間を過ごす場所」の中で、最も利用する場所に対する回答である。

注 5-8) 三重県内の地域特性の異なる市町として、三重県最大の都市である四日市市、県庁所在地で公共施設の充実した津市、都市圏から離れた志摩市、大紀町を選定した。

1) 中高生生活実態アンケート調査

三重県内の一般的な中高生の生活実態を把握するため、地域特性の異なる市町^{注 5-8)}を数地区選定し、各地区に在住する中学生及び高校生に対して、自由な時間を過ごす場所・対人関係・交通手段・充実感を感じる時などについてのアンケート調査を行った。

2) 運営者ヒアリング調査及び施設レイアウト採取

近隣型 10 件に対し、運営者へのヒアリング及びレイアウト採取を行い、「居場所」の空間特性や運営形態の特徴について把握した。

3) 利用者アンケート調査

2) の 10 件のうち設置建物種の異なる 6 件(公共型 3 件、民間型 3 件)及び広域型 2 件の利用者を対象に、利用状況や利用意識に関するアンケート調査を行った。なお、広域型では、施設のフリースペース内で過ごす中高生を対象とした。

5-2 中高生の生活実態

5-2-1 自由な時間を過ごす場所 (表 5-3)

生活実態アンケートにおいて、中高生に放課後や休日などの自由な時間をどこで過ごすか、最大 4 件まで挙げてもらったところ、一人当たりの平均場所数は、中学生で 3.7 件、高校生で 3.3 件であった。これは、中高生生活実態アンケート調査と同じ対象地区、方法、項目で、中高生以外の属性(18 才以上)に対して行ったアンケート結果の 2.9 件を上回る。内訳は、どの属性も「自宅」が 9 割以上と圧倒的に多く、次いで「友人・知人宅」「学校」が半数程度を占める。「友人・知人宅」は、中高生以外では 28% しかなく、いかに中高生にとって重要な場所と位置づけられているかが分かる。他の施設の中では、「商業施設」「娯楽施設」が 3 割前後と多い。公共施設では、「図書館」や「スポーツ施設」が 2 割程度あるほかは 1 割にも満たない。男女差をみると、「スポーツ施設」は男子、「商業施設」は女子が多い。

以上のことから、中高生は、自宅や学校、友人宅を日常生活の核とし、さらに公共・民間施設も選択肢の一つとして含め、これら複数の場所を使い分けながら自由な時間を過ごしているといえる。

5-2-2 交通手段と日常生活圏 (表 5-4)

「自由な時間を過ごす場所」への交通手段は、中学生は「自転車」が主であるが、高校生は「自転車」と「公共交通機関」が主となっている。また、女子は、中高生共に家族との同伴によるとみられる「自

表 5-7 利用者属性

利用者属性 (単一回答)	近隣型 (公共)				近隣型 (民間)				広域型	
	Fs	H	Su	計	Ys	S	Ss	計	K	U
回答者数	13	14	13	40	10	14	15	39	76	62
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
性別										
男子	46%	36%	15%	33%	10%	71%	20%	36%	53%	52%
女子	54%	64%	85%	68%	90%	29%	80%	64%	47%	48%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
学年										
中学生	0%	57%	0%	20%	50%	7%	67%	41%	29%	27%
高校生	100%	43%	100%	80%	50%	93%	33%	59%	59%	60%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	13%
通学										
施設と同市内にある学校	54%	86%	23%	55%	90%	100%	87%	92%	71%	81%
施設と同市内にない学校	46%	14%	77%	45%	10%	0%	13%	8%	17%	7%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	12%
部活										
運動部	8%	57%	23%	30%	30%	14%	73%	41%	41%	32%
文化部	31%	0%	0%	10%	30%	14%	7%	15%	17%	26%
不参加	62%	43%	77%	60%	40%	71%	20%	44%	33%	32%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	9%	10%

表 5-8 利用状況

注) 網掛け部は50%以上

利用状況 (※1のみ複数回答)	近隣型 (公共)				近隣型 (民間)				広域型	
	Fs	H	Su	計	Ys	S	Ss	計	K	U
回答者数	13	14	13	40	10	14	15	39	76	62
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
交通手段										
徒歩	8%	57%	0%	23%	30%	36%	33%	33%	11%	5%
自転車	62%	36%	8%	35%	30%	14%	33%	26%	63%	8%
バイク	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	3%
自家用車	0%	0%	0%	0%	10%	0%	20%	10%	12%	2%
バス	15%	0%	8%	8%	0%	0%	13%	5%	3%	8%
電車	15%	0%	8%	33%	30%	50%	0%	26%	8%	7%
その他	0%	7%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	1%	0%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
利用頻度										
ほとんど毎日	8%	14%	0%	8%	0%	0%	0%	0%	7%	19%
週に2,3回	31%	21%	0%	18%	10%	7%	0%	5%	12%	23%
週に1回	31%	14%	0%	15%	10%	21%	13%	15%	17%	16%
隔週に1回	23%	7%	0%	10%	10%	7%	33%	18%	20%	11%
月に1回	8%	21%	23%	18%	50%	29%	20%	31%	17%	18%
数ヶ月に1回	0%	21%	77%	33%	0%	0%	7%	3%	20%	2%
半年に1回	0%	0%	0%	0%	10%	21%	20%	18%	3%	5%
年に1回	0%	0%	0%	0%	0%	14%	0%	5%	3%	0%
初めて	0%	0%	0%	0%	10%	0%	0%	3%	3%	7%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	3%	0%	0%
利用形態										
ついで利用	39%	43%	0%	28%	50%	100%	33%	32%	16%	7%
休日利用	0%	7%	8%	5%	30%	0%	20%	15%	21%	19%
イベント利用	62%	50%	92%	68%	10%	0%	47%	21%	9%	0%
不明	0%	0%	0%	0%	10%	0%	0%	3%	4%	5%
一緒に過ごす相手										
家族	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%
学校の友人	0%	71%	8%	28%	50%	93%	53%	67%	61%	77%
塾の友人	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	3%
近所の人	0%	7%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	4%	0%
趣味の友人	62%	0%	92%	50%	0%	7%	0%	3%	1%	3%
バイトの友人	8%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
この施設の知人	8%	7%	0%	5%	0%	0%	40%	15%	1%	0%
他の施設の知人	0%	0%	0%	0%	0%	0%	7%	3%	0%	0%
施設の運営者	0%	0%	0%	0%	20%	0%	0%	5%	0%	0%
一人	8%	14%	0%	8%	30%	0%	0%	8%	21%	16%
その他	15%	0%	0%	5%	0%	0%	0%	0%	5%	0%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
利用内容 ※1										
会話	46%	50%	23%	40%	40%	84%	67%	50%	22%	32%
勉強	31%	64%	15%	38%	10%	7%	47%	23%	91%	71%
読書	15%	0%	0%	5%	10%	29%	0%	13%	18%	7%
食事	8%	0%	0%	3%	0%	36%	20%	21%	5%	23%
遊び	23%	36%	8%	23%	50%	29%	73%	51%	12%	23%
情報の取得	15%	21%	15%	18%	0%	14%	7%	8%	9%	15%
打ち合わせ	92%	29%	85%	68%	0%	36%	47%	31%	3%	3%
待ち合わせ	8%	7%	0%	5%	0%	14%	13%	10%	0%	7%
付き添い	0%	0%	0%	0%	10%	0%	7%	5%	5%	2%
休憩	15%	0%	0%	5%	20%	29%	33%	28%	15%	19%
時間潰し	46%	14%	0%	20%	20%	71%	27%	41%	8%	23%
何もしない	8%	0%	0%	3%	20%	0%	0%	5%	1%	3%
その他	0%	7%	0%	3%	10%	0%	0%	3%	16%	2%
不明	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満

「家用車」の割合が3割程度と多い。以上のことから、中高生の日常生活圏は交通手段により限定され、中学生は、徒歩・自転車圏内が主であり、高校生は、電車・バス等の公共交通機関の利用に伴い、中学生より生活圏が広域化しているといえる。

5-2-3 対人関係と充実感（表 5-5, 表 5-6）

「自由な時間を過ごす場所」で一緒に過ごす人をみると、「学校の友人」が半数程度と最も多く、次いで「家族」「一人」が2割前後である。また、「充実感を感じる時」では、「趣味」「友人と雑談・旅行」、次いで「一人で休養」が多く、「家族と団らん」や「グループ・団体活動」「勉強」などは、それより少ない。つまり、中高生の多くは、家族よりも同世代の仲間と一緒にいる時、もしくは一人でいる時に充実感を感じ、それに適した場所を選択するものと推察できる。

5-2-4 施設整備の課題

中高生は、友人や一人で自由な時間を過ごせる場所を必要としている。しかし、日常生活の地域サービスを担う身近な公共施設（公民館等）が十分利用されず、その受け皿は主に商業娯楽施設が中心となっている。交通手段が限られ、経済的に余裕のない中高生のために、自宅や学校以外で身近に過ごせる場所の提供が課題といえる。

5-3 「居場所」の利用特性

5-3-1 対象施設及び利用者属性（表 5-7）

前述の課題をふまえ、ここでは利用者アンケートを行った設置建物種の異なる公共型（以下、近隣型（公共））3件、及び民間型（以下、近隣型（民間））3件を取り上げ、その利用特性を把握する。また、中高生は自由な時間を過ごす場所を使い分けていることから、広域型（2件）を比較対象に加え、近隣型と広域型の施設選択特性の違いを把握する。各施設のアンケート回答者数及び属性を表 5-7 に示す。性別は女子、学年は高校生が多いなど若干偏りが見られる。通学先は、Suを除き施設と同市内の学校に通う利用者が中心である。

5-3-2 利用状況（表 5-8, 表 5-10）

1) 交通手段

自宅から施設への交通手段は、近隣型はS、Suを除く4件で「徒歩」「自転車」が6割以上あり、自転車圏内の利用者が主である。電車利用が半数以上を占める2件（S、Su）では、Sは駅前かつ学校付近に

立地するが、Suは市外通学者が多く、自宅や学校、駅からも離れた関係にあり、利用頻度も少ない。一方、広域型では、郊外のKは「徒歩」「自転車」が約7割あるが、駅前のUは電車が約7割を占める。つまり、広域型でも郊外の場合は自転車圏内の利用者が主となり、交通手段の限られる中高生にとって、自宅や学校、駅周辺など日常生活動線付近の施設が利用されるといえる。

2) 利用頻度と利用形態

利用形態では、近隣型（公共）は、いずれも「イベント利用」が多く、近隣型（民間）は、「ついで利用」が2件で多い。利用頻度は、近隣型（公共）は週1回以上が2件で約5割あるが、近隣型（民間）はいずれも約2割と少なく、「ほとんど毎日」はない。つまり、近隣型（公共）は、イベント利用を主としつつも日常的にも利用されるが、近隣型（民間）は、たまに何かのついでに立ち寄る場所といえる。一方、広域型では、Kは、毎週～隔週程度の「休日利用」が多い。Uは、週1回以上が約6割あり、「ついで利用」が多く、リピーターが多くみられるのが特徴的である。これは、立地条件（K：郊外、U：駅前）の違いが利用に影響していると考えられる。

3) 一緒に過ごす相手

施設内で一緒に過ごす相手は、近隣型（公共）の2件を除き「学校の友人」が5割以上と多く、中高生にとって学校以外でも重要な相手であることがわかる。他の2件は「趣味を通しての友人」が最も多く、学校の枠を越えた仲間が集まる場所となっている。この他、近隣型（民間）では、少数だが「運営者」（Ys）、「この施設の知人」（Ss）など施

表 5-9 施設選択理由

施設選択理由 (複数回答)		近隣型（公共）				近隣型（民間）				広域型	
		Fs	H	Su	計	Ys	S	Ss	計	K	U
回答者数		13	14	13	40	10	14	15	39	76	62
		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
活動意識	気分転換できる	23%	0%	0%	8%	20%	14%	53%	31%	20%	18%
	くつろげる	31%	36%	15%	28%	20%	57%	60%	49%	20%	21%
	時間がつぶせる	39%	14%	0%	18%	30%	64%	7%	33%	11%	40%
	やりたいことができる	39%	29%	69%	45%	30%	7%	27%	21%	47%	39%
人間関係	一人になれる	0%	0%	0%	0%	10%	0%	7%	5%	11%	7%
	知っている人が少ない	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	2%
	運営者が話を聞いてくれる	0%	43%	23%	23%	40%	29%	20%	28%	1%	0%
	運営者との関係が薄い	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	3%
立地・空間	ここに来れば誰かがいる	54%	21%	0%	25%	80%	57%	87%	74%	0%	0%
	他に行く場所がないから	8%	7%	8%	8%	10%	50%	0%	21%	16%	39%
	施設に入りやすい	23%	7%	0%	10%	20%	57%	27%	36%	28%	50%
	場所が選べる	0%	0%	15%	5%	0%	0%	0%	0%	7%	3%
運営	開放感がある	15%	21%	0%	13%	10%	14%	27%	18%	8%	10%
	近い	15%	36%	0%	18%	20%	57%	20%	33%	41%	40%
	長時間利用できる	46%	14%	15%	25%	10%	29%	33%	26%	58%	48%
	プログラムが気に入っている	8%	50%	8%	23%	20%	7%	20%	15%	1%	0%
その他	やりたい企画が立てられる	8%	0%	46%	18%	0%	0%	13%	5%	4%	2%
	無料で利用できる	46%	21%	85%	50%	50%	71%	27%	49%	58%	76%
	不明	8%	14%	8%	10%	0%	0%	0%	0%	7%	3%
		0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

注) 網掛け部は、濃：50%以上、薄：25%～50%未満

設関係者をあげている点が他と異なる。一方、広域型は一人で過ごす中高生も約2割おり、近隣型の平均より多い。

4) 利用内容

近隣型では、「会話」が5件で4割以上を占め、広域型より多く、友人と親交を深める場所であることがわかる。近隣型（公共）は、2件でイベントやその準備の「打ち合わせ」が8割以上と多く、近隣型（民間）は、2件で「遊び」が5割以上と多いのが特徴的である。また、前者は2件で「勉強」が3割以上あり、後者は、「食事」「休憩」「時間潰し」が多い。つまり、近隣型（公共）は目的が明確な利用が主であるのに対し、近隣型（民間）は非目的的な利用が主となっている。一方、広域型は、いずれも「勉強」が7割以上を占める点が近隣型と異なるが、Uは「勉強」以外に「会話」「食事」「遊び」「時間潰し」が2割以上あり、幅広い利用がみられる点でKと異なる。

5-3-3 施設選択要因（表5-9, 表5-10）

施設選択理由を「活動意識」、「人間関係」、「立地・空間」、「運営」に4分類し、中高生が施設を選択する際に重視する要因を把握する。

1) 活動意識

近隣型（公共）は、「やりたいことができる」が平均約4割と多いのに対し、近隣型（民間）は、「くつろげる」「気分転換ができる」「時間がつぶせる」が共に平均3割以上と多い。つまり、前述の利用内容と同様な結果から、前者は、利用者の能動的な活動要求に応える施設、後者は、雰囲気などを享受できる施設として選択されているといえる。一方、広域型は、「やりたいことができる」が近隣型（公共）と同程度あるが、Uは「時間がつぶせる」も約4割ある。

2) 人間関係

近隣型は、6件中4件で「ここに来れば誰かがいる」が5割以上を占め、特に近隣型（民間）の2件で約8割ある。また、「話を聞いてくれる運営者がいる」が5件で2割以上ある。一方、広域型は、いずれも皆無に等しく、「一人になれる」「知っている人が少ない」も1割程度あることから、匿名性への要求がみられる。つまり、近隣型は、他者と親密な関係を形成できる施設、広域型は人間関係よりも個人の利用目的を優先する施設として選択されているといえる。これは、他者との距離感や場所選択の幅に係る施設規模（広域型：大規模、近隣型：小規模）や、運営者の存在、プログラムの有無が他者との親密度に影響を及ぼしていると推察できる。

3) 立地・空間

近隣型のS、H、広域型のU、Kで「近い」が3割以上ある。S、Uは、駅前立地のアクセスの良さが選択要因となり、Hは徒歩利用、Kは休日の自転車利用が多く、共に自宅に近いことが選択要因になっていると考えられる。しかし、他施設では、「近い」は2割以下と少なく、運営者がアクセスの悪さを問題視する所以が窺える（5-4-1 参照、表5-12）。また、駅前立地のS、Uは、「施設に入りやすい」も約半数ある。共に前述のアクセスの良さに加え、Uは商業等を含む複合施設、Sは玄関土間を中高生に開放していることなどが、利用のバリアを低く感じさせているものと考えられる。空間面では、「場所が選択できる」は、近隣型の中で最も床面積の広いSuと広域型2件で若干見られることから、特に規模の大きな施設では、施設内で過ごせる場所の多さも選択要因になるといえる。

4) 運営

「無料で利用できる」は、近隣型6件中3件及び広域型で5割以上と多く、他施設でも2割以上あることから、利用料が無料であることは施設選択上の基礎的要因といえる。また、近隣型では、6件中3件で「プログラムが気に入っている」が2割前後あり、これらの施設では工作教室や裁縫教室、キャンプ等が行われている（表5-12）。さらに、Suでは、「自分のやりたい企画が立てられる」の回答が約半数と多いことから、活動プログラムを一方的に提供するだけでなく、中高生が主体的に企画活動を行える運営も選択要因といえる。一方、広域型では、「長時間利用できる」がいずれも5割前後あり近隣型よりも多いことから、より長時間利用できることが重視されているといえる。

5-3-4 「居場所」の利用特性

近隣型、広域型は共に中高生が施設を選択する際、立地の良さや無料であることが基礎的要因となっている。また、近隣型は、広域型よりも他者と親密な関係を形成できる施設として選択され、近隣型（公共）は、目的を共有した仲間と一緒に利用できる施設、近隣型（民間）は、特定の利用目的をもち、雰囲気を楽しむ仲間と過ごせる施設として選択される傾向にあるといえる。

施設計画、近隣型と広域型の利用特性の違いをふまえて「居場所」を提供する必要があると考える。次節以降では、こうした利用特性に影響を及ぼすと考えられる立地・空間特性及び運営特性を詳しく把握し、成立条件を考察する。

5-4 近隣型の立地・空間特性

5-4-1 アクセス環境（表 5-10）

近隣型の「居場所」10件の立地は、駅前地区2件、中心市街地3件、住宅地5件である。運営者へのヒアリング（表 5-12）では、駅前は特に立地上の問題は無く、他の5件（Ss, M, Su, Fs, A）で主に交通アクセスの悪さを問題としている。この中には、中心市街地の3件全てが含まれ、必ずしも中心市街地は中高生が立ち寄り易い環境とはいえないことがわかる。住宅地では、5件中2件が住宅地のはずれ（Ss）や、わかりにくい場所（A）にあるため、交通アクセスや施設の視認性を問題としており、他の3件は、住宅地の中心付近（Tt, H）、もしくは通学路沿い（Ys）に立地するため問題視されていないと考えられる。

Suの運営者が、「イベントなどでは、多少遠くても中高生は来る」と語るように、非日常的で目的性の高いイベントを中心にした運営を行うことで、アクセス環境の欠点を克服している。

5-4-2 周辺環境（表 5-10）

駅前に立地するSは、駅周辺の施設整備状況が乏しいことから、下校時に立ち寄れる数少ない場所となっている。一方、中心市街地にあるFsは、周辺施設が比較的充実しているため、イベントや集団での活動を行う際には、広いスペースを有する近隣のSuや公園などを有効に使い分けている。このように、周辺施設の整備状況が「居場所」の存在意義や活動展開の幅に影響している。

また、地域と良好な関係を築くために、「居場所」の設置以前から家主が和裁教室を開いていたYsや旧旅館のSなど、人の出入りがあった建物を「居場所」に選定したり、Ssの運営者が「住宅地のはずれにあるため、関係がうまくいっている」と語るように、中高生の出入りによる騒がしさや、不良の溜まり場とみる住民感情への配慮が、特に、一般に認知されていない民間型で見られる。

5-4-3 「居場所」の設定（表 5-10）

「居場所」の設定方法には、①施設全体を他の世代と共用する「居場所」に設定（H, Su, Ss, Ys, M）、②施設の一部を他の世代と共用する「居場所」に設定（Tt, A, Z, S）、③施設の一部を中高生専用の「居場所」に設定（Fs）の3タイプに大きく分類できる。

①は、児童館（H）、市民活動センター（Su）、NPO団体の拠点施設（Ss, Ys, M）であり、運営者が施設管理者でもあることから、施設全体の利用が可能となっている。この場合、施設内の諸室や設備が自由に

表5-10 施設の立地・空間特性

施設類型		立地・諸室構成・設え	
近隣型	公共型	Su 立地／中心市街地 ・元大型店舗空床転用のため広いスペースがある(ふれあいコーナー、板間スペース) ・中高生専用のロッカー、倉庫を用意	Fs 立地／中心市街地 ・公民館内の1室を中高生専用の「居場所」に設定 ・活動時は会議室等を使うことが可能
		Tt 立地／郊外住宅地 ・地区会館の1,2階玄関ロビーを「居場所」に設定 ・活動時は会議室を使うことが可能	Z 立地／駅前 ・市民活動センターの玄関ロビーを「居場所」に設定 ・会議室を使うことが可能
		H 立地／郊外住宅地 ・児童館全体及び隣接する旧保育所(体育室、木工室)を「居場所」に設定 ・屋外広場を併設	A 立地／郊外住宅地 ・公民館の1階を「居場所」に設定 ・卓球台、パソコン、ゲームコーナーを設置
	民間型	Ss 立地／郊外住宅地 ・新築戸建(団体所有、自力建設) ・母屋(居間・事務室)、離れ(食堂)、デッキ広場で構成	Ys 立地／郊外住宅地 ・築60年以上の旧町家(2階建)を賃貸転用 ・内部を改修し、事務室と居間が連続したワンルーム
		M 立地／中心市街地 ・平屋建て民家を賃貸転用 ・事務室とタタミコーナーが連続したワンルーム ・隣の民家を改修し、拡張予定	S 立地／駅前 ・大正時代の旧木造旅館(2階建)を賃貸転用 ・6畳ほどの玄関土間部分を「居場所」に設定 ・間仕切りを開放し、各室をオープンに連続
	広域型	K 立地／郊外住宅地 ・県内最大規模の複合文化施設 ・施設は、文化会館、生涯学習センター、男女共同参画センター、県立図書館によって構成 ・自由に利用できるフリースペース(ふれあいコーナー、文化情報コーナー、中庭)がある	U 立地／駅前 ・駅前再開発ビル ・施設は、商業、公益施設、ホテル、オフィスなどによって構成 ・3階の県民交流センターには自由に利用できるフリースペースがある

注) 近隣型の網掛け部：設定された「居場所」、広域型の網掛け部：アンケート調査対象

利用でき、活動展開の幅が広がるほか、中高生以外の世代と空間を共有することで交流を促すことにもつながっている。

②は、いずれも中高生が気軽に利用しやすいように施設玄関付近のスペースを設定している。公共型3件（Tt, A, Z）は、運営者が行政よりロビー等は無償で借りて運営している。民間型のSは、玄関土間の「居場所」を無料開放ゾーンとし、他の有料ゾーン（子育て支援スペースや談話コーナー等）と区別している。

③のFsは、通常、予約が必要な公民館にあって、公民館の1室を予約なしで自由に利用できる中高生専用の「居場所」として開放している。中高生の利用への配慮を行い、拠点化を促す設定といえるが、運営者が「仲間関係が既にできあがっており、新しい子が入りにくい」と語るように、「居場所」が定着するにつれ、特定の利用者の占有化が強まり、人間関係が閉鎖的になることが懸念される。

5-4-4 施設の諸室構成（表5-10）

設置建物種の異なる6件を対象に、「居場所」が設置された施設の諸室構成の特徴を公共型と民間型に分けて捉える。

1) 公共型（Fs, H, Su）

Fsは、公民館内の1室を「居場所」としているため面積的に狭いが、団体でのイベントや練習を行う際には、館内の会議室やホール等の諸室を利用し、活動展開を図ることができる。

Hは、児童館内に集会・遊戯室、図書・映写室、学習室等がある他、隣接する旧保育所を新たに借り受け、木工室や体育室を開放して中高生の多様なニーズに配慮している。

Suは、大型店舗撤退後の空床を利用しているため、広さは10件中最も広い。市民活動センター内には打合せ機の設えられたふれあいコーナーや会議室、動的な活動も可能な板間スペースがあり、中高生がイベントの打合せやダンス練習等に利用している。

このように、公共型の特徴は、施設規模が民間型より大きく、「居場所」設定部分以外にも設備的に整った複数の諸室を有するため、動的な活動から静的な活動まで活動展開の幅があり、中高生が各々の目的に応じた場所を複数の中から選べる選択利用を可能とする。

2) 民間型（Ys, S, Ss）

Ysは、旧街道沿いに立地する旧町家を利用する。室内は続き間のふすまを取り払い事務室と居間を一体的にし、運営者や他の利用者との交流が生まれるように配慮されている。

Sは、旧木造旅館の玄関土間を「居場所」とし、間仕切りを設けず



写真 5-1 Ys 施設の外観



写真 5-2 S 施設の外観



写真 5-3 Ss 施設の外観

開放的にすることで、出入りする他の運営者や子育て親子との会話など、日常では得難い機会を提供する場となっている。

Ssは、居間と事務室のある母屋、離れの食堂により構成された戸建であり、外部には広いテラスを有する。運営者が「いろんな年代の人たちが集まれる場所がほしかった」と語るように、多世代交流できる居場所づくりを目的につくられている。

このように、民間型の特徴は、小規模な民家などを利用して家庭的な雰囲気づくりを心掛けているため、限られた空間で他者と場所を共有しながら自由に過ごせる複合利用が主となる。しかし、S, Ssの運営者は、「面積が狭い」ことを問題点として挙げており、他事業の際には利用制限を行うなど、運営上の工夫で対応している。

5-4-5 「居場所」の設え（表5-10）

設置建物種の異なる6件を対象に、「居場所」の設えの特徴を公共型と民間型に分けて捉える。

1) 公共型 (Fs, H, Su)

Fsは、室内の備品類には手作り品や寄贈品、団体の所持品などを持ち寄り設えている。壁面には活動予定等が書かれた掲示板があり、団体の活動拠点的性格をもった「居場所」であることがわかる。

Hは、児童館の備品であるドラムやアンプを提供し、体育室内でのバンド練習をサポートしている。

Suは、市民活動支援関連の備品（打合せ机、パソコン、コピー機、情報掲示板等）のほか、「居場所」での活動を支援するため新たに中高生専用ロッカーや倉庫などを提供している。

このように、設えは、比較的整った既存備品を有する公共型の利点を活かし、少ない予算で利用しやすい環境づくりを行っている。しかし、Fs, Suの運営者が「借りているスペースであるため、内装に手を加えることができない」と語るように、公共型の場合、あくまで内装や備品は公共物であるため、設えの自由度が低い点が問題点として挙げられる。

2) 民間型 (Ys, S, Ss)

民間型の場合、建物の所有形態には持家(Ss)と賃貸(Ys, S)がある。

持家のSsは、運営主体が多くの人・金銭的支援を募り、土地探しから建設、運営まで自力で築いた建物で、手作り感を特徴とする。賃貸のYs, Sでも、老朽化した空き家を建物所有者の承諾を得た上で大幅に改修している。このように、運営者が内装まで手を施している点が公共型と異なる。一方、備品をみると、運営資金不足もあり、公

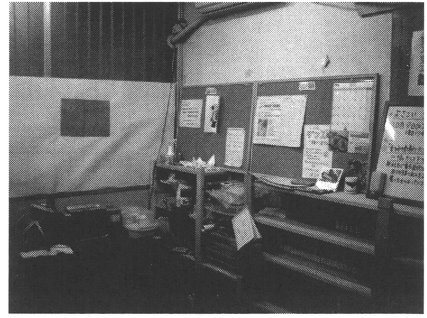


写真 5-4 Fs 施設内の設え

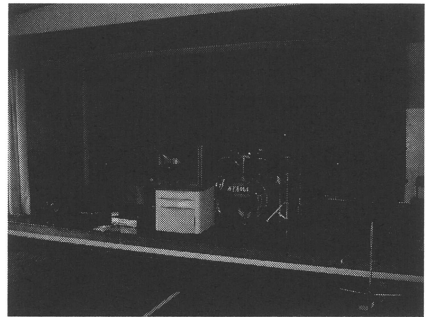


写真 5-5 H 施設内の設え

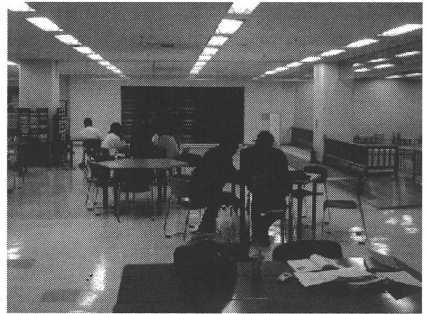


写真 5-6 Su 施設内の設え

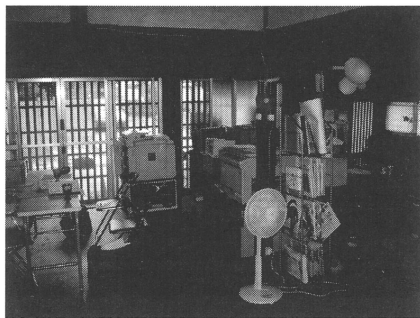


写真 5-7 Ys 施設内の設え

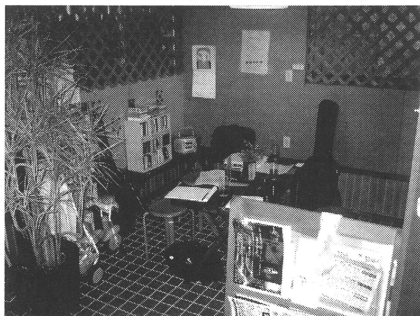


写真 5-8 S 施設内の設え

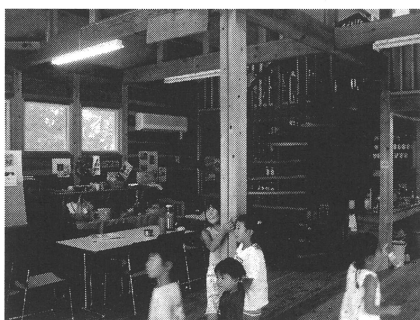


写真 5-9 Ss 施設内の設え

共型ほど充実している訳ではない。Sでは、玄関土間の狭い空間に、テーブルと椅子を1セット設え、本やCD、ギターなど運営者の私物を提供したり、飲食サービスを行うなど、ささやかながら中高生のニーズを汲んだ対応を行っている。また、Ssは、運営方針として様々な人との交流が重要との考えから、敢えて中高生用のスペースや備品を設けていない。

このように、民間型は備品の充実度は公共型より劣るが、内装の変更に関する自由度は、古民家利用の場合、建物所有者の理解も得やすく、比較的高いのが特徴である。

表 5-12 運営者の意見

類型	略称	「居場所」での主な利用内容	中高生の利用状況	「居場所」の運営に関する意見		
		企画活動		問題点	留意点	今後の展望
公共型	Su	・イベント打合せ、練習	・イベントなどの企画活動では、多少遅くても中高生は来る ・中高生は場所ではなく、人や活動内容を選んでいる ・利用者が固定化している（10～20人程度が随時利用）	・立地上、中高生の立ち寄りかほとんどない ・公共施設であるため空間に手を加えることができない ・元は大型店舗のため意がない ・音楽を大きく鳴らせない	・中高生に専用のロッカーを用意している	・いろいろな「居場所」と連携をとっていきたい ・イベント利用だけでなく、ふらっと立ち寄れる「居場所」にしたい
		・イベント（バンド演奏会、ファッションショー）等				
	Fs	・会話・勉強 ・イベント打合せ、練習	・仲間関係が既に出来上がっているため、新しい子が入りづらい（10人以下/日） ・利用者は主に市内在住の団体会員（メンバー100名） ・集団の活動では、近隣のSu施設や公園を使い分けている	・建物内の目立たない位置にあるため気軽に入れない ・交通手段に限られるため、日常的には近くの子しか来ない ・何かするには狭すぎる ・市から借りているスペースなので置けるものが限られている	・常に開放している ・中高生を呼ぶためにある程度活動目的を与えている ・仕事で余った菓子パンを差入れに置いている	・地域の中には多くの「居場所」が必要
		・イベント（地域祭り）等				
	Tt	・会話、勉強、読書	・利用者が固定化している（数人程度/日、イベント時には数十人参加） ・運営者が常にいるわけではないので、中高生が自由に利用している	・当初は何も規制しなかったがマナーが悪く、飲食を禁止した ・学校からいい場所とは思われない	・活動によっては隣の会議室を利用している ・地域への広報活動を行っている	・中高生が主体的に地域に貢献できるような企画をしていきたい
		・編物教室、福祉講座、イベント（手品、卓球大会）等				
	Z	・会話、勉強、パソコン	・利用者が固定化している（10人以下/日）	・大人がイベントを企画しても子どもの考えとは違う ・親の理解が薄い	・常に開放している ・中高生を干渉しない ・学校へ広報活動を行っている	・ここに来てもらうきっかけづくりをしていきたい ・中高生にまた来たいと思われるようにしたい
		・体験活動				
	H	・勉強、スポーツ、バンド練習、工作	・勉強の部屋など活動に合わせて空間を使い分けている ・利用者が固定化している	・イベントが単発的で継続した利用につながらない	・建物のどの空間も自由に使えるようにしている ・普段から中高生の生活相談などに応えるようにしている	・プログラムに頼るのではなく、気軽に利用してもらえる「居場所」にしたい
		・工作教室、各種講座、イベント（バンド演奏会、祭り）等				
民間型	A	・卓球、読書、ゲーム、パソコン	・町内に高校がないため利用者は主に地元の中中学生である ・利用者は固定化しているが、時々新しい子を連れてくる ・子どもの頃から遊びに来ている子が多い	・施設の場所がわかりにくい ・町内に高校がなく、高校生の利用がない ・中学生は主体的に企画を立てることが少ない	・来る中高生には声をかけている ・挨拶以外は様子を見守り、困ったときに応えてあげる ・中高生のロコミを大事にしている ・学校へ広報活動を行っている	・中高生の意見を取り入れた「居場所」にしていきたい
		・木工陶芸教室、イベント（卓球大会）等				
	Ss	・会話、勉強、子どもの世話、遊び	・中高生は毎日開いていないと利用しない ・中高生は主に夜に利用する ・利用者が固定化している（数人程度/日）	・交通の便が悪い ・面積が狭いため、他事業を行う際には利用制限の必要がある ・運営資金が不足	・大人は指示しないようサポートを心がけている ・開館時間を長くしている ・色んな人がいるのが大切なので、中高生用の備品は用意していない ・住宅地のはずれにあるので、地域に迷惑を掛けずに済んでいる ・学校などに広報活動を行っている	・いろいろな年代の人が集まれる場所にしたい ・ふらっと立ち寄れる場所にしたい ・「居場所」が子どもの心に浸透してほしい
		・キャンプ、各種講座、地域フリーマーケット出店等				
	Ys	・会話、勉強	・古民家はおばあちゃんの家みたいで落ち着くらしい ・企画を開くと集まってくる ・利用者が固定化している（数人程度/日）	・ここを日常的に居場所にしていない中高生が多い ・主体的に活動する中高生が少ない ・運営資金が不足	・入りやすいように玄関を常に開け、道路面の窓ガラスは透明にし、外にも看板を設けている ・色々な事業を行い、多くの人が出入りできるようにしている ・学校などに広報活動を行っている	・無理に活動を勧めるのではなく、日常生活で行き詰まった時にほっとできる「居場所」でありたい ・コンビニの数だけ「居場所」があればいいと思う
		・保育サポーター養成講座、裁縫教室等				
	M	・会話、子どもの世話、遊び	・親以外の大人との良い交流機会となっている ・利用者が固定化している（数人程度/日）	・立地上、ふらっと立ち寄ることがほとんどない ・面積が狭く、活動内容を空間に合わせなければならない ・運営資金が不足	・大人が出しゃばらないようにする ・学校や地域に広報活動を行っている	・「居場所」同士をインターネットでつなげ、互いの長所や短所を補っていききたい ・中高生が過ごしやすい「居場所」を作りたい
		・サークル活動（民舞）、地域学童保育ボランティア等				
	S	・電車待ちの時間つぶし ・漫画、会話、子どもの世話	・企画や興味をもたせるよりも、中高生を惹き付けるものは、人である ・利用者が固定化している（数人程度/日）	・面積が狭い ・運営資金が不足	・中高生と子育て支援の「居場所」を分けて、互いの存在がわかるように開放している ・下足のまま利用できる ・下校時はお腹をすかしているため、飲食物を提供している ・広報活動を行っている	・乳幼児から高齢者まで幅広く集える「居場所」にしたい ・地域の子ども会などと連携したい ・中高生とスタッフの「居場所」として共に育ち合う場とした
		・ボランティア活動（子育て支援）、イベント（祭り）等				

5-5 近隣型の「居場所」の運営特性

近隣型の「居場所」10件の運営者に対するヒアリングをもとに考察する。

5-5-1 運営主体（表 5-11）

運営主体には、NPO 団体の他、市民活動支援団体、ボランティア指導者や行政職員が中心となって組織された団体があり、いずれも、「居場所」の設置以前から地域で青少年育成に取り組んできた経験をもつ。NPO 団体は10件中5件（Ss, Ys, M, S, Z）あり、この内、Z 以外は従来より団体の活動拠点を有し、子育て支援や各種体験事業を行っており、「居場所事業」を契機に新たに中高生層を取り込むことで幅広い世代間交流への展開を図ろうとしている。

NPO 団体以外の任意団体では、中高生に限らず市民活動全般の支援団体（Su）、中高生から成る子ども会等の支援団体（Fs）、地域の青少年指導者らによるボランティア団体（Tt）、青少年行政に携わる市職員が個人的に支援者を募り新たに組織された団体（H, A）がある。

5-5-2 開館日（表 5-11）

原則、土曜を含む週4日以上、かつ、1日3時間以上の開館が設置要件^{注5-3)}であるため、ほぼ日常的に開いている。開館時間帯は中高生の生活時間に配慮し、平日は放課後や塾帰りなどに利用できるよう午後から夕方もしくは夜まで開館し、休日は午前からの開館が多い。公

表 5-11 運営主体と開館日

施設 類型	施設 略称	運営主体	開館時間
近 隣 型	Su	任意団体 (市民活動センター職員を中心に組織)	16:00~19:00 (月、水、金) 13:00~17:00 (土)
	Fs	任意団体 (子ども会支援活動)	15:30~20:00 (火、金) 10:00~15:00 (土)
	Tt	任意団体 (青少年育成指導者会)	15:00~20:00 (水、金) 12:00~20:00 (土、日)
	Z	NPO 法人 (自然体験活動)	15:00~18:00 (月~金) 9:00~12:00 (土)
	H	任意団体 (児童館館長を中心に組織)	15:00~18:00 (月~金) 10:00~13:00 (第一土)
	A	任意団体 (青少年指導専門員を中心に組織)	14:00~17:00 (火、水、木、金) 9:00~17:00 (土)
	Ss	NPO 法人 (子育て支援、各種体験活動)	10:00~21:00 (火、水、木、金、土)
	Ys	NPO 法人 (子育て支援、各種体験活動)	10:00~18:00 (火) 12:00~21:00 (土)
	M	NPO 法人 (子育て支援、各種体験活動)	15:00~18:00 (月、火、金) 15:00~21:00 (木)、10:00~18:00 (土)
	S	NPO 法人 (子育て支援、各種体験活動)	16:00~19:00 (月、水、木、金) 10:00~14:00 (土)
広 域 型	K	三重県	9:00~19:00 (月曜休館)
	U	三重県	9:00~22:00 (県民交流センター：無休)

共型では、市民活動センターの職員が「居場所」の運営を兼務する Su は、毎日、センターが開館する 10 時から 22 時までの長時間、中高生に開放している。また、児童館館長が運営を兼務する H は、従来の夕方 5 時までの利用を 6 時頃まで延長し、中高生の利用に対応している。一方、Fs, Tt は、個人が実質的に運営しており、仕事上の都合などで常駐できず、開館日が週 3 日程度と少ない。

民間型では、運営団体の事務所兼活動拠点とする Ss は、平日の幅広い時間帯を設定しており、開館時間外でも、少なくとも一人はスタッフが常駐しているため、いつ中高生が訪れても受け入れ可能な柔軟な運営がなされている。

5-5-3 企画活動（表 5-12）

中高生に対する日常的な居場所の提供だけでなく、ほとんどの施設で中高生主体の企画活動を年に数回行っている。

NPO 団体の施設（Ss, Ys, M, S）は、各種体験事業の経験を活かし、野外活動やボランティア、サークル活動などを通じた異世代交流の中から社会性を身につける活動を主にサポートしている。一方、市民活動や子ども会等を支援する団体の施設（Su, Fs）は、中高生が祭りなどのイベントを主催し、仲間意識や帰属感を育む活動を主にサポートしている。また、地域で青少年育成に取り組む行政職員やボランティアを中心とする施設（Tt, H, A）は、「居場所」とする公民館や児童館等の諸室を活用した各種講座を通して、自己実現へのきっかけづくりを主にサポートしている。

このように、日常的な場所の提供サービスの他に、異世代交流、仲間意識の醸成、自己実現のきっかけづくりなどを目的に、運営主体の特色を活かした非日常的な企画活動が実施されている。

5-5-4 運営者の役割（表 5-12）

運営者は、「大人は指示しないようサポートを心掛ける」（Ss）や、「挨拶する以外は様子を見守り、困ったときに応えてあげる」（A）と語るように、中高生の主体性を尊重し、思春期特有の心理にも配慮するため、「居場所」内では中高生を見守る姿勢が窺える。

また、「中高生は場所ではなく、人や活動内容を選んでいる」（Su）、「中高生とスタッフの「居場所」として共に育ち合う場としたい」（S）と運営者が語るように、「居場所」が単なる場所提供だけでなく、関わりの場として機能するために、運営者や他世代の存在が重要であると考えている。

このように、運営者は、中高生が気軽に悩みなどを話せる相談相手

や、温かく見守り安心感を与える裏方的存在、また利用者同士や他世代との関わりをつなげ活動展開をサポートする媒介的立場など、様々な役割を担っている。

5-5-5 広報活動（表 5-12）

ほとんどの施設（7/10 件）で、広報活動を行っている。「居場所」の開設時には、いずれも運営者が以前から馴染みの中高生を中心に声掛けを行い、次第に口コミで友人を連れてくるようになった経緯がある。しかし、「親の理解が薄い」（Z）や「学校から良い場所とは思われていない」（Tt）と運営者が語るように、「居場所」は、一部の人から不良の溜まり場のようにみられており、そのことが利用の障壁にもなっているため、運営者は、学校説明や地域交流により保護者や学校の理解を得て施設の認知度を高め、利用者が固定化している現状を克服する必要性を感じている。

5-5-6 「居場所」間の連携（表 5-12）

運営者は「いろいろな「居場所」と連携をとっていきたい」（Su）、「地域の中には多くの「居場所」が必要」（Fs）などと語るように、地域に中高生の「居場所」が少ないと認識しており、中高生のニーズに対応するには、個々の取組では限界があり、施設間の連携を望んでいることがわかる。また、Fs と Su でみられた機能的な補完関係だけでなく、「「居場所」同士をインターネットでつなげ、互いの長所や短所を補っていききたい」（M）と語るように、「居場所」相互の情報交換を求めている。

5-5-7 運営資金（表 5-12）

各施設は、中高生に無料開放するため、補助事業として三重県から支給される補助金（20 万円）を元手に運営している。用途は、図書、家具設備、講師料、イベント費用などである。運営者が運営資金不足を問題点として挙げる施設は 10 件中 4 件（Ss, Ys, M, S）であり、いずれも民間型である。公共型は、公共施設を行政から無償で借り受け、備品等も利用でき、運営者も施設職員やボランティアが主に担っているため、その分、補助金を企画活動等に充当できるのに対し、民間型は、運営主体となる NPO 団体の財政基盤が、支援者からの会費、各種事業の参加費や利用料、行政からの助成・委託費等により築かれているため、利用料を無料とした「居場所事業」では、活動費、施設維持費、人件費等を補助金以外にも他の事業費から捻出する必要があり、運営資金に苦慮しているものと推察できる。

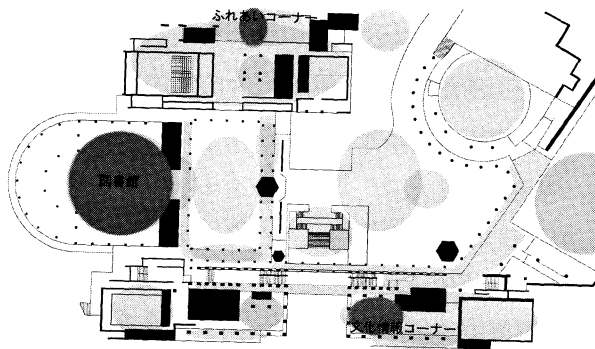


図 5-1 良く居る場所 (K 施設) S=1/3000

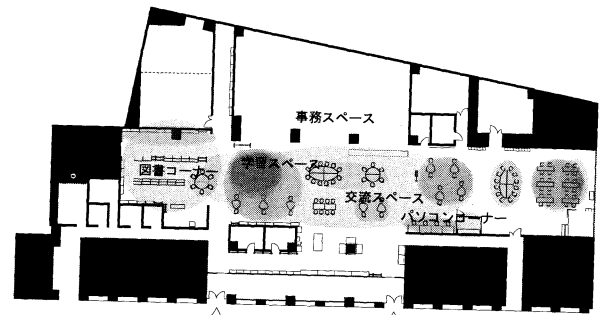


図 5-2 良く居る場所 (U 施設) S=1/800

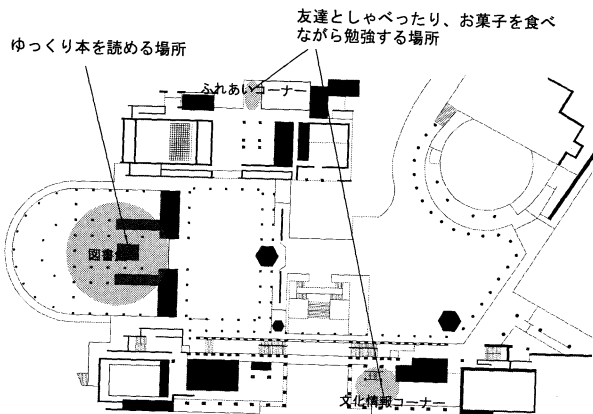


図 5-3 良く居る場所 (K 施設、高校生 - 女、17 歳)

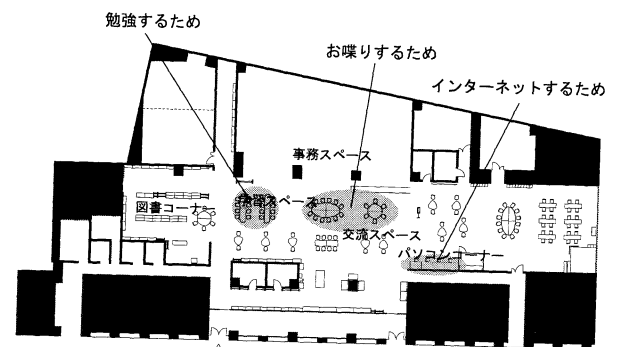


図 5-4 良く居る場所 (U 施設、高校生 - 男、18 歳)

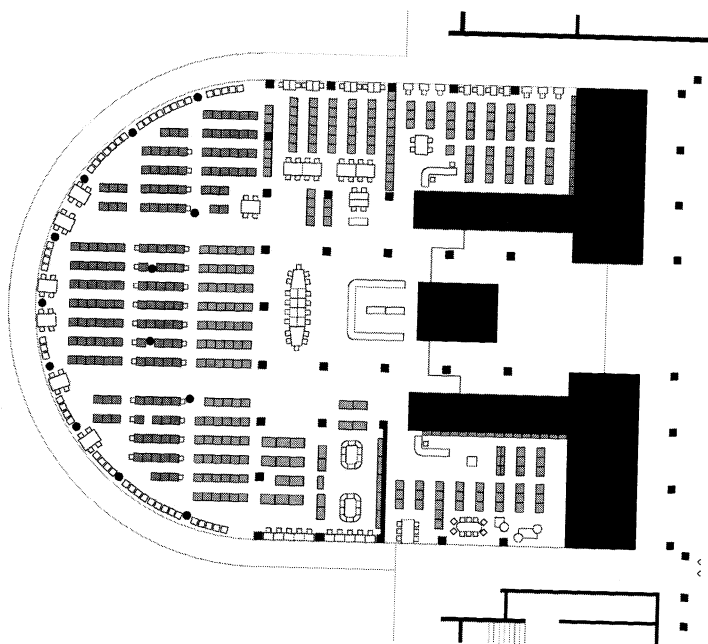


図 5-5 図書館レイアウト (K 施設) S=1/800

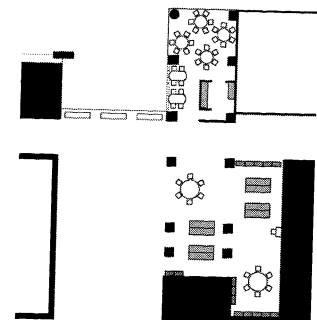


図 5-6 ふれあいコーナーレイアウト (K 施設) S=1/800

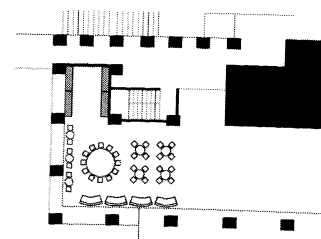


図 5-7 文化情報コーナーレイアウト (K 施設) S=1/800

5-6 広域型の「居場所」の空間・運営特性

5-6-1 空間特性

図 5-1, 5-2 は、K 施設、U 施設の中高生へのアンケートにおいて、「居心地が良いと思う場所、あるいは、良く居る場所」の回答の分布状況を示したものである（分布図が濃いほど回答が多い）。

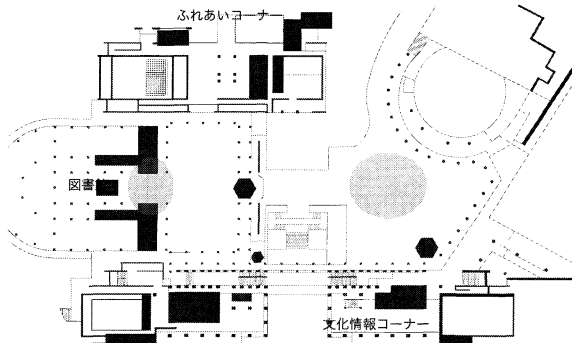
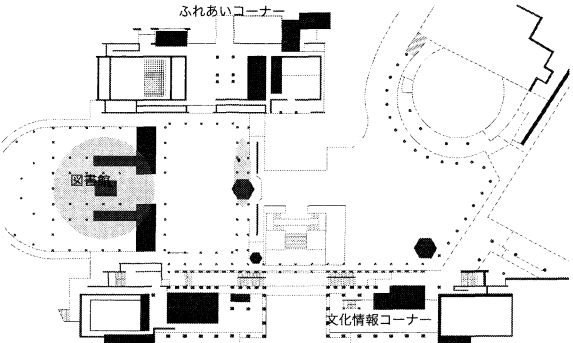
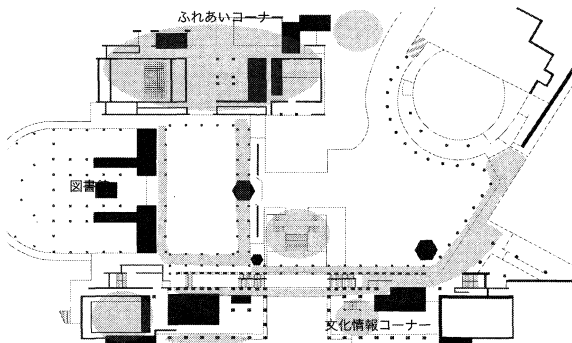
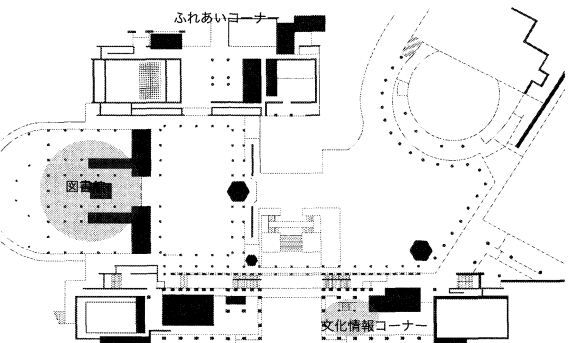
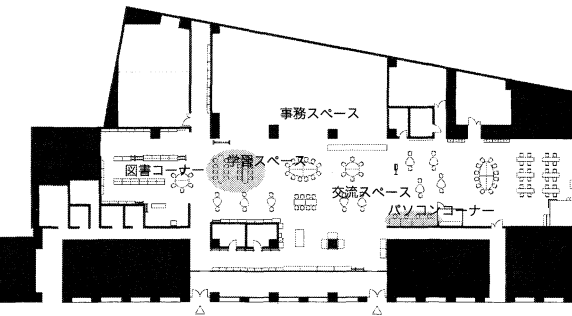
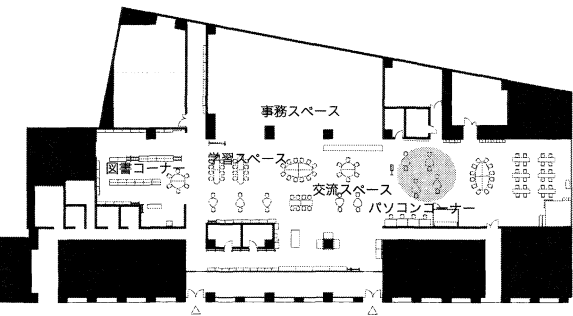
K 施設の場合、図書館や文化情報コーナー、ふれあいコーナーといった諸室部分が濃くなっており、K 施設の中でもこれらの場所が中高生に良く利用されている居場所であるといえる。この他、図書館前の中庭や文化情報コーナーのテラス、ホール前の内部と外部の境界など、様々な場所が回答されている。図 5-3 は、K 施設の特徴的な中高生の回答を表した図であるが、読書する場所と友達と会話する場所など、目的に応じて場所を使い分けながら利用していることがわかる。

U 施設では、駅前立地という特性から不特定多数が利用するため、高齢者が新聞を読んだり、学生が勉強したりするなどの個人的な利用から、数人グループの打合せ、仮設のパーティションを用いて会議を行うなど、市民活動に限らず多様な利用が想定され、利用上、支障の出ない適度な間隔で2人用から12人用まで多様なテーブルが設えられている。学生の利用では、学習スペースが最も濃くなっている。この学習スペースは、中高生以外の利用者の支障とならないように学生が長時間利用できるように設定されている。その設えは8人掛けのテーブルが2つ、2人掛けのテーブルが3つあるが、ピーク時には、座席が全て埋まる場面も見られた。

属性別には、中学生は主にパソコンコーナー付近を、高校生は学習コーナーを居心地の良い場所として選択している傾向にある。図 5-4 は、U 施設の特徴的な中高生の回答を表した図である。オープンな一体的空間の中で、多様な家具が設えられており、友達と会話する場所や勉強する場所、インターネットをする場所など、その場の状況や気分に応じて思い思いに利用していることがわかる。

表 5-13 に両施設の良く居る場所の回答例を示す。

表 5-13 良く居る場所の例 (K 施設、U 施設)

<p>K 施設、高校生 - 男、16 歳</p> 	<p>K 施設、高校生 - 男、18 歳</p> 
<p>図書は、やっぱり集中して、一人で勉強できるからとても便利な場所。中庭は、たまにフリーマーケットとかをやっているから、たまに行く場所。</p> <p>K 施設、高校生 - 女、18 歳</p> 	<p>図書館で静かに学習し、その疲れをテラスで息抜きしている。</p> <p>K 施設、中学生 - 女、14 歳</p> 
<p>自分の中での散歩するコースだから。勉強と遊ぶ場所を分けながら使っている。</p> <p>U 施設、高校生 - 女、17 歳</p> 	<p>図書館の建物は、2,4 階が気に入っている。4 階は、すごく勉強しやすい場所。文化情報コーナーは、売店もあって、過ごすのに最適な場所。</p> <p>U 施設、高校生 - 女、17 歳</p> 
<p>学習スペースでは、友達と勉強ができて、暇なときや休憩の時に、いつでもパソコンができる。</p>	<p>誰にも迷惑をかけずに、友達とおしゃべりができたり、ご飯を食べたりできるから。また、気分転換するのに最適な場所。</p>

5-6-2 運営特性

表 5-14 は、各施設を利用する中高生の運営上の要求に関する回答割合を示したものである。

広域型はK施設・U施設ともに、「誰にも干渉されずに自由にいられる場所を提供してくれること」が7割を超えている。また、「いろいろな人たちと接点を持てるようにしてくれること」は近隣型より低くなっている。特にK施設で8%と低い。このことから、利用者は自由に思い思いに過ごせる場所の提供を求めており、必ずしも他者との交流のきっかけを提供するサービスは求めていないことが分かる。その一方で、不特定多数が集まる施設特性から、自分たちの活動を発表する場所や、新しい知識や情報などの提供を求めており、各自の活動目的に有用となる支援を期待していることがうかがえる。

この点に関し、U施設では運営上、インターネットサービスや市民活動に関する様々な情報提供のほか、この場所で積極的に交流イベントなどを開催し、中高生に対して市民活動等に興味をもたせるきっかけづくりを行っている。

表 5-14 利用施設に対する運営上の要求

利用施設への要求	広域型		近隣型 (公共)	近隣型 (民間)
	K施設 n=76	U施設 n=62	n=40	n=39
誰にも干渉されずに自由にいられる場所を提供してくれること	78%	71%	18%	36%
自分たちの活動などを発表することができる場所を提供してくれること	25%	5%	33%	13%
いろいろな人と接点を持てるようにしてくれること	8%	19%	23%	39%
参加できるイベントや催し物などの紹介や企画をしてくれること	18%	2%	10%	23%
新しい知識や情報などを提供してくれること	20%	26%	20%	10%
職場（学校）や他では得られない地域や社会の情報を発信してくれること	4%	8%	20%	28%
悩みや相談事を聞いてくれること	0%	5%	10%	10%
自分たちのやりたいことをサポートしてくれること	18%	19%	35%	21%
その他	5%	19%	0%	0%
不明	0%	2%	10%	8%

5-7 「居場所」の成立条件

5-7-1 近隣型の「居場所」の成立条件

これまでの分析をふまえ、近隣型の「居場所」の成立条件について立地・空間、運営面から整理した（表5-15）。公共型と民間型では、諸室構成や設え、運営形態などが異なり、利用状況にも影響しているため、各特性をふまえた施設整備が必要である。

表5-15 近隣型の「居場所」の成立条件

項目	成立条件
立地・空間	アクセス ・交通アクセスや施設の視認性に配慮し、中高生の日常生活動線付近（自宅や学校、駅周辺など）に立地させる必要がある（非日常的な目的性の高い活動を主に行う場合は、その限りでない）。
	周辺環境 ・中高生は自分にあった場所を地域の中で選択しており、周辺環境が地域における「居場所」の存在意義や活動展開の幅に影響していることから、施設の立地する地域の施設整備状況をふまえ、有すべき役割、機能を検討する必要がある。 ・地域との良好な関係を築くために、住民に馴染みのある建物を選定するなどの配慮が必要である。
	居場所設定 ・「居場所」の設定方法（施設全体、施設の一部（共用）、施設の一部（専用））は、中高生の活動展開、同世代や他世代との交流、施設への入りやすさ、等を考慮して設定する必要がある。
運営	諸室構成・設え ・公共型は、広さ、設備が充実した複数諸室における選択利用が可能な特徴を活かして、能動的な活動要求に応える必要がある。 ・民間型は、民家など小規模空間における複合利用が可能な特徴を活かして、家庭的な雰囲気づくりなど精神的な安定をもたらす受動的な要求に応える必要がある。 ・少ない予算で工夫しながら中高生の利用しやすい環境づくりを行う必要がある。 ・中高生専用スペースやロッカー等、活動の拠点化の支援が必要である。
	運営主体 ・NPO団体、市民活動支援団体、ボランティアや行政職員など、「居場所」の運営には、少なからず地域で中高生の育成に取り組んできた経験が求められる。
	開館日時 ・中高生の生活時間に配慮し、平日の放課後や休日に利用できる必要がある。 ・公共型では施設の開館時間の延長、民間型では開館時間外の受け入れがみられたように、開館日時の設定において安定的で柔軟な運営を行うには、個人の運営者に頼るのでは限界があるため、組織的な運営が必要である。
	企画活動 ・「居場所」での企画活動が中高生を引きつける要因にもなっていることから、中高生の主体的活動や異世代交流、仲間意識の醸成等を促す運営主体の特色を活かした活動支援が必要である。
	運営者 ・「居場所」が単なる場所提供だけでなく、人と人との関わりの場となるためには、相談相手や、安心感を与える裏方的存在、人や活動の媒介的立場など、様々な役割を担う運営者が必要である。
	広報 ・利用者が固定化する現状をふまえ、新たな利用者を開拓し、施設利用の活性化が図れるよう、保護者や学校の理解を得るための学校説明や地域交流等の広報活動を行い、施設の認知度を高める必要がある。
	連携 ・中高生の多様なニーズに対応するため、「居場所」間の機能的な補完関係の確立や情報交流等の連携を図り、相互利用を活性化させる必要がある。
	資金 ・利用料は施設選択上の基礎的要因であるため「居場所」部分は無料とする。 ・運営資金は補助金への依存度が高く、中高生に費用負担を求めることは利用を阻害する可能性があるため、継続的な財政的支援が必要である。

5-7-2 広域型の「居場所」の成立条件

これまでの分析をふまえ、広域型の「居場所」の成立条件について立地・空間、運営面から整理した（表 5-16）。広域型（K：郊外）と広域型（U：駅前）では、利用状況が異なるため、各特性をふまえた施設整備が必要である。

表 5-16 広域型の「居場所」の成立条件

項目	成立条件
立地・空間	アクセス ・広域型（K：郊外）であっても徒歩・自転車圏内の利用が主であるように、交通アクセスに配慮し、中高生の日常生活動線付近（自宅や学校、駅周辺など）に立地させる必要がある。 ・広域型（U：駅前）のように、利用のバリアを引くため、商業施設等との複合化などにより、気軽に立ち寄れるようにする。
	周辺環境 ・施設内の不特定多数が利用できるコモンスペースを中心に「居場所」として開放する。
	居場所設定 ・広域型は近隣型より施設規模も大きく、一人で過ごす割合も高く、中高生だけでなく不特定多数の利用があり匿名性への要求もみられることから、他者との距離感が確保でき、場所を選択できるようにする必要がある。
	諸室構成 ・広域型（K：郊外）は、勉強など目的性が高い利用を考慮し、個人の活動に集中できるスペースを用意する。 ・広域型（U：駅前）は、個人の勉強だけでなく、仲間との飲食、会話、時間つぶしなど多目的な利用を考慮し、滞在可能な多様な家具等を設える。
運営	設置 ・広域型（K：郊外）は指定管理者、広域型（U：駅前）は行政と市民からなる運営委員会により運営されているように、利用者のニーズをふまえた柔軟な運営を可能にする組織が求められる。
	運営主体 ・中高生の生活時間に配慮し、平日の放課後や休日に利用できる必要がある。 ・特に近隣型より長時間利用のニーズが高いこと、また、中高生以外の不特定多数が利用するため、いつ来てもいつ帰っても良いように開館時間に幅をもたせる必要がある。
	開館日時 ・広域型では特にプログラムが用意されておらず、そのことが個人の主体的な利用を可能にしていることから、あくまで場所提供サービスを主とする。加えて、個人の活動の目的にあった活動支援（知識・情報・発表機会などの提供）を行うことが期待されている。
	企画活動 ・広域型（K：郊外）は、目的性の高い利用を主とするため、目的外の利用に対して一定の制限を設ける。 ・広域型（U：駅前）は、多目的な利用に応えるため、飲食を可能にするなど利用制限を緩和することが求められる。ただし、中高生が場所を独占し、他の利用者の妨げにならないような運営が求められる。
	運営者 ・場所提供を主とするため、運営者は裏方的存在として干渉せず、利用者の自主性を尊重するように心掛ける。
	広報 ・公共施設であるため施設の認知度は高く、保護者や学校の理解が得やすいため、積極的な広報活動は求められない。
	連携 ・中高生の多様なニーズに対応するため、「居場所」間の機能的な補完関係の確立や情報交流等の連携を図り、相互利用を活性化させる必要がある。
資金	・利用料は施設選択上の基礎的要因であるため「居場所」部分は無料とする。

5-8 小括

本章では、居場所づくりの取組がなされている三重県内の施設及び中高生を取り上げ、施設の空間特性や施設での過ごし方、他者との人間関係、運営形態などから、「居場所」の成立条件を考察した。以下に、その主な結果を示す。

- 1) 一般の中高生の生活実態調査では、身近な地域の公共施設が十分利用されず、商業娯楽施設が中心となっている。
- 2) 中高生が施設を選択する際、立地の良さや無料であることが基礎的要因となっている。
- 3) 近隣型は、他者と親密な関係を形成できる施設として選択され、広域型は、人間関係よりも個人の利用目的を優先する施設として選択される傾向にある。
- 4) 近隣型（公共）は、目的を共有した仲間と一緒に利用できる施設、近隣型（民間）は、特定の利用目的をもたず、雰囲気を楽しむながら仲間と過ごせる施設として選択される傾向にある。
- 5) 広域型（K：郊外）は「休日利用」「特定目的利用」、広域型（U：駅前）は「ついで利用」「多目的利用」が多く、立地条件の違いが表れている。
- 6) 公共型は、施設規模が民間型より大きく、中高生が各々の目的に応じた場所を複数の中から選べる選択利用が主となっている。
- 7) 民間型は、家庭的な雰囲気づくりを心掛け、限られた空間で他者と場所を共有しながら自由に過ごせる複合利用が主となっている。
- 8) 公共型の設えは、比較的整った既存備品を活かし、少ない予算で利用しやすい環境づくりを行っている。
- 9) 民間型の設えは、備品の充実度では公共型より劣るが、内装の変更に関する自由度が比較的高い。
- 10) 居場所の運営では、運営体制、開館日時の設定、利用者の固定化、施設間の連携、運営資金などの面で課題を抱えている。

以上のように、中高生の居場所づくりでは、施設規模、諸室構成や設え、運営者の存在と関わり方、プログラムの有無といった運営形態などが他者との親密度に影響を及ぼしており、そのことが中高生の居場所選択にも影響していることがわかった。近隣型（公共）、近隣型（民間）、広域型（K：郊外）、広域型（U：駅前）の特徴の違いにみられるように、公共施設と民間施設、近隣型と広域型の特性の違いを考慮しながら、利用者が選択可能な多様な「居場所」を地域の中で提供していく必要がある。また、地域には多様な居場所があることが望まし

いことから、施設間の連携が必要である。なお、タイプ別の計画的要件及びタイプ間の連携については、6章において、4章の分析結果と共に考察することとする。

また、施設計画上、居場所を設置する場合、必ずしも建物を新設する必要はない。むしろ、地域住民に少なからず認知されている既存ストックを有効に活用していくことが現実的である。居場所として、思い思いに長時間過ごせるようにするには、多様な活動に応える必要がある。しかし、既存施設において多様な空間を用意することには限界があるため、公民館や集会所、学校といった従来の固定的な枠組みに縛られず、柔軟な空間づくりを行う必要がある。運営上も、親密な関わり場とするにはNPO団体や任意団体、ボランティア等による支援が重要となる。

参考文献

- 文5-1) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、学陽書房、2001
- 文5-2) 金丸まや他：中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp.555-558、2000.9、E-1分冊、pp.1097-1098、2001.9
- 文5-3) 定行まり子他：中高生の居場所に関する研究 その1～7、日本建築学会大会梗概集、E-2分冊、pp.29-34、2000.9、E-1分冊、pp.145-146、2001.9、E-1分冊、pp.167-172、2002.8
定行まり子他：児童館における中高生対応についての考察－地域における中高生の居場所に関する研究 その1－、日本建築学会計画系論文集 NO.577、pp.49-55、2004.3
- 文5-4) 田中康裕他：高校生の放課後における場所利用に関する研究
日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp.1095-1096、2001.9、
田中康裕他：地域における子ども・若者にとっての異世代の顔見知りの人との関係－社会的関係からみた地域環境に関する考察－、日本建築学会計画系論文集、NO.595、pp.65-72、2005.9
- 文5-5) 張他：新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について－高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究－、日本建築学会計画系論文集 NO.589、pp.25-32、2005.3
- 文5-6) 小松尚他：地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究 その1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1分冊、pp.1～12、2005.9

本章の関連論文

〈査読論文〉

- 1) 木下誠一・池谷辰仁・今井正次：中高生の居場所の成立条件に関する研究－三重県における居場所づくり事例の分析を通して－、日本建築学会計画系論文集、NO.623、pp.39-46、2008.1

第6章 居場所モデルの構築と計画的要件

第6章 居場所モデルの構築と計画的要件

6-1 居場所モデルの構築

居場所といっても地域には多様な居場所が存在するが、それらは必ずしも居場所として計画的に整備されてきた訳ではなく、自然発生的に利用されるようになったり、あるいは居場所づくりを目的としつつも個々に試行錯誤しながら運営されているのが実情である(5章参照)。また、それぞれの居場所が地域において相互にどのような関係や位置づけにあるのかも明確ではない。居場所に関する既往研究においても、特定の施設種に関する研究はみられるが、多様な居場所を総合的に把握・整理したものは少ない。

よって、ここでは、本論の内容をふまえ、様々な居場所を類型化しながら、空間面と運営面をセットにした居場所モデルを構築し、居場所の計画的要件(空間要件、運営要件)を考察する。居場所モデルの構築は、各タイプの居場所の位置づけや相互関係を示し、地域における居場所の選択肢を明確にすることにより、今後、居場所を計画する際に有効な手段になり得ると考えられ、意義あるものとする。

6-1-1 利用特性からみた居場所の類型化

まず、4章及び5章の成果をふまえ、利用特性の観点から居場所の類型化を試みる。

4章では、高齢者の居場所についてみてきたが、高齢者は居場所の選択にあたり、物理的空間だけでなく、人間関係が影響していることを述べた。その際、他者に対する交流意識の違いから、「組織的交流型」「友人的交流型」「知人的交流型」「非交流型」の4タイプに類型化した。その特徴を再度、以下に簡単に述べておくことにする。

- ・「組織的交流型」は、趣味活動等に関する組織(クラブ・サークル等)に属し、活動などを通して交流をはかる。
- ・「友人的交流型」は、気の合った特定の数人の仲間と共通の趣味や会話等を通して交流をはかり、仲間以外の他者とも活動を通して交友関係を広げている。
- ・「知人的交流型」は、その場に居合わせた不特定の他者と、世間話などの日常的な交流をもつ。お互いのプライバシーに干渉することなく、会話や情報交換などができる顔見知り程度のつきあいが居心地の良さとなっている。
- ・「非交流型」は、他者との交流よりも、自己の目的のために施設を利用する。他者との交流はあくまでその目的に付随した関係にすぎず、自分の時間を過ごすことを大切にしている。

さらに、5章では、中高生の居場所についてみてきたが、中高生の居場所づくりでは、施設規模、諸室構成や設え、運営者の存在と関わり方、プログラムの有無といった運営形態などが他者との親密度に影響を及ぼしており、そのことが中高生の居場所選択にも影響していることを述べた。その際、「近隣型（公共）」、「近隣型（民間）」、「広域型（K：郊外）」、「広域型（U：駅前）」の4タイプに類型化し、特徴を整理した。その特徴を再度、以下に簡単に述べておくことにする。

- ・「近隣型（公共）」は、目的を共有した仲間と一緒に利用できる施設。
- ・「近隣型（民間）」は、特定の利用目的をもたず、雰囲気を楽しむながら仲間と過ごせる施設。
- ・「広域型（K：郊外）」は「休日利用」「目的利用」を主とし、人間関係よりも個人の利用目的を優先する施設。
- ・「広域型（U：駅前）」は「ついで利用」「多目的利用」が多く、個人の利用目的を優先する施設。

これら4章及び5章の結果から、各4タイプの対応関係をみると、居場所の性格を特徴づける評価軸として、「人間関係（不特定／特定）」と「空間（滞在性・高／滞在性・低）」の2軸が想定できる。

「人間関係（不特定／特定）」では、不特定多数が集まる場において、個人もしくは居合わせた他者と最低限の関係をもつ場合と、特定の気のあった仲間が集まり交流を図る場合が想定される。

一方、「空間（滞在性・高／滞在性・低）」では、特定の活動目的に対応した空間の機能性・専門性を重視する場合と、活動目的を特定せず、機能性よりも多様な過ごし方を許容し得る「滞在性」を重視する場合が想定される。そして、これらの2軸をクロスすることによって図6-2のように4タイプに分類でき、4章及び5章で得られた各タイプをそれぞれに位置づけ、整理することができる。そして、2軸の意味を勘案し、それぞれ「自習室型」、「ロビー型」「サロン型」「集会室型」と名付けた。

以下に各タイプの概要を述べる（表6-1）。

・「自習室型」

不特定多数の人が集まって空間を共有するが、他者とのコミュニケーションは希薄で、各自が特定の目的に集中できる場所。高齢者：「非交流型」、中高生：「広域型（K：郊外）」の居場所が該当する。具体的な施設種の例では、図書館（室）、スポーツジム、プールなどが該当するであろう。

・「ロビー型」

不特定の人（個人・グループ）が集まって空間を共有し、各自が思い思いに過ごせる場所。他者とのコミュニケーションは選択的。高齢者：「知人的交流型」、中高生：広域型（U：駅前）の居場所が該当する。具体的な施設種の例では、公共施設のロビー、公園・広場、商業・娯楽施設などが該当するであろう。

・「サロン型」

特定の友人を中心とした他者との交流を期待して気軽に集まり、さらに居合わせる他者との交友関係を広げることでもできる場所。高齢者：「友人的交流型」、中高生：「近隣型（民間）」の居場所が該当する。具体的な施設種の例では、デイサービスセンター、シルバーサロン、子育てサロンなどが該当するであろう。

・「集会室型」

地域活動や趣味活動など目的を共有した特定のメンバーが、特定の日に組織的に集まり、活動を行う場所。高齢者：「組織的交流型」、中高生：「近隣型（公共）」の居場所が該当する。具体的な施設種の例では、公民館、体育館、カルチャーセンターなどが該当するであろう。

なお、これら4タイプ以外に、他者と場所を共有せず、自分だけの空間で自由に過ごせる「個室型」（自宅や施設内の個室）の居場所も想定されるが、本研究では、少なからず他者と場所を共有する地域施設を対象にしているため、「個室型」は参考までに止めておく（表6-1）。

6-1-2 運営特性からみた居場所の類型化

次に、運営特性の観点から、同様に4章及び5章の成果をふまえ、居場所の類型化を試みる。

4章における老人福祉センターの運営では、比較的元気な高齢者の自主性を尊重しているため、職員は裏方に徹し、日常的には見守り・巡回、施設管理等の安全管理を主としている。企画活動では、館主催で年に数回、カラオケ発表会や踊り等のイベント、健康相談、機能回復訓練などを開催している。運営サービスでは、設置目的の主要サービス（入浴・機能回復・レクリエーション等）以外に、和室などでは飲食を可とし、給茶サービスも行っており、利用者がお菓子や弁当などを持参して、くつろいで滞在できるように配慮している。また、団体の活

動拠点としての支援では、運営委員会を開催して利用団体の代表者と意見交換を行い、団体活動の優先日を設定したり、活動に使用する団体所有の物品保管場所を提供するなど、意見を運営に反映するようにしている。また、コミュニティ施設を併設する施設では、各種講座・教室にセンターの利用者も参加できるよう仲介し、活動展開を促す配慮などがみられる。

5章における中高生の居場所づくりでは、なるべく中高生が訪れやすい時間帯を設定し、日常的に過ごせる場所の提供を行っている。また、企画活動では、異世代交流、仲間意識の醸成、自己実現のきっかけづくりなどを目的に、運営主体の特色を活かした中高生主体の活動が年に数回、実施されている。運営者は、中高生の相談相手や、温かく見守る裏方的存在、利用者同士や他世代との関わりをつなげ活動展開をサポートする媒介的立場など、様々な役割を担っており、活動に必要な備品として私物を提供したり、飲食サービスやパン等の差入れを行うなど、ささやかながら中高生が滞在しやすい配慮を行っている。

これらの支援内容をふまえ、前述の利用特性からみた居場所における2軸（人間関係×空間）との関係をみると、運営上の利用者に対する支援として、「交流活動支援」と「利用制限」が想定できる。「交流活動支援」は「人間関係」に関係し、イベントやプログラム等の企画活動や、運営者の働きかけによって、利用者同士や地域住民などと交流したり、利用者の活動が円滑に行えるように支援することである。一方、「利用制限」は「空間（滞在性）」に対応し、利用者の様々な過ごし方を許容しつつ、トラブルが起きないように利用者の行為を規定・制限することで居場所をコントロールすることである。例えば、飲食を可とする場所の設定、団体活動を優先日の設定、利用時間の制限などである。これらの「交流活動支援」の有無と「利用制限」の度合い（限定／自由）によって運営特性が異なることから、これら2軸をクロスすることによって図6-3のように4タイプに分類でき、2軸の意味を勘案し、「個別活動支援型」、「滞在支援型」「交流支援型」「組織活動支援型」と名付けた。その概要は以下の通りである（表6-1）。

・個別活動支援型

各自が主体的に特定の目的に集中できるように支援する。

・滞在支援型

利用者が思い思いにくつろいで滞在できるように支援する。

・交流支援型：

利用者を優しく受け入れ、交友関係を広げられるように支援する。

・組織活動支援型：

共通の目的を持った他者との活動に集中できるように支援する。

なお、居場所におけるこれら4タイプのサービス以外に、居場所にも来れず、自宅で「引きこもり」がちな人々などに対しては、アクセスの改善や、相談窓口の設置、情報機器を用いた間接的なコミュニケーション手段の提供など、外出のきっかけを提供する「外出支援」が別途考えられるが、本研究では、地域施設における運営を対象にしているため、参考までに止めておく（表6-1）。

6-1-3 居場所タイプと居場所運営との関係をふまえた居場所モデル

基本的に先に挙げた各図（図6-2、図6-3）の座標軸である、「人間関係」と「交流活動支援」は他者との人間関係の構築という点で、また、「空間」と「利用制限」は活動目的への適合という点で密接な関係にあると考えられるため、主として各図の各象限が対応関係にあるといえる（ただし、それ以外の支援も補足的に考えられる）。そこで、図6-2、図6-3を重ね合わせて示したのが図6-4である。これにより、利用特性と運営特性をセットにして捉えることができ、得られた4つのタイプの関係や位置づけが明確となる。よって、この図式を「居場所モデル」と呼ぶこととする。

なお、居場所モデルの4つのタイプに関連する代表的な既往研究をみると、「自習室型」では、中井ら^{文2-7)}による図書館の居場所形成に関する研究、「ロビー型」では、小松ら^{文2-5)}による病院外来待合等のコモンスペースに関する研究、「サロン型」では、田中ら^{文2-9)}による主が運営するコミュニティ・カフェの研究、「集会室型」では、定行ら^{文2-25)}による児童館の中高生対応に関する研究などが概ね該当するであろう。しかし、個々のモデルに相当する特定の施設種に関する研究はみられるが、多様な居場所を総合的に把握・整理したものは少ない。その中で、橘は、社会的関係から場のタイプを4分類しており^{注6-1)}、本研究もそこから示唆を得ているが、本研究ではさらに空間や運営条件を考慮した上で軸を設定して組み立て直し、モデル化している点が特徴的である。多様な居場所を総合的に把握し、空間面と運営面をセットにして捉えた居場所モデルは、地域における居場所の選択枝や位置づけを明確にし、居場所を計画する際の有効な手段になり得ると考える。まさに、この点が本研究の意義に他ならない。

また、居場所モデルは、既存の施設整備でみられる個人的か組織的グループかの二極だけでは不十分であることも示している。3章でみたように個人的利用の代表的施設として図書館（施設像：「個人的」の値が高い）、組織的グループ利用の代表的施設として公民館（施設像：「社会的」の値が高い）があるが、その他の施設像である「気軽さ」「安らぎ感」「解放感」をもたらす施設は、専ら民間施設が主となっている。

注6-1) 橘は社会的関係性の許容性からみた場のタイプとして、「Weの場」「Theyの場」「WeとTheyの複合」「Youの場」の4タイプに分類している。

（橘弘志：市街地と団地に展開される行動環境の比較（高橋鷹志・長澤泰・鈴木毅 編：環境と行動 第4章）、朝倉書店、2008）

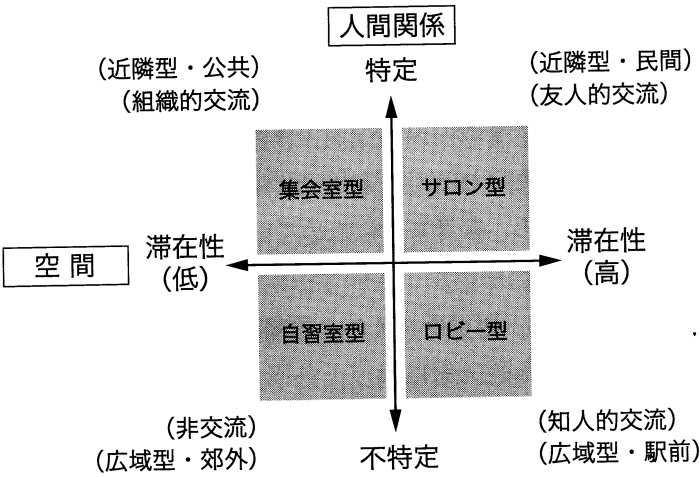


図 6-2 利用特性からみた居場所の類型

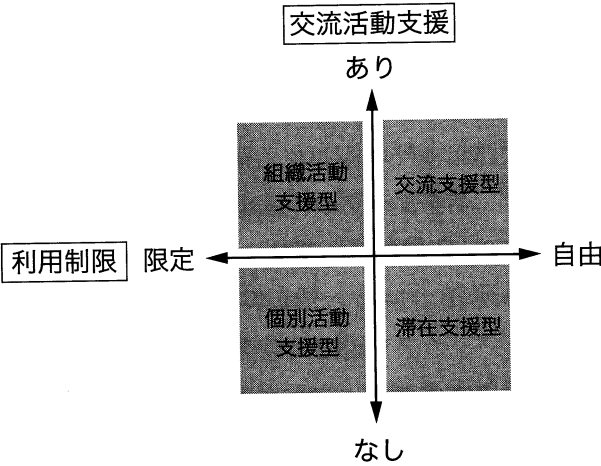


図 6-3 運営特性からみた居場所の類型

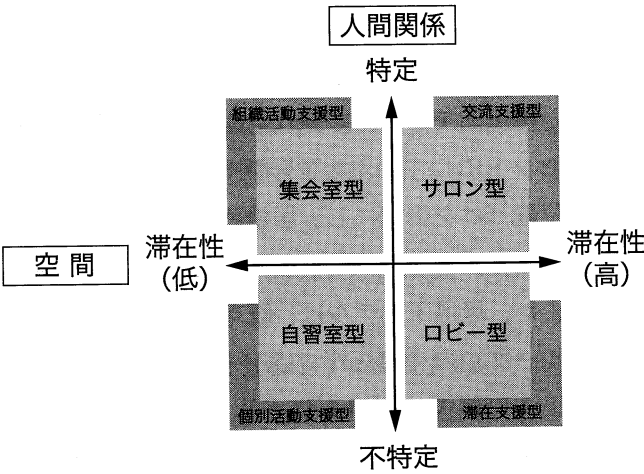


図 6-4 居場所モデル

特に、従来の公共施設整備において「ロビー型」の居場所は、施設機能、利用目的が曖昧であるが故に、単なる目的空間の付属空間にすぎず、施設計画上の位置づけや扱いが疎かであり、「サロン型」は、運営者によるきめ細かい柔軟な運営が求められるため、民間頼みとなっていることは否めない。今後、個人と組織的グループの中間的な関係構築の場として、必ずしも機能的な目的が明確ではなくとも地域住民に外出機会を提供し、滞在でき、人々と交流できる受け皿として、滞在性の高い「ロビー型」、「サロン型」の居場所を重点的に整備していく必要があると考える。例えば、学校という帰属組織を有する青少年には、自宅・学校以外でいつでも気軽に利用でき、仲間と集える「ロビー型」、帰属組織をもたない高齢者には交流のきっかけをもち「サロン型」の充実が期待されるであろう。特に、民間施設に限りがあり、公的サービスとして居場所の整備が求められる地方都市において重要となる。

6-1-4 居場所モデルと計画的要件

居場所モデルの各タイプの特性をふまえ、計画的要件を空間要件と運営要件に分けて整理したのが、表 6-1 である。

「自習室型」は、個人的利用が主であるため、個人のプライバシーやパーソナルスペースに配慮した空間とし、各自が主体的に特定の目的に集中できるよう支援する必要がある。

「ロビー型」は、個人でもグループでも気軽に居られ、目的的な利用だけでなく、休憩や気分転換など多目的な要求に応える選択自由度の高い滞在空間とし、利用者が思い思いにくつろいで滞在できるよう支援する必要がある。

「サロン型」は、他者との和やかな対話を生むような家庭的で落ち着いた空間とし、利用者を優しく受入れ、交友関係を広げるための支援が求められる。また、他者との交流を支援する運営者の存在が重要となる。

「集会室型」は、グループや団体の活動拠点として、活動要求に対応する施設機能の充実をはかった空間とし、共通の目的を持った他者との活動に集中できるよう支援する必要がある。

また、3章の地域施設の施設像の分析においてみたように、同じ施設種でも人によって異なる施設像を抱いたり、逆に、異なる施設種であっても同様の施設を抱いたりすることから、居場所の計画においては、既存の目的化された機能別の施設種に縛られるのではなく、利用者の過ごし方をふまえた居場所モデルの観点から、機能（施設種）を横断的に捉え、柔軟に考えることが適切であると考えられる。つまり、どういう目的機能をもった施設をつくるかではなく、どういう場（居場

表 6-1 居場所モデルと計画的要件

矢印：コミュニケーション 円：親密な関係

類型	個室型	自習室型	ロビー型	サロン型	集会室型
モデル図					
空間の共有	専用	共用	共用	共用	共用
人間関係	特定	不特定	不特定	特定	特定
空間	滞在性（高）	滞在性（低）	滞在性（高）	滞在性（高）	滞在性（低）
テリトリー の階層性	private (私的な場所)	private (私的な場所)	semi-private (半私的な場所)	semi-public (半公的な場所)	public (公的な場所)
居場所の 特徴	・他者から干渉されず に、自分だけの空間 で一人で過ごせる場 所。	・不特定の人が集まっ て空間を共有するが、 他者との関わりやコ ミュニケーションは 希薄。 ・各自が特定の目的に 集中し、自分の時間 を過ごすことのでき る場所。	・不特定の個人（個人・ グループ）が集まっ て空間を共有し、各 自が思い思いに過ご せる場所 ・必ずしも他者とのコ ミュニケーションは 求められず選択的だ である。居合わせる他 者と世間話程度の軽 い交流も可能であり、 また、会話せずとも 他者の存在が孤独感 を和らげ、安心感を もたらす。	・特定の気の合った人 との交流を期待して 気軽に集まり、さら に居合わせる他者と の交友関係を広げる ことも可能な場所。	・地域活動や趣味活動 など目的を共有した 特定のメンバーが特 定の日に組織的に 集まり、活動を行う 場所。
施設種の 具体例 ※◇印は本 研究で扱っ た 調査対象	・自宅の個室 ・施設内の個室 (病院や福祉施設等) ・ネットカフェの個室 等々	・図書館 (閲覧室・学習室) ・スポーツジム ・学校(図書室) ・プール ◇広域型(K施設) ◇老人福祉センター (図書室) 等々	・公共施設のロビー ・病院の待合 ・公園、広場 ・喫茶店、飲食店 ・商業・娯楽施設 ・コンビニ前スペース ・学校(ワークスペース) ◇広域型(U施設) ◇老人福祉センター (機能回復訓練室) 等々	・自宅の居間 ・デイサービスセンター ・シルバーサロン ・子育てサロン ・学童保育 ・コミュニティカフェ ・学校(保健室) ・ゴルフ場 ◇近隣型(民間) ◇老人福祉センター (和室) 等々	・公民館 ・体育館 ・コミュニティセンター ・カルチャーセンター ・学校(教室・体育館) ・野球場 ◇近隣型(公共) ◇老人福祉センター (教養娯楽室) 等々
空間要件	・壁などで完全に仕切 られた室としての空間。	・他者と場所を共有す るが個人的利用が主 であるため、個人の プライバシーやパー ソナルスペースに配 慮する必要がある。	・個人でもグループで も気軽に居られ、目 的的な利用だけでなく、 休憩や気分転換 など多目的な要求に 応える選択自由度の 高い滞在空間とする。	・個人でもグループで も気軽に居られ、他 者との和やかな対話 を生むような家庭的 で落ち着ける空間と する。	・グループや団体の活 動拠点として、活動 要求に対応した施設 機能の充実をはかる。
運営要件	〈外出支援〉 ・プライバシーを尊重 し、干渉を控える。 ・自宅で「引きこもり」 がちの人々などに対 してはアクセスの改 善や、相談窓口の設 置、情報機器を用い た間接的なコミュニ ケーション手段の提 供など、外出のき っかけを提供する。	〈個別活動支援〉 ・各自が主体的に特定 の目的に集中でき るように支援する。	〈滞在支援〉 ・利用者が思い思いに くつろいで滞在でき るように支援する。	〈交流支援〉 ・利用者を優しく受け 入れ、交友関係を広 げられるように支援 する。 ・他者との交流を支 援する運営者の存在 が重要となる。	〈組織活動支援〉 ・共通の目的を持った 他者との活動に集中 できるように支援す る。
関連する 既往研究	・古賀、高橋：「居居内 に形成する居場所」	・中井、今井他：「図書 館における滞在利用 に関する研究」	・小松、加藤、谷口他： 「病院外来待合に関 する研究」	・鈴木：「街角の居場所」 ・小松：「交流の場」 ・田中：「コミュニティ・ カフェ」	・定行：「児童館におけ る中高生対応」

所タイプ)を生み出すために導入すべき機能は何かというように、機能を手段の一つとして柔軟に捉えることが必要であろう。

6-2 居場所の計画手法

ここでは、居場所モデルの計画的要件をふまえ、居場所を計画する上で有効となり得る具体的な計画手法について考察する。

6-2-1 居場所への立地アクセス (表 6-2)

居場所の立地アクセスについて、本論では、3章において居場所となる地域施設の施設像の一つとして、「気軽さ」を抽出した。4章では、高齢者の利用圏は概ね2kmの範囲であり、主に生活圏内の利用となっていること、また、5章では、中高生は広域型の施設でも徒歩や自転車圏内の利用が多いことから、「居場所」の成立条件として交通アクセスや施設の視認性が大切であることを示した。

以上より、居場所は、利用者が気軽に利用できるように、日常生活動線付近(自宅、学校・職場、駅やバス停、買い物先、病院など)の周辺に立地させることが、すべての居場所タイプに共通して望ましいといえる。ただし、「集会室型」など、非日常的な目的性の高い活動を主に行う場合や、他者との人間関係によっては、遠方の居場所を利用することもあり得るため、活動の目的性や参加者を明確にすることで、立地アクセスの条件を克服することも可能といえる。

また、居場所は、利用者が気軽に居場所に入りやすいように、施設内の居場所部分を入口付近に設け、居場所内の活動の様子が見えるように開放的なつくりにすることが望ましい。特に、「ロビー型」や「サロン型」のように、活動目的を特定せず、機能性よりも多様な過ごし方を許容し得る滞在性を重視し、他者とのコミュニケーションに対して開放的な性格をもつ居場所の場合に望ましい。

さらに、利用者が固定化している居場所が多いことや、居場所の認知度が低いという現状をふまえ、周辺地域住民に認知されるよう、活動情報の発信などの広報活動を行う必要がある。既存施設に居場所を開設する場合には、すでに地域住民に認知され、馴染みのある建物を活用することも有効である。

6-2-2 複数施設の選択を可能にする居場所の配置と連携 (表 6-3)

居場所の配置と連携について、本論では、3章において、施設像に地域差がみられ、地域に不足する施設像をもたらす施設の整備が必要であることを述べた。4章では、高齢者は、同種の居場所タイプといえる複数の老人福祉センターを、交流意識の違いにより選択利用して

表 6-2 居場所の計画手法（居場所の立地アクセス）

手法	アクセス	居場所の認知
居場所のアクセス	<ul style="list-style-type: none"> 利用者が日常的に気軽に立ち寄れるよう、日常生活動線付近（自宅や学校・職場、駅やバス停、買い物先、病院などの周辺）に立地することが望ましい。 非日常的な目的性の高い活動を主に行う場合や、他者との人間関係によっては、その限りではない。 	<ul style="list-style-type: none"> 居場所内の活動の様子が見えるように開放的なつくりにし、入りやすい雰囲気を心掛ける。 地域や関係者への広報活動を通して認知度を高める。 外部には居場所の活動情報を載せた看板や掲示板などを設け、通りすがりの人々の関心を引きつける。 すでに地域住民に認知され、馴染みのある既存の建物（公共施設や空き店舗）を活用することも有効である。 <p>・利用者が気軽に入りやすくなるよう、居場所部分を入口付近に設ける。特に「ロビー型」「サロン型」の場合に望ましい。</p>

表 6-3 居場所の計画手法（居場所の配置と連携）

手法	同種の居場所タイプの連携	異種の居場所タイプの連携
居場所の連携	<ul style="list-style-type: none"> 利用上、老人福祉センターの事例分析でみたように、高齢者といえども利用者は同種タイプの居場所を使い分けている。特定の施設だけの利用は、人間関係が閉鎖的になりかねないため、地域に利用可能な同種の複数の居場所があることが望ましい。 運営上、利用者の主体的な施設選択を支援し、相互利用を活性化するため、他施設の情報提供や斡旋、また休館日をずらすなどの居場所間の連携が求められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 利用上、中高生の居場所の事例分析でみたように、利用者は異種タイプの居場所の中から自分にあった居場所を選択しているため、地域に利用可能な異種の居場所が複数あることが望ましい。 運営上、利用者の多様なニーズに対応するため、他施設との差別化・個性化を図りつつ、機能的な補完関係もたせたり、情報交換を行うなどの居場所間の連携が求められる。

いること、5章では、中高生は異種の居場所タイプといえる施設の中から、自分に合った居場所を選択していることを示した。また、利用者が固定化していること、常連的な利用によって人間関係が閉鎖的になること、多様なニーズに対応する必要があることなどを課題としてあげた。

このように、地域住民の生活は1ヶ所で完結している訳ではなく連続しており、従来より施設計画上のコミュニティの基本単位としてきた地縁的な人間関係に縛られることなく、近隣、広域的な居場所を様々な理由で選択している。また、人々は必ずしも明確な目的をもって活動を行うために場所を選択している訳ではない。したがって、個々の施設だけで受け入れ、利用者のニーズを満足させるのには限界があるため、地域全体として受け皿を用意するために施設間の連携が必要である。つまり、利用者が主体的に自分にあった居場所を選択できるよう、地域内に居場所を複数設置することが必要であり、それらは単独で運営等を考えるのではなく、地域特性や利用者属性などを考慮し、機能上、運営上、連携し、有機的な関係を構築することが望ましい。

連携方法としては、居場所タイプが同じ場合と異なる場合が想定される。同種タイプの場合は、相互利用を活性化するため、他施設の情報提供や幹旋、また休館日をずらすなどの連携が考えられる。また、異種タイプの場合は、他施設との差別化・個性化を図りつつ、利用者の多様なニーズに対応するため、機能的な補完関係もたせたり、情報交換を行うなどの連携が考えられる。

文6-3) 谷口汎邦・天野克也・熊谷昌彦：
複合化の手法（日本建築学会編：地域施設の計画 第20節）、丸善、1995

6-2-3 居場所の複合化

前述の地域内における居場所の連携と同様に、施設内での複数の居場所の連携（複合化）が考えられる。一般に、複合化は機能の異なる施設を組み合わせることで、様々な相乗効果を生み出す手法として採用されるが^{文6-3)}、ここでは機能の観点からではなく、4つの居場所タイプの効果的な複合化について考察する。

居場所タイプの複合化の効果としては、4章で扱った老人福祉センター内において、異なる居場所タイプの諸室を複合化することで、利用者（T施設/76才/女）^{注6-2)}のように、潜在的利用から徐々に人間関係を広げ、活動へと展開し、生きがいを見出すことにつながっていくといった組織化に向けた活動展開が期待できる。逆に、高齢者の場合、年々、健康面や体力面が衰えることは避けられず、利用者（T施設/81才/女^{注6-3)}、S施設/90才/女^{注6-4)}）のように、組織活動への参加が困難になっても、施設内に別の過ごせる場所があることで、施設を継続して利用することが可能となっている。このほか、5章の広

注6-2) 老人福祉センターT施設/76才/女
『3年前に夫が亡くなり、友人から家に居ても駄目だといわれ、ここを紹介してくれた。ここに来たらお風呂があることを知った。ここに来るようになって、足の痛みも無くなった。お風呂に入りに来るにつれ、友人も出来、卓球を始めるようになった。小さい頃に卓球をしたことがあったが、今は見よう見まねでやっている。いろいろと仲間に馬鹿にされたりするので、なにくそと思い頑張って続けている。』

注6-3) 老人福祉センターT施設/81才/女
『以前は踊りや卓球をしていたが、体がえらいのでやめた』

注6-4) 老人福祉センターS施設/90才/女
『以前、ゲートボールや玉突きをしていたが、腰を痛めたのでやめた』

表 6-4 居場所タイプの組合せ

居場所タイプの組合せ		本研究で扱った事例（16 事例）
1	集 + サ	-
2	集 + ロ	・近隣型（公共）：Su、Tt、Z、Fs、A ・広域型：U
3	集 + 自	・近隣型（公共）：H
4	サ + ロ	・近隣型（民間）：S
5	ロ + 自	-
6	集 + サ + ロ	-
7	集 + サ + 自	-
8	集 + ロ + 自	・老人福祉センター：M、T ・広域型：K
9	サ + ロ + 自	-
10	集 + サ + ロ + 自	・老人福祉センター：H、S
備考		〈単独〉近隣型（民間）：Ss、Ys、M

※凡例：集 集会室型 サ サロン型 ロ ロビー型 自 自習室型
※図 4 の対角線上の関係にある「サロン型」と「自習室型」の組み合わせは該当せず

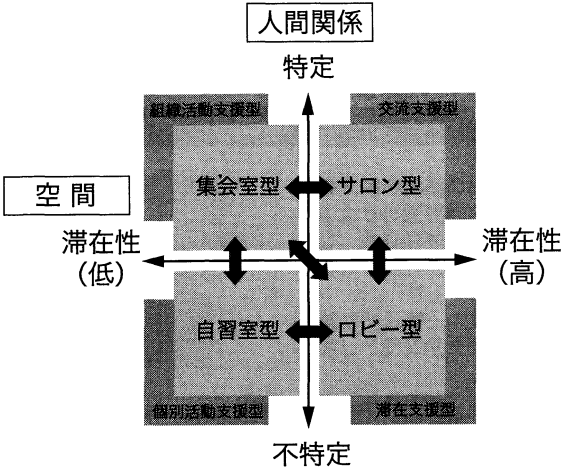


図 6-5 居場所タイプ間の相互関係

表 6-5 居場所の計画手法（居場所タイプの複合化）

類型	自習室型	ロビー型	サロン型	集会室型
	例：図書館	例：商業施設	例：福祉施設	例：公民館
居場所の複合例	<div>〈自習室型〉 ・閲覧室 ・AV コーナー ・学習室 等</div> <div>〈集会室型〉 ・プラウジングコーナー ・カフェ 等</div> <div>〈ロビー型〉 ・自習室型</div> <div>〈サロン型〉 ・集会室型</div>	<div>〈ロビー型〉 ・店舗、売り場 ・フードコート ・休憩コーナー 等</div> <div>〈自習室型〉 ・集会室型</div> <div>〈サロン型〉 ・子育てサロン ・シルバーサロン 等</div>	<div>〈サロン型〉 ・テイルーム ・和室 等</div> <div>〈ロビー型〉 ・自習室型</div> <div>〈集会室型〉 ・会議室 ・ホール 等</div>	<div>〈集会室型〉 ・会議室 ・ホール 等</div> <div>〈サロン型〉 ・ロビー型</div> <div>〈自習室型〉 ・学習室 ・AV コーナー 等</div>
特徴	<ul style="list-style-type: none">・図書館のように、主として図書や資料の閲覧、貸し出しなど、学習目的に利用される自習室型に、ロビー型を複合することにより、子どもから高齢者まで長時間滞在でき、飲食を含め息抜きができる居場所となる。・個人利用を通して世間話をする知人関係に発展するなど、他者との出会いや交流のきっかけが期待できる。・さらにグループ学習室（集会室型）、読書交流会や子育てサロン（サロン型）との複合も考えられる。・博物館、美術館、文化施設など、非日常的利用の施設においても、同様の複合が考えられる。	<ul style="list-style-type: none">・ショッピングセンターなどの商業施設のように、誰もが気軽に訪れ、自由に滞在できるロビー型に、サロン型を複合することにより、子育て親子や高齢者が買い物ついでに立ち寄り、他者との会話、情報交換の場として交友関係を広げることができる。・さらに、自主活動、サークルなどにも発展することを考慮し、集会室型を複合することも考えられる。	<ul style="list-style-type: none">・老人福祉センターなどの福祉施設のように、近隣に住む人々が訪れ、会話を楽しんだり、飲食やプログラムを通して交流を図るサロン型に、集会室型を複合することで、利用者同士や運営者とのふれあい、また趣味講座への参加の中から自然発生的に生まれたサークル活動に対応できる。・交流に対して消極的な人々も来訪しやすくするため、ロビー型、自習室型を複合することが考えられる	<ul style="list-style-type: none">・公民館など特定日時、特定集団による利用を主とした集会室型に、自習室型を複合することで、日常的な個人利用を可能にする。・さらに、ロビーを開放し（ロビー型）、気軽に訪れ、自由に滞在できるようにすることで、気分転換が図れるとともに、他の活動や団体に触れる機会を増し、活動展開や団体への参入を促すことが考えられる。

域型（K：郊外）の図書館利用者が、勉強の合間に場所を移動して友人と雑談し気分転換を図り、長時間の滞在を可能にしているなど、複合化により利用者の人間関係や活動展開の幅が広がり、気分転換をもたらすなどの効果が期待される。

4章及び5章で取り上げた16事例（4章：老人福祉センター4事例、5章：中高生の居場所12事例）をみると、複数の居場所タイプで構成されているのは13事例と多く、単独は3事例のみである。この13事例の複合形態をふまえ、居場所タイプ間の相互関係を矢印で示し、整理したのが図6-5である。先に述べたように人間関係や活動のスムーズな展開を促すには、図中で隣り合う上下左右のタイプと複合化することが望ましいと考えられる。また、気分転換をはかりやすくするには、活動の自由度が高く、幅広く人々を受け入れる開放的な「ロビー型」を複合化することが望ましい。しかし、図中の対角線上の関係にある「サロン型」と「自習室型」では、前者が交流を志向するのに対し、後者は交流を求めない傾向にあり、対照的な性格を有するため、両者のみの組み合わせは効果的ではなく、両者をつなげる役割として、幅広く人々を受け入れる開放的な「ロビー型」を複合させた方が両者の性格の違いを緩和でき、効果的であると思われる。

以上をふまえ、効果的な居場所タイプの組み合わせを整理したのが表6-4である（組み合わせは10通り）。なお、複合化されていない単独の3事例は、主に民家等を活用する比較的小規模で、複合化が困難な居場所である。この場合には、主に前述の施設間連携が課題となるであろう。

具体的な居場所タイプの複合例について整理したのが表6-5である。主たる居場所タイプが「自習室型」の場合、図書館のように、主として図書や資料の閲覧、貸し出しなど、学習目的に利用される「自習室型」に、「ロビー型」を複合することにより、子どもから高齢者まで長時間滞在でき、飲食を含め息抜きができる居場所となる。また、利用を通して他者との出会いや交流のきっかけが期待できる。さらには、グループ学習室（集会室型）、読書交流会や子育てサロン（サロン型）との複合も考えられる。図書館と同様に博物館、美術館、文化施設など、非日常的利用の施設においても、日常的な利用を可能にする「ロビー型」などの複合が考えられるであろう。

主たる居場所タイプが「ロビー型」の場合では、ショッピングセンターなどの商業施設のように、誰もが気軽に訪れ、自由に滞在できる「ロビー型」に、「サロン型」を複合することにより、子育て親子や高齢者が買い物ついでに立ち寄り、他者との会話、情報交換の場として交友関係を広げることができる。さらに、自主活動、サークルなどに

も発展することを考慮し、「集会室型」を複合することも考えられるであろう。

主たる居場所タイプが「サロン型」の場合では、福祉施設のように、近隣に住む人々が訪れ、会話を楽しんだり、飲食やプログラムを通して交流を図る「サロン型」に、「集会室型」を複合することで、利用者同士や運営者とのふれあいを通して自然発生的に生まれたサークル活動などに対応できる。また、交流に対して消極的な人々も来訪しやすくするため、「ロビー型」、「自習室型」を複合することが考えられる。

主たる居場所タイプが「集会室型」の場合では、公民館など特定日時、特定集団による利用を主とした「集会室型」に、「自習室型」を複合することで、日常的な個人利用を可能にする。さらに、ロビーを開放し（ロビー型）、気軽に訪れ、自由に滞在できるようにすることで、気分転換が図れるとともに、他の活動や団体にも触れる機会が増し、活動展開や団体への参入を促すことが期待できる。

6-2-4 居場所の空間と運営

ここでは、居場所となる単位空間の具体的な空間及び運営手法について述べる。空間手法では、人間関係と空間要求に配慮し、家具配置等を設え、運営手法では、他者との交流及び活動要求に配慮し、運営者の役割、利用上のルール、プログラム、設備等を設定する。また、居場所は、同様の空間や設えがあっても、運営の仕方によって性格が異なることから、空間と運営を別々に捉えるのではなく、居場所モデルの特性に応じた空間及び運営手法をワンセットとして計画する必要がある。その居場所タイプ別に単位空間の空間及び運営手法について整理したのが表 6-6 である。

「自習室型」の場合、空間的には、視線が交わらないようなソシオフーガル^{注 6-5)}（離反型・遠心的）な座席配置や、図書館のキャレル（個人閲覧席）のように家具等による仕切りを設け、個人が活動に集中できるようにすることが望ましい。また、運営的には、個別活動支援として、各自が主体的に特定の目的に集中できる環境を確保するため、目的外利用に対する一定の制限を定めた使用ルールなどを設けることが必要であろう。想定される主な利用者像は、高齢者（男性）、中高生、有職者などである。

「ロビー型」の場合、空間的には、5章における広域型（U施設）のように、各自が自由に場所を選択できるように多様な家具等を分散的に配置し、その間には空間的なゆとりやパーティションなどを設け、相互干渉を抑えるようにすることが望ましい。運営的には、利用者の自主性を尊重した滞在支援を中心とする。具体的には、無料もしくは

注 6-5) 「sociopetal」 / 「sociofugal」

Osmond(1957) が精神病院のあり方についての研究で空間デザインの2つのタイプとして提唱した概念。ソシオフーガルとは、人間同士の交流を妨げるようなデザインを指し、ソシオペタルは逆に交流を促すようなデザインを指す。

(高橋鷹志+チーム EBS 編著：環境行動のデータファイル、彰国社、2003)

低料金の設定、お茶等のサービス、飲食を可とするなど緩いルールの設定、幅広い開館日・時間の設定などが考えられ、誰もが気軽に思い思いに過ごせるよう自由度の高い柔軟な運営とすることが必要となるであろう。想定される主な利用者像は、高齢者（男性）、中高生、子育て親子、有職者などである。

「サロン型」の場合、空間的には、5章における民家等を利用した近隣型（民間）のように、親近感もてるようなソシオペタル^{注6-5}（対面型・求心的）な座席配置や、視線の交流や互いの気配が感じられるようにコンパクトでオープンな空間構成とすることが望ましい。運営的には、場所提供だけでなく、人と人との関わりの場とするために、運営者は、相談相手や安心感を与える裏方的存在、人や活動の媒介的立場など、様々な役割を担う必要がある。ただし、運営者の負担軽減と相互扶助的考えから、利用者の運営参加、サポートを得ることも有効であろう。また、気軽に居られるように利用者の自主性を尊重しつつ、交流を期待する人々に対して、仲間づくりのきっかけとなるイベントやプログラムを用意することも有効である。想定される主な利用者像は、高齢者（女性）、子育て親子、無職者などである。

「集会室型」の場合、空間的には、4章における老人福祉センター内の教養娯楽室のように、一体感を持って活動に集中できるように、求心的な家具配置とすることが望ましい。運営的には、専門的なスタッフの配置や、活動要求に応える予約システム（日時・場所の調整）、新規参加を促す活動情報の提供、広報サービス、各種講座等の企画などを行う。また、団体の活動拠点となるよう、活動に必要な資料や機材等を保管する専用ロッカーの設置などの支援が必要となるであろう。想定される主な利用者像は、高齢者（男性・女性）、主婦、無職者などである。

表 6-6 居場所の計画手法（空間・運営）

類型	自習室型	ロビー型	サロン型	集会室型
レイアウトイメージ図				
空間手法	・視線が交わらないようなソシオフォーガル（離反型）な座席配置や、家具等による仕切りを設け、個人が活動に集中できるようにする。	・各自が自由に場所を選択できるように多様な家具等を分散的に配置し、その間は空間的なゆとりやパーティションなどを設け、相互干渉を抑えるようにする。	・親近感もてるようなソシオベタル（対面型）な座席配置や、視線の交流や互いの気配が感じられるようにコンパクトでオープンな空間構成とする。	・一体感を持って活動に集中できるように、求心的な配置とする。
運営手法	・各自が主体的に特定の目的に集中できる環境を確保するため、目的外利用に対する一定の制限を定めた利用ルールなどを設ける。	・誰もが気軽に利用でき、くつろいで滞在できるように、個人個人の利用に配慮した自由度の高い柔軟な運営とする（無料もしくは低料金、飲食可とするなどの緩いルール設定、幅広い開館日・時間の設定、インターネット、新聞・雑誌、給茶等のサービスなど）。	・場所提供だけでなく、人と人との関わりの場とするために、運営者は、相談相手や安心感を与える裏方的存在、人や活動の媒介的立場など、様々な役割を担う。 ・気軽に居られるように利用者の自主性を尊重しつつ、交流を期待する人々に対して、仲間づくりのきっかけとなるイベントやプログラムを用意する。 ・運営者の負担軽減と相互扶助的考えから、利用者の運営参加、サポートを得ることが考えられる。	・専門的なスタッフの配置や、活動要求に応える予約システム（日時・場所の調整）、新規参加を促す活動情報の提供、広報サービス、各種講座等の企画などを行う。 ・団体の活動拠点となるよう、活動に必要な資料や機材等を保管する専用ロッカーを設けるなど設備的な支援を行う。
利用者像	・高齢者（男） ・中高生 ・有職者 等	・高齢者（男） ・中高生 ・子育て親子 ・有職者 等	・高齢者（女） ・子育て親子 ・無職者 等	・高齢者（男・女） ・主婦 ・無職者 等
写真				
	キャレル（閲覧室）	フリースペース	デイルーム	教養娯楽室

6-3 小活

地域において試行錯誤的に取り組まれている居場所づくりに対して有効となり得る地域施設の計画的要件を明らかにするため、多様な居場所の位置づけを整理し、空間面と運営面を一体的に捉えた居場所モデルを構築した。まず、利用特性の観点から、居場所の性格を特徴づける評価軸として、「人間関係（不特定／特定）」と「空間（滞在性・高／滞在性・低）」の2軸を設定し、これら2軸をクロスすることによって「自習室型」「ロビー型」「サロン型」「集会室型」の4タイプを見出した。また、運営特性の観点から、「利用制限（限定／自由）」と「交流活動支援（あり／なし）」の2軸を設定し、その組み合わせから4タイプに分類した。そして、両者を重ね合わせることによって空間面と運営面を一体的に捉えた居場所モデルを構築した。この居場所モデルにより多様な居場所の位置づけを明確にするとともに、既存の施設整備で想定される個人的か組織的グループかの二極だけでは不十分であることを指摘した。今後、個人と組織的グループの中間的な関係構築の場として、必ずしも機能的な目的が明確ではなくとも地域住民に外出機会を提供し、滞在でき、人々と交流できる受け皿として、滞在性の高い「ロビー型」、「サロン型」の居場所を重点的に整備していく必要があると考える。

また、居場所モデルの各タイプの特性をふまえ、計画的要件（空間要件、運営要件）について整理し、居場所を計画する上で有効となり得る具体的な計画手法として、「居場所への立地アクセス」、「居場所の配置と連携」、「居場所の複合化」、「居場所の空間と運営」について提示した。

参考文献

- 文6-1) 橘弘志：市街地と団地に展開される行動環境の比較（高橋鷹志・長澤泰・鈴木毅 編：環境と行動 第4章）、朝倉書店、2008）
文6-2) 高橋鷹志＋チームEBS 編著：環境行動のデータファイル、彰国社、2003

本章の関連論文

〈査読論文〉

- 1) 木下誠一・今井正次・加藤彰一：人間関係と滞在性からみた居場所モデルの構築と計画的要件に関する考察 - 高齢者の居場所に関する研究 -、第27回 地域施設計画研究、pp. 1-10、2009. 7

第 7 章 結論

第7章 結論

7-1 結論（各章のまとめ）

本研究では、近年の余暇時間の増大に加え、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化、青少年問題など様々な社会的背景から、地域においてその必要性が社会的に重要な課題として受けとめられている居場所に着目し、経験的で試行錯誤的に取組まれている居場所づくりに有効な計画的指針を得るため、様々な人々の居場所の実態把握及び選択特性を明らかにしてきた（図7-1）。

1) 地域住民の居場所選択特性

そもそも人々はどのような場所を居場所とし、地域施設はどのような位置づけにあるのかについて、必ずしも既往研究で明らかになっていない。そこで、第3章では、三重県の地域特性が異なる4地区を調査対象に選定し、地域住民の居場所選択の実態やニーズを、アンケート調査をもとにマクロに統計的に捉え、地域施設の選択要因について、属性別、ライフスタイル別、地域別、組織活動参加状況などの観点から分析し、地域住民の居場所の選択特性を概観した。

その結果、居場所選択の実態では、一人当たりの選択場所数は、加齢に伴い減少し、選択場所は自宅、民間施設は減少し、公共施設は増加する傾向にあり、若年層と高齢層では対照的な特徴がみられることが明らかとなった。また、施設整備状況や自然環境などの地域特性が施設選択に顕著に影響し、5つに類型化（「地域・趣味重視型」「団体活動重視型」「家族・趣味重視型」「休養重視型」「友人重視型」）したライフスタイルの観点からもタイプ別に特徴がみられた。特に、地域施設の選択は、地域活動の参加有無が関係し、参加層は公共施設を主に選択し、不参加層は民間施設を選択する傾向にあることがわかった。地域活動は主に組織的であり、個人単位で選択されるだけでなく、組織単位で選択されており、多くの団体が活動拠点を有し、主に公的集会施設を選択していた。

居場所の選択要因では、施設サービスよりも場所における人間関係やアクセス面が重視されており、居場所として地域施設に求める共通因子として、「気軽さ」「社会的」「安らぎ感」「解放感」「個人的」の5因子を見出した。「社会的」「個人的」は他者との人間関係の状態を表すことから、居場所では、物理的空間の質だけでなく、誰と過ごせる環境かが重要であることがわかった。また、人間関係は、組織活動において団体結成や新規加入の契機となる場合が多く、非活動参加者

の参加の際のハードルの一つにもなっていることが明らかとなった。

2) 高齢者施設における居場所選択特性

交通手段や経済面などで制約があり、特に地域施設における居場所整備の必要性が高いとみられる高齢者と中高生は、共通点を有する一方、所属組織の有無や身体能力、余暇時間の長さなど、対照的な性格も持ち合わせており、1) においても選択特性に違いがみられた。

そこで、第4章では、代表的な高齢者専用施設である老人福祉センターを対象に、施設における高齢者の過ごし方の実態を捉え、1) の分析により居場所選択に及ぼす影響が大きいとみられる他者との人間関係に着目し、施設及び諸室選択との関係について捉えた。

その結果、利用者の7割以上がほぼ毎日(週4日以上)利用し、常連化している実態が窺え、高齢者の過ごし方をみると、運営上、基本的に利用者の自主性を尊重していることから、利用者個人が主体的に多種の施設サービスを利用して過ごしていることがわかった。その多

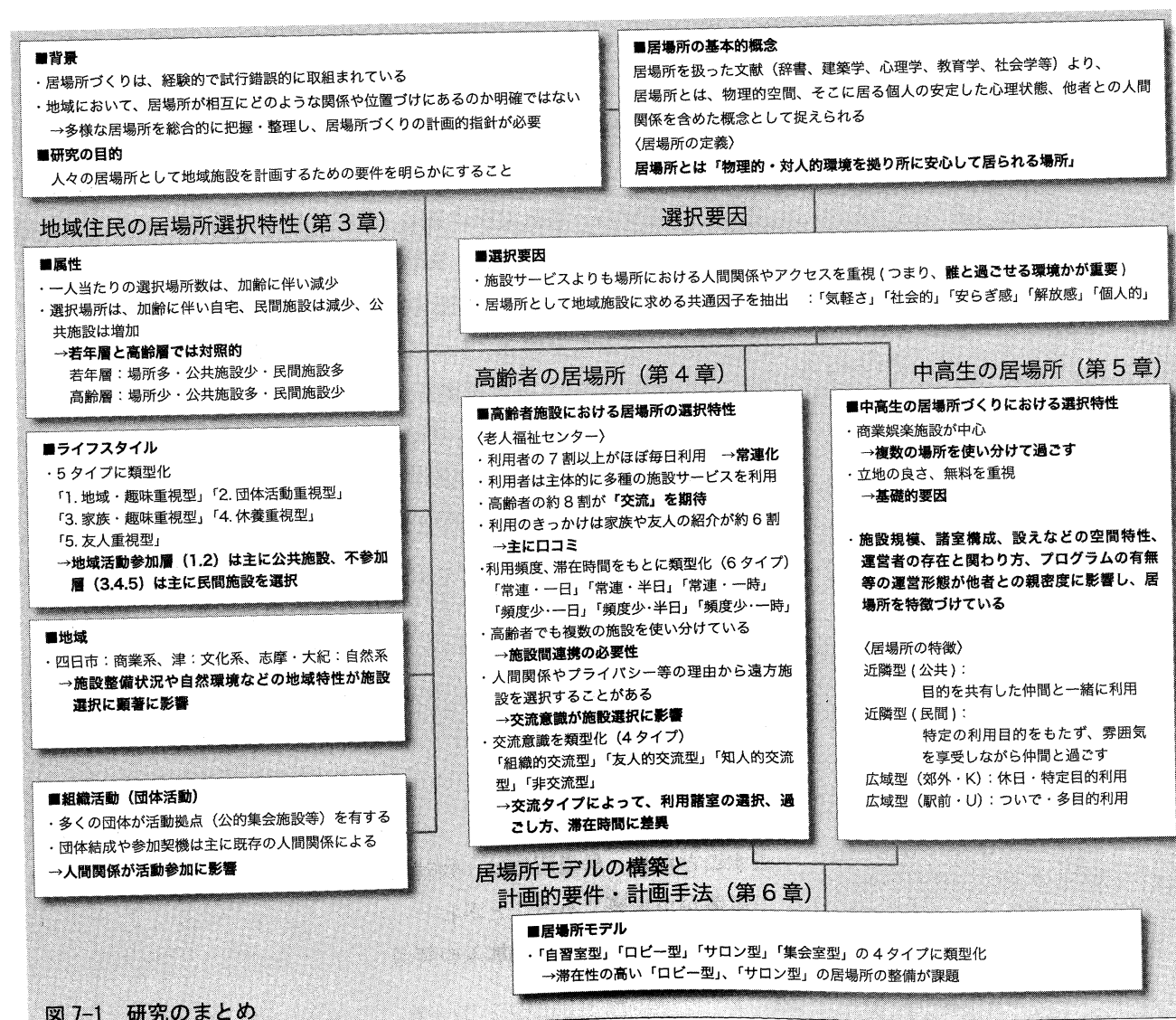


図7-1 研究のまとめ

様な過ごし方を、利用頻度、滞在時間をもとに6タイプ（「常連・一日」、「常連・半日」、「常連・一時」、「頻度少・一日」、「頻度少・半日」、「頻度少・一時」）に類型化し、整理した。

他者との人間関係と施設及び諸室選択との関係については、高齢者の約8割が「交流」を期待して訪れており、利用のきっかけも家族や友人の紹介が約6割を占め最も多く、主に口コミで利用するようになり、次第に習慣化、常連化していくとみられる。施設選択では、複数の施設を使い分けたり、居住地の最寄施設を利用せずに、人間関係やプライバシー等の理由から遠方施設を選択する実態が捉えられた。また、他者との人間関係に対する交流意識を、その親密度の度合いによって「組織的交流型」「友人的交流型」「知人的交流型」「非交流型」の4タイプに類型化したところ、交流型と非交流型では利用諸室の選択に違いがみられ、交流タイプと過ごし方の類型（上記6タイプ）や滞在時間にも特徴的な関係がみられた。

3) 中高生の居場所づくりにおける選択特性

第5章では、中高生の「居場所」について、様々な施設種、規模、設え、運営形態などを有する三重県の「青少年居場所づくり」の取組事例を対象に、施設の立地・空間、運営特性を比較分析を行うことによって把握するとともに、「居場所」の立地・空間、運営特性が他者との人間関係に及ぼす影響について捉えた。

その結果、一般の中高生の居場所選択では、身近な地域の公共施設が十分利用されず、商業娯楽施設が中心となっており、その選択要因として、立地の良さや無料であることが基礎的要因となっていることが明らかとなった。

居場所づくり行う調査対象施設を、近隣型（公共）・近隣型（民間）・広域型（K：郊外）・広域型（U：駅前）の4タイプに分類し、特徴をみたところ、近隣型は、他者と親密な関係を形成できる施設として選択され、広域型は、人間関係よりも個人の利用目的を優先する施設として選択される傾向にあり、さらに、近隣型（公共）は、目的を共有した仲間と一緒に利用できる施設、近隣型（民間）は、特定の利用目的をもたず、雰囲気を楽しむながら仲間と過ごせる施設として選択される傾向にあることがわかった。この要因として、施設規模（広域型：大規模、近隣型：小規模）、諸室構成や設えなどの空間特性、そして運営者の存在と関わり方、プログラムの有無といった運営形態が他者との親密度に影響を及ぼしており、そのことが中高生の居場所選択にも影響していることがわかった。以上をふまえ、広域型及び近隣型の「居場所」の成立条件を「立地・空間」「運営」面に分けて考察した。

4) 居場所モデルの構築と計画的要件

第6章では、今後、居場所を計画する際に有効な手段になり得る居場所モデルを構築し、計画的要件及び計画手法を提示した。居場所モデルの構築では、まず、利用特性の観点から、居場所の性格を特徴づける評価軸として、「人間関係（不特定／特定）」と「空間（滞在性・高／滞在性・低）」の2軸を設定し、これら2軸をクロスすることによって「自習室型」「ロビー型」「サロン型」「集会室型」の4タイプを見出した。また、運営特性の観点から、「利用制限（限定／自由）」と「交流活動支援（あり／なし）」の2軸を設定し、その組み合わせから4タイプに分類した。そして、両者を重ね合わせることによって空間面と運営面を一体的に捉えた居場所モデルを構築した。この居場所モデルによって多様な居場所の位置づけを明確にできるとともに、既存の施設整備で想定される個人的か組織的グループかの二極だけでは不十分であることを指摘した。また、居場所モデルの各タイプの特性をふまえ、計画的要件（空間要件、運営要件）について整理し、居場所を計画する上で有効となり得る具体的な計画手法として、「居場所への立地アクセス」、「居場所の配置と連携」、「居場所の複合化」、「居場所の空間と運営」について提示した。

7-2 今後の展望と課題

これまでの各章の考察をふまえ、今後、居場所としての地域施設計画を行う上での展望と課題について述べる。

1) 空間と運営を一体的に捉えた施設計画

従来、特に公共施設においては、施設の建設そのものが目的になり、利用方法など運営面での検討が後回しになり、結果的に有効に活用されず、「箱もの行政」がしばしば社会的問題として取り上げられている。このような課題に対し、居場所として地域施設を捉えることは、空間と運営をセットに捉えることでもあり、有効な手段になり得ると考える。つまり、居場所とは、単に物理的空間だけでなく、そこに居る個人の安定した心理状態や、他者との人間関係を含めた概念として捉えられ（1章・2章）、また、3章における地域住民の選択特性においても、施設サービスよりも場所における人間関係やアクセスを重視することを示したように、誰と過ごせる環境かが重要であるため、物理的環境の充実だけでは不十分であり、人間関係への配慮を行う上でも運営面を抜きにしては考えられないといえる。6章では、こうした空間面と運営面を一体的に捉えた居場所モデルを構築し、その計画的要件や計画指針を提示することができた。現実的には居場所モデルの4タイプのいずれかに明確に位置づけられない中間的な性格をもった居場所もあることは否定できない。しかし、居場所づくりの取組みが試行錯誤的な現状に対して、施設計画、漠然としたイメージでなく、計画論としてわかりやすく整理し、どのタイプをベースに考えていくかといった計画上の手掛かりになるという意味で意義あるものと考えられる。今後、さらに本研究で中心に取り上げた中高生、高齢者以外の属性（例えば、子育て親子など）の居場所についても分析を加えることにより、居場所モデルの計画的要件や計画指針をより確実なものにしていくことができるであろう。

2) 地域特性をふまえた施設計画

地域住民の居場所は、従来の施設計画上のコミュニティの基本単位としてきた地縁的な人間関係に縛られることなく、様々な居場所を選択し生活を送っている（3章）。高齢者が複数の施設を利用したり、良好な人間関係やプライバシーを求めて、あえて遠方の施設を利用している実態も示したが（4章）、こうしたニーズは、地域に限らず存在するものと思われる。したがって、特定の施設だけで受け入れ、利用者のニーズを満足させるのには限界があり、人間関係も閉鎖的になり

かねないため、地域全体として受け皿を用意する必要がある。つまり、利用者が主体的に自分にあった居場所を選択できるよう、地域内に多様な居場所を設置する必要がある、それらは単独で運営等を考えるのではなく連携し、有機的な関係を構築することが望ましい。偏った施設整備は、地域住民の選択肢を狭め、活動展開や継続的利用を妨げることにもなる。しかし、3章でみたように、地域住民の選択特性において、地域差は自宅、職場・学校、友人宅ではみられなかったものの、主に公共及び民間施設の選択において地域差が生じていることも事実である。本研究で取り上げた4地区では、四日市地区は商業施設、津地区は公共施設、志摩・大紀地区は自然というように地域の施設整備状況や自然環境が施設選択に影響している。居場所を計画する際には、その地域特性をふまえる必要がある。その際、公共施設や民間施設といった施設種の枠組みではなく、地区内に過剰であったり不足していたりする居場所タイプを把握し、どのタイプの居場所を重点的に整備していく必要があるかを検討することが望ましい。例えば、商業施設（ロビー型）が充実する四日市地区では、商業施設の一部をサロン型の居場所として開放したり、図書館（自習室型）や公民館（集会室型）など公共施設が充実する津地区では、公共施設の一部をロビー型として開放したりすることなどが考えられる。また、遊休化する既存施設の有効利用策として居場所を設置することもある。一方、施設数や交通手段が限られる過疎地の大紀地区の場合には、地域住民の利用頻度の高い身近な集会施設（集会室型）を、より気軽に過ごせるようなロビー型やサロン型の居場所として整備することが考えられる。このようにして、人々の日々変化する気分や状況、目的に応じて施設を自由に選択できるよう、公共及び民間施設の枠組みにとらわれず、施設相互に補完し合いながら地域全体で多様な居場所をバランスよく整備する必要があるといえる。今後、さらに具体的な地域をケーススタディとして取り上げ、地域特性をふまえた施設体系を検討する必要がある。

3) 施設種の枠組みにとられない施設計画

本研究では、従来の特定目的をもつ機能的サービスを中心とした観点ではなく、必ずしも明確な活動目的をもって利用するとは限らない居場所という観点から地域施設を捉えてきた。施設が量的に充足し、利用者の多様なニーズに応えた生活の質の重視が求められている今日、この視点は、様々な施設種を横断的に捉える視点として位置づけられる。つまり、どういう目的機能をもった施設をつくるかではなく、どういう場（居場所）を成立するために必要な機能は何かというように、手段と目的をはき違えることなく機能を柔軟に考える生活者の立

場に立った視点となる。3章の地域施設の施設像の分析においてみたように、同じ施設種でも人によって異なる施設像を抱いたり、逆に、異なる施設種であっても同様の施設を抱いたりする。そこで、6章で提示した居場所モデルの4タイプ（「自習室型」「ロビー型」「サロン型」「集会室型」）は、各施設種により構成された地域施設体系を見直し、再構築する手掛かりになると考える。特に、従来、施設計画上、機能的な目的が曖昧なため位置づけや扱いが疎かになりがちであった「ロビー型」「サロン型」は、ともに地域住民に外出機会や滞在場所を提供し、個人と組織的グループの中間的な関係構築の場として、他のタイプの居場所と同様、重要な位置づけにあることを示すことが出来た。今後、さらに居場所モデルを適用した具体的実践事例において居場所モデルの検証を行う必要がある。

参考文献・研究業績

参考文献一覧

第1章

- 文1-1) 学校不適応対策調査研究協力者会議：登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して－、1992
- 文1-2) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、学陽書房、2001
- 文1-3) 久田邦明 編：子どもと若者の居場所、萌文社、2000
- 文1-4) 新村出 編：広辞苑（第6版）、岩波書店、2008
- 文1-5) 松村明 編：大辞林（第3版）、三省堂、2006
- 文1-6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編：日本国語大辞典（第二版）、小学館、2000-2002
- 文1-7) 山田あすか：ひとは、なぜ、そこにいるのか「固有の居場所」の環境行動学、青弓社、2007
- 文1-8) 藤竹暁 編：現代人の居場所、至文堂、2000
- 文1-9) 住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、九州大学出版会、2003
- 文1-10) 芹沢俊介：座談会 居場所（藤竹暁 編：現代人の居場所）、至文堂、2000
- 文1-11) 佐々木英和：ケータイ・インターネット時代の自己実現感（田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、5章）、学陽書房、2001
- 文1-12) 加藤仁：定年後 豊かに生きるための知恵、岩波書店、2007
- 文1-13) 水月昭道・馬場健彦・南博文：
下校時の帰宅路に見られる子ども道草行為とみち環境との関係（住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、第10章）、九州大学出版会、2003
- 文1-14) 高橋鷹志：子どもを育てるたてもの学、チャイルド本社、2007
- 文1-15) Ray Oldenburg: The Great Good Place, Marlowe & Company, 1999
- 文1-16) ハワード・シュルツ：スターバックス成功物語、日経BP社、1998
- 文1-17) 柳澤忠ほか：新建築学大系21 地域施設体系、彰国社、1984
- 文1-18) 鈴木毅・金丸まや・渡海裕司：中高生のための施設とその利用実態に関する研究（住田正樹、南博文 編：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、第12章）、九州大学出版会、2003

第2章

- 文2-1) 高橋鷹志：子どもを育てるたてもの学、チャイルド本社、2007
- 文2-2) 田中治彦：社会教育・生涯学習2 「居場所」の心理学、2002、www.rikkyo.ac.jp/~htanaka/05/Shakyo2_0504.html
- 文2-3) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、学陽書房、2001
- 文2-4) 李乙圭、鈴木毅、高橋鷹志：街の居場所としての地域施設、日本建築学会学術講演梗概集、E-1, 239-240, 1995
- 文2-5) 小松尚、岩岡弘文、加藤彰一、谷口元：移転改築前後の環境認識比較による居場所としての病院外来待合に関する研究、日本建築学会計画系論文集、513, 151-158, 1998
- 文2-6) 日野大助、大橋美布、真野洋介、初見学：外科病棟における面会者の居場所に関する研究 その1 面会者が患者の傍から離れているときの面会者の居場所、日本建築学会学術講演梗概集、E-1, 447-448, 2004
- 文2-7) 中井孝幸、今井正次、大前裕樹：図書館利用者の館内行為と滞在場所からみた居場所の形成 滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究 その1、日本建築学会学術講演梗概集、E-1, 395-396, 2001
- 文2-8) 小松尚、辻真菜美、洪有美：地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況 地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究（その1）、日本建築学会計画系論文集、611, 67～74, 2007
- 文2-9) 田中康裕、鈴木毅、松原茂樹、奥俊信、木多道宏：コミュニティ・カフェのし

- つらえ方についての考察 運営者の発言の分析を通して, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 935-936, 2006
- 文 2-10) 李威儀、鈴木毅、高橋鷹志: 台北市竜山寺の利用パターンからみた地域における場所的イメージの考察 都市の居場所としての公的空間に関する研究 その1, 日本建築学会学術講演梗概集, E, 1111-1112, 1993
- 文 2-11) 込山敦司、乙黒佳子、春木周作、初見学、高橋公子: 体験者の居場所と姿勢に観察される床段差の影響 床段差のある空間の心理的・機能的評価に関する研究 (その2), 日本建築学会梗概集, E-1, 799-780, 1996
- 文 2-12) 彭瑞二、橋本雅好、西出和彦: 間仕切が体験者の居場所に与える影響に関する基礎実験 室空間における間仕切に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, 535, 131-137, 2000
- 文 2-13) 森保洋之、山田直美: 家族のコンタクトと子供の居場所の関係について 子供を中心にみた住空間の計画に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 23-24, 2001
- 文 2-14) 柳澤要: 小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について - 児童の行動場面から見た空間解析に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, 424, 31-42, 1991
- 文 2-15) 伊藤俊介、長澤泰: 小学校児童のグループ形成と教室・オープンスペースにおける居場所選択に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 560, 119-126, 2002
- 文 2-16) 星野武史、倉斗綾子、力安拓、小島千知、上野淳: 小学校の自由時間における児童の居場所と行動に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 299-300, 1999
- 文 2-17) 山田あすか、上野淳、登張絵夢: 園児の固有の活動場面の成立に影響する環境要素の分析: 保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集, 587, 49-56, 2005
- 文 2-18) 長谷夏哉、斎尾直子: 都市に育つこどもたちの放課後の居場所づくりに関する研究: 安全安心と豊かな空間確保 両立の視点から, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 549-550, 2006
- 文 2-19) 山崎陽菜、定行まり子、淵本花恵: 学童クラブと全児童対策からみた放課後の子どもの居場所, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 189-190, 2007
- 文 2-20) 松橋圭子、大原一興、藤岡泰寛、三輪律江、谷口新: 地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究: 東京都三鷹市における外出調査より, 日本建築学会計画系論文集, 600, 25-32, 2006
- 文 2-21) 垣野義典、須田、眞史、初見学、長澤泰: 子どもの「学校外の居場所」における空間構成 日本のフリースクールにおける環境行動研究, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 87-88, 2002
- 文 2-22) 小澤紀美子: 中学生の生活空間に関する調査研究, 家庭および地域における居場所について, 日本建築学会学術講演梗概集, E, 113-114, 1986
- 文 2-23) 周博、西村伸也、岩佐明彦、高橋百寿、和田浩一、長谷川敏栄、林文潔、渡邊隆見: 単位制高等学校の建築計画に関する研究: 居場所の特性と情報伝達の仕組み (その1), 日本建築学会計画系論文集, 553, 115-121, 2002
- 文 2-24) 常陰有美、倉斗綾子、新田佳代、上野淳: 中学校における生徒の場所の想起と居場所の選択に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 604, 31-37, 2006
- 文 2-25) 定行まり子、根橋由里子: 児童館における中高生対応についての考察: 地域における中高生の居場所に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, 577, 49-55, 2004
- 文 2-26) 金丸まや、渡海裕司、鈴木毅、舟橋國男、木多道宏: 佐倉市ヤングプラザの計画プロセスの分析 中高生の居場所づくりの試みとに関する研究 その1, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 555-556, 2000
- 文 2-27) 古賀紀江、高橋鷹志: 一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察 高齢者の住居における居場所に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, 494, 97-104, 1997
- 文 2-28) 山田あすか、上野淳: 痴呆性高齢者グループホームの環境及び入居者の固有の居場所とその変容に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 592, 93-100, 2005
- 文 2-29) 牧野唯、今井範子: 高齢期における交流からみた「精神的居場所」の特徴と居住形態との関係 奈良県橿原市今井町の場合, 日本建築学会計画系論文集, 522, 131-138, 1999
- 文 2-30) 今井範子、阿部文佳、伊東理恵: 街かどデイサービスの実施状況 - 大阪「街かどデイハウス支援事業」運営者に対する調査から - 自立高齢者の生活を形作る居場所に関する研究 その1, 日本建築学会学術講演梗概集, E-1, 183-184, 2005

- 文 2-31) 桧垣牧子、福田由美子：高齢者の居場所としての児童館活用の可能性 高齢者の生活拠点施設に関する研究 (3)、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、149-150、2006
- 文 2-32) 藤井久美子、小伊藤亜希子：住まいにおける女性の居場所、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、33-34、2007
- 文 2-33) 山崎さゆり、高橋公子：夫婦の居場所観と生活意識の関係について、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、171-172、1995
- 文 2-34) 保坂裕信、浅井薫、小野寺昭、吉村彰：小学校教員の生活行動と心理からみた教員の居場所について (その 1)、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、57-58、2001
- 文 2-35) 山田あすか、上野淳：知的障害者入所更生施設における入居者の生活様態と固有の居場所に関する研究、日本建築学会計画系論文集、588、71-78、2005
- 文 2-36) 孫イブン、今井正次、木下誠一、恒川和久、谷口元、田中裕伸：学生の居場所の視点からみる大学の共通教育ゾーンに関する研究：M 大学と N 大学の利用実態の比較を通して、日本建築学会学術講演梗概集、E-1、365-366、2006

第 3 章

- 文 3-1) 磯村英一：人間にとって都市とは何か、NHK ブックス、1968
- 文 3-2) Ray Oldenburg: The Great Good Place, Marlowe & Company、1999
- 文 3-3) 松橋圭子、大原一興ほか：地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究 - 東京都三鷹市における外出調査より -、日本建築学会計画系論文集 第 600 号、pp. 25-31、2006. 2
- 文 3-4) 金丸まやほか：中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その 1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 555-558、2000. 9、E-1 分冊、pp. 1097-1098、2001. 9
- 文 3-5) 浅沼由紀、天野克也、谷口汎邦：都市居住高齢者の生活特性と余暇関連施設の利用特性について - 都市居住高齢者の地域施設利用構造に関連する研究 その 2 -、日本建築学会計画系論文集 第 492 号、pp. 119-125、1997. 2
- 文 3-6) 林田大作、舟橋國男ほか：職場周囲に構築されるサードプレイスに関する研究 - 神田地域・品川地域の比較分析 -、日本都市計画学会学術研究論文集 No. 38-3、pp. 433-438、2003. 11
- 文 3-7) 鈴木毅ほか：「好きな場所」に見る人と環境の関わり方の研究、日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 807-808、2000. 9
- 文 3-8) 李乙圭、高橋鷹志、鈴木毅：社会的交流からみた地域施設の利用しやすさに関する考察 - 東京都の社会教育施設のケーススタディー -、日本建築学会計画系論文集 第 493 号、pp. 145-152、1997. 3

第 4 章

- 文 4-1) 鈴木成文ほか：「地域老人福祉施設に関する基礎的研究 (その 1～4)」、日本建築学会大会梗概集、E 分冊、pp. 843-850、1977. 10
- 文 4-2) 浅沼由紀ほか：「都市居住高齢者のための地域施設計画に関する研究 (その 1～5)」、日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 7-12 1997. 9、pp. 435-438 1998. 9
- 文 4-3) 石飛知華ほか：「老人福祉センターの現状と整備の方向性 過去 10 年間に開設された老人福祉センターを対象として」、日本建築学会計画系論文集 第 574 号、pp. 25-32、2003. 12
- 文 4-4) 田中裕基ほか：「自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究 - 多摩市コミュニティセンター内の高齢者スペースにおけるケーススタディー -」、日本建築学会計画系論文集 第 562 号、pp. 165-172、2002. 12
- 文 4-5) 菅野仁：ジンメル・つながりの哲学、日本放送出版協会、2003

第 5 章

- 文 5-1) 田中治彦 編：子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ、学陽書房、2001
- 文 5-2) 金丸まや他：中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その 1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 555-558、2000. 9、E-1 分冊、pp. 1097-1098、2001. 9
- 文 5-3) 定行まり子他：中高生の居場所に関する研究 その 1～7、日本建築学会大会

梗概集、E-2 分冊、pp. 29-34、2000. 9、E-1 分冊、pp. 145-146、2001. 9、E-1 分冊、pp. 167-172、2002. 8

定行まり子他：児童館における中高生対応についての考察－地域における中高生の居場所に関する研究 その1－、日本建築学会計画系論文集 NO. 577、pp. 49-55、2004. 3

文 5-4) 田中康裕他：高校生の放課後における場所利用に関する研究

日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 1095-1096、2001. 9、

田中康裕他：地域における子ども・若者にとっての異世代の顔見知りの人との関係－社会的関係からみた地域環境に関する考察－、日本建築学会計画系論文集、NO. 595、pp. 65-72、2005. 9

文 5-5) 張他：新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について－高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究－、

日本建築学会計画系論文集 NO. 589、pp. 25-32、2005. 3

文 5-6) 小松尚他：地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究 その1～3、日本建築学会大会梗概集、E-1 分冊、pp. 1～12、2005. 9

第 6 章

文 6-1) 橋弘志：市街地と団地に展開される行動環境の比較（高橋鷹志・長澤泰・鈴木毅 編：環境と行動 第 4 章）、朝倉書店、2008）

文 6-2) 高橋鷹志＋チーム EBS 編著：環境行動のデータファイル、彰国社、2003

研究業績

関連論文（査読付き論文）

- 1) 木下誠一・池谷辰仁・今井正次, 『中高生の居場所の成立条件に関する研究 - 三重県における居場所づくり事例の分析を通して -』, 日本建築学会計画系論文集, NO. 623, pp. 39-46, 2008. 1
- 2) 木下誠一・矢部亮・今井正次, 『居場所としての地域公共施設のあり方に関する研究 - 三重県における居場所選択特性と地域差 -』, 日本建築学会計画系論文集, NO. 628, pp. 1205-1212, 2008. 6
- 3) 矢部亮・今井正次・木下誠一・西本雅人, 『余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備要件 - 生涯を通じての同伴形態の変化に着目して -』, 日本建築学会地域施設計画研究, 第 26 回, pp. 89-98, 2008. 7
- 4) 木下誠一・今井正次, 『老人福祉センターの利用意識からみた居場所選択特性 - 高齢者の居場所に関する研究 -』, 日本建築学会地域施設計画研究, 第 27 回, pp. 147-156, 2009. 7
- 5) 木下誠一・今井正次・加藤彰一, 『人間関係と滞在性からみた居場所モデルの構築と計画的要件に関する考察 - 高齢者の居場所に関する研究 -』, 日本建築学会地域施設計画研究, 第 27 回, pp. 1-10, 2009. 7

口頭発表

- 1) 木下誠一・池谷辰仁・今井正次, 『三重県青少年居場所づくり事業の居場所形態 地域施設における青少年のための居場所づくりに関する研究 その 1』, 日本建築学会東海支部研究報告書 第 43 号, 名古屋工業大学, pp. 597-600, 2005. 2
- 2) 木下誠一・池谷辰仁・伊藤良・今井正次, 『広域型地域施設における利用者の居場所形成 利用者の社会的居場所としての地域施設に関する研究 その 1』, 日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿） E-1 分冊 近畿大学, pp. 411-412, 2005. 9
- 3) 木下誠一・今井正次・高井宏之・池谷辰仁・伊藤良・松田慎也・吉岡大輔, 『地域活動の不参加形態から見た生活スタイルと地域差（市町村合併等による広域化をふまえた地域施設計画に関する研究 その 3）』, 日本建築学会東海支部研究報告書 第 44 号 豊橋科学技術大学, pp. 529-532, 2006. 2
- 4) 木下誠一・池谷辰仁・今井正次, 『中高生の利用意識からみた地域施設の居場所選択』, 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東） E-1 分冊, pp. 387-388, 2006. 9
- 5) 木下誠一・今井正次, 『老人福祉センターの利用意識からみた施設選択特性 高齢者の居場所に関する研究』, 日本建築学会大会学術講演梗概集（中国） E-1 分冊, pp. 349-350, 2008. 9

参考論文

- 1) 西本雅人・今井正次・木下誠一, 『保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 - 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究 -』, 日本建築学会計画系論文集, NO. 601, pp. 47-55, 2006. 3
- 2) 藤枝秀樹・木下誠一・今井正次, 『高齢者施設居住における接客空間のしつらえ方に関する研究』, 日本建築学会計画系論文集, NO. 632, pp. 2057-2065, 2008. 10

おわりに・謝辞

おわりに

本研究は、助手に着任して以降の約6年間の成果をまとめたものです。以前の設計事務所での実務から一転して研究活動を中心に取り組むようになり、当初は慣れない研究方法などに戸惑いを感じていましたが、先生方の御指導や研究室の学生の協力などもあって、何とかここにまとめることができました。

居場所というテーマは、空間の機能的、形態的操作に関心が向きがちな設計・計画手法に違和感を感じていた私にとって、直観的にその答えを秘めた魅力的なキーワードに思え、関心をもつようになりました。しかし、居場所は、人によって様々な解釈がなされ、心理的な意味合いも含むことから、定量データとして客観的に捉えにくく、研究テーマとして十分扱うことができるかどうか正直いって不安でもありました。

これといった確信のないまま研究を見切り発車することになりましたが、その後、地域の居場所で過ごす利用者や運営者の声に直接耳を傾けるにつれて、その居場所の重要性や利用者にとっての意味の多様性に気付かされるとともに、物理的空間や施設の機能はあくまで居場所で過ごすための手段やきっかけに過ぎず、もっと利用者個々人の気持ちに寄り添う計画が必要であることを実感するようになりました。そして、地域には居場所と呼べる場所が少ないことから、もっと地域住民が自分に合った居場所を気軽に選択でき、過ごせるような地域環境を計画するにはどうすれば良いかを考えるようになりました。それが、本研究に込めた想いでもあります。6章で提示した居場所モデルが今後の居場所づくりの一助となれば幸いです、さらに研究も実践の場を借りて検証していきたいと思っています。

謝辞

本研究は、三重大学・今井正次名誉教授、三重大学・加藤彰一教授の御指導のもとにまとめたものです。お忙しい中、終始変わらぬ御指導を賜りました今井正次名誉教授には、あらためて心より深くお礼申し上げます。また、加藤彰一教授には、本論文をまとめるにあたり、大変貴重な御指導と御鞭撻を賜りました。ここに深く感謝致します。

副査の三重大学・浦山益郎教授には、D論ゼミへの参加機会を与えて頂き、客観的な視点から論の展開等についての的確な御助言を賜りました。副査の三重大学・石川幸雄教授には、研究の有効性に関する御指摘と示唆に富む御意見を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

名城大学・高井宏之教授、三重大学・浅野聡准教授、三重短期大学・岩田俊二教授、中井加代子助手には、日頃から温かい励ましのお言葉と御配慮を賜り、愛知工業大学・中井孝幸准教授には、博士論文のまとめ方などの御助言を頂きました。心より感謝致します。

本研究のテーマである地域の居場所について問題意識を持つに至った背景には、大学時代や設計事務所時代の恩師の方々の教えがあったことと思います。千葉大学・北原理雄教授には、都市や建築空間における人々の生活・アクティビティの重要性を教わり、芝浦工業大学・曾根幸一名誉教授には、都市と建築をつなぐ横断的な視野の重要性を教わりました。このことが地域における人々の居場所のあり方を問い直すきっかけとなりました。ここに謹んでお礼申し上げます。

D論ゼミメンバーである藤本和弘氏（三重県）、藤井信雄氏（四日市市）、安藤亨氏（三重県）の諸氏には、多くのご指摘や参考意見を頂戴しました。今井研究室の方々には、本研究をまとめるにあたり、色々とお世話になりました。藤枝秀樹氏には、公私にわたり様々なご相談にのって頂き、西本雅人氏には、日頃から研究に対する助言や支援を頂きました。池谷辰仁氏と矢部亮氏には、共同研究者として様々な調査分析や有意義な議論等、御協力を頂きました。その他、アンケートの配布・集計作業において御協力頂いた高井研究室や三重県建設技術センターの方々、ご回答を寄せて下さった施設職員や地域住民の皆様には感謝致します。最後に、かつて想像もしなかった今の人生に橋渡しをして下さった設計事務所時代の先輩・金丸宜弘氏に謹んで感謝致します。

2009年7月

木下 誠一